

二 三種の神器の威徳を示すもの

熱田大明神の御本地

田村將軍

高うねち



(寛文古畫) 堺町芝居芝居所(所載)

寛文五、初夏

筑後代次虎之助正本

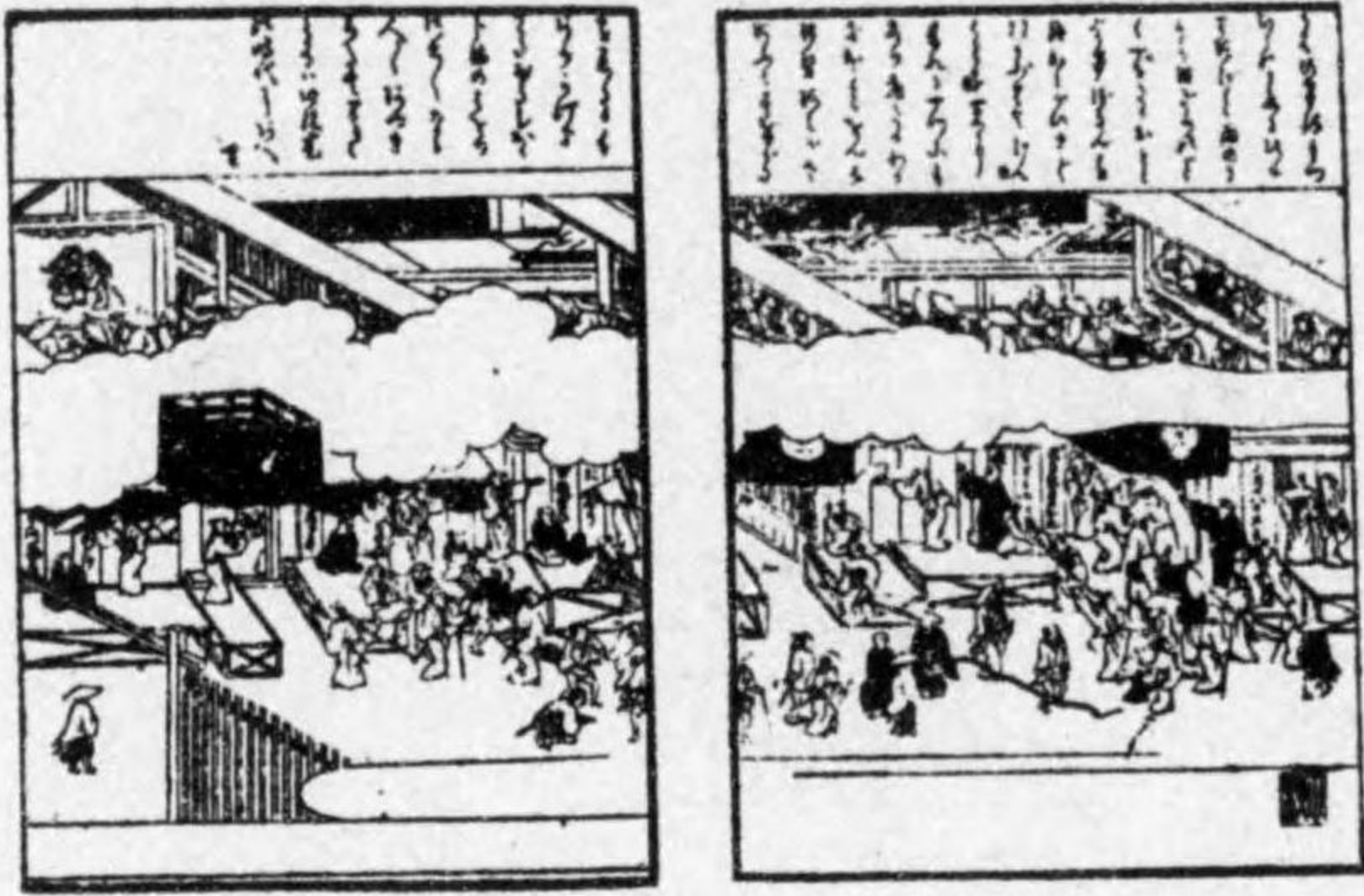
寛文十一年六月

和泉太夫 正本

寛文頃

和泉太夫 正本

熱田大明神の御本地 此曲は日本武尊の熊襲及び東夷御征伐記であるが、其三段目に於て、當時駿河國に盛へた倭臣秦勝正が、日本武尊を狩に御誘ひ申し、火を放つて尊を討たうとすると、折柄風烈しく餘炎の爲に尊は危地に立たせられることとなる。此時尊が岩陰により給ふと、「大神宮より給はつた寶劍が己れと抜け出、裾野の草を四方八方確伏する、勝正叶はじと逃ぐる所を寶劍追かけ、勝正が細首宙に打落し、尊の前に飛返るのである。」それから其六段目は、全く「平家物語」の劍巻によつたものであるが、新羅王が沙門を遣して、日本にある三國無双の名劍を盗ませようとする場である。沙門は「尾張の熱田に参り、一七日行ひ、寶劍を盗取、五條の袈裟に包んで逃げ」と、「寶劍己とぬけて五條の袈裟を突破り、元の社に歸」るのである。沙門は「立歸つて二七日行ひ、寶劍を盗み、七條の袈裟に包んで出けれ



(一)肥前座 (二)和泉太夫座 (三)土佐少座 (四)狂言盡

ば、此劍又七條の袈裟をも突破り、元の社に立歸る」のである。沙門今度は九條の袈裟に包んで逃げると、劍も九條の袈裟はやぶり得ぬが、筑紫の博多にて沙門が舟に乗らうとすると「天照大神の神勅にて住吉の大神海上に現れ、異國の沙門やまじと蹴殺し給ひ、寶劍を奪取、せつなが間に尾張の熱田に飛來り、内陣に納め、消すが如くに失せ給ふ」のである。再び新羅の將軍生不動が七つの劍をもつて來り、熱田の内陣に忍入つて寶劍を盗取らうとすると、日本武尊の神靈が現れ出て、生不動を蹴殺し、七つの劍を奪取り、直に内陣に納め給ふ。之を熱田の八劍といふ。かくて「熱田大明神の御神體日本武尊の神徳有難し共中々貴賤上下押なめ感ぜぬものはなかりけれ」と曲は結ばれてゐるが、要するにこれ三種の神器の一たる寶劍の威徳を高唱したものに外ならぬのである。

高うねちと田村 『高うねち』も和泉太夫の正本であるが、これも

亦神武天皇の御東征記の一種である。かうして和泉太夫が「日本大王」と共に、神武天皇の御東征記二種を語つたことも興味のあることながら、本曲の初段には、高うねちの命等が、毒蛇の體內から生れた大龍小龍の兄弟と謀つて、神武天皇を滅ぼさうとしてかゝると、三種の神器は大活躍を始め、鏡は楯、神璽は猛火の玉となり、寶劍は自ら鞘を

はなれて、敵の劍と渡り合ひ、先づ大龍小龍を滅ぼすのである。云ふまでもなく、これ神武天皇の御稜威と三種の神器の御威徳とをたゞへたものである。

又前にも述べた如く、和泉太夫の正本「田村將軍」にて、田村丸が鈴鹿山の魔王退治に向ふに方つて御劍を賜はると、田村丸が「ことには此寶劍を預り奉る上は、如何なる惡魔外道も障礙の力何にかない奉らん」といつてゐるが、その御劍といふのも、三種の神器といつてはないが、蓋し同様の威力ある寶劍を意味し、日本に禍するものを巧に征伐し得る神劍と見てよからうと思ふ。云ひかへれば之れ神の力、皇威の力、國の力のこもつた御劍なのである。かういふ靈劍の威力が之等の曲によつて、觀客の頭へはつきりとつきこまれたことは疑ふ餘地のないことである。

三 皇室皇位の尊嚴を高唱するもの

宇治の姫切

明曆四歲猛春

江戸和泉太夫正本

公平末春いくさ論

萬治三、三月

天下一大和掾正本

後醍醐天皇

萬治頃

大織冠魔王合戦

寛文二、卯月

頼義北國落

寛文頃

天下一大和掾正本

源平敵討の遺恨

寛文八、菊月(?)

天下一播磨掾正本

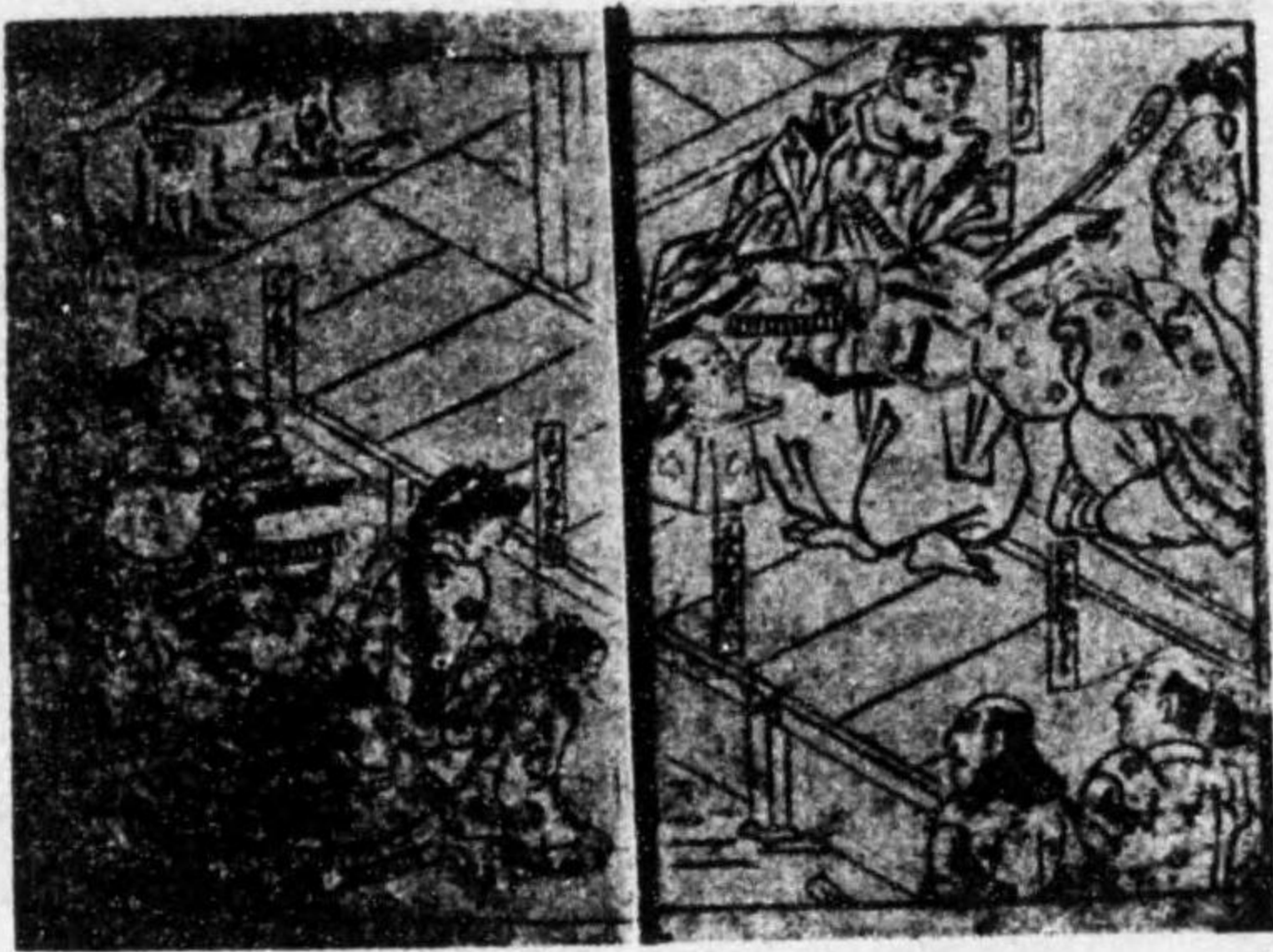
和泉太夫の姫切 和泉太夫の殘存曲としては最初のものである「宇治の姫切」の三段目に於て、源頼信は、まだ幼少ながら、父滿仲と共に禁裡守護の任に當りながら、窮地に陥つて逃亡をすゝめられると、「武將たるべき身が人よ

り先に落ちたりと諸人のあざけり末代までの家のきず、されば一命にかへても惜むは武士の家名にて候」といつて、先づ主上を都から落し參らせ、あとから斬つて出て津の國に走るのである。やがて逆賊らしいんが、太子もろともに御門を瀬田へ送つて、長くも不敬に及ぼうとするを見ると、民は皆御門の御安否を御心配申あけて玉顔を拜し奉らうとする。乃ち御輿から御門を下ろし奉ると、おいたはしや御門は御聲高らかに、「朕萬乗の位をうけ、四海の政私なしと思へども、誤る所あればこそかやうになりゆく、是逆臣のわざならず、天の罰する刑なり、世をも人も恨むまじと思へども、神武天皇より五十六代、十善の帝にためしもなき崩御を遂げ、末世の記録にとまらんことこそはかなけれ」と長くも仰せられて、なほ逆臣をお憎みなく御身のお過を天の罰する所と御諦めあらせられる貴い御心根を思ひ奉ると、民皆御聲をきくにたへず、歎のあまりに自害するのである。皇室を尊崇し、皇位の神聖なるを思ふにあらずして、誰か斯かる記述をするものがあらう。やがて危機一發といふ時に方つて、一人の尼公が薄衣をつけた四五人の上臈をつれて、御門に對して昔のよしみあるもの、お名残を惜み奉りたいからといつて近づく。薄衣をとつて見ると、それは頼光と四天王等である。かうして彼等は巧に御門を救ひ奉るのであるが、四天王等を導いた尼公といふのは、天然から來た女龍王で、弘法大師に招かれ、天子の守護として來てゐるもので、「今御門の難の救はん爲、かに姿をあらはしたり、疑をさんぜよと、其丈はたひろの大蛇となり、神泉苑へ」入るのであるが、其後頼光等は七條のもんくわん法師の助をかり、大般若箱にかくれて、無道者らしいしんを討滅するのである。徳川氏全盛の時代であり、動もすれば將軍あつて皇室あるを忘るゝもの多き時代に、徳川氏の祖先源氏に關係ある作といひながら、かうした皇室に對する尊崇の念厚き作の書かれたといふことは注目すべきことである。

皇室に対する忠誠 「公平末春いくさ論」に於ても、左大将から、一宮と共に逆心ありと譏奏された頼義は、罪がないといつても、一宮をお匿い申してゐる以上、御門の逆鱗は止むまい、といつて御門に弓を引奉るのは恐懼の至だから、一旦都を退かうといつて、やがて苦心の後に左大将を攻めると、かなはぬと見た左大将は、折柄御門を山門へ落しまらせんとしてゐたが、忽然御門の御輿をすてゝ逃げてしまふ。一宮と頼義は急ぎかけつけて「御輿の前にひざまづきかうべを地につけの給ふは、全くそれがしが逆心にては候はず、いそぎ大裡へ還幸なり、なをく萬機の政をとりをこなはせ給ふべし」といつて、一宮も頼義もお懐しさ悲しさに、涙を流して忠誠の心を盡すのである。又同じ曲に於て頼義が熱を病んで、醫藥祈禱といろくの手を盡して甲斐なき臨終に際しても、彼は其子八幡に向つて、「いかに八幡、汝おさなくとも、父が遺言たしかに聞き、宮に忠孝奉り、四天王が諫言は、父が云ふぞと心得て、少もそむくことなかれ」といつて、大に忠孝の道を誡めてゐるのである。

「頼義北國落」も之と同じ趣向にて、師氏の譏奏によつて討伐を蒙ることになつた頼義は、其儘師氏軍に抗するのは皇軍に抗することゝなつて長多いから、一旦都を落ちて、機を見て罪なきを奏上しようといつて、北國に落のびるのであるが、途中にて公平はいふ。「それ日本は神國なり、正しきものゝかうべに宿り給ふ佛神はあらざるか、何とて是非をことはり給はぬぞ、月日はへだつとも憎しと思ふ師氏を安穩におかばこそ……」。すると頼義は「只何事も前世の業、身にあやまりのあらざれば遂には正しきの花木すへに咲かざらんや」といつて若狭に下り、そつの大納言の助を得て、師氏討伐の輪旨を賜はり、再び昔に歸ることが出来るのである。かうした頼義の態度には、皇室尊崇の念と忠義の誠心が明かに認められるのである。

「大織冠魔王合戦」は、鎌足が我子を犠牲にしてまで、盲人に装ふたりして朝敵入鹿を退治する苦心物語であるが、「後醍醐天皇」は、兒島高德の忠動物語である。「太平記」では六條忠顯が隠岐にて天皇を奪ひ奉り、伯耆に御



（版戸江） 圖三第 「戦合大州甲」

上陸後は、名和長年が帝を奉じて都に攻上ることになつてゐるが、本曲ではそれも専ら高德の行動として、忠顯や長年はあまり活躍しないことになつてゐる。要するにこれ等は皆皇室に対する忠誠を説いたものである。

大忠を説く 「源平敵討の遺恨」に於ては、頼光四天王等が不逞の臣大江清村を追うて捕へようとする時、清村は巧に逃げ出して木の芽城に隠れてしまふ。折から越前の瀧山大膳は八十五騎を以て駆けつけ、清村との約束で味方に來たといふが、頼光は之をきくと、

「さて一天の君の御恩は軽きや重きや、それ四恩の中にすぐれことに重きは天子の恩と記されたり、よく工夫いたされよ」

といつて、友人に対する義理と、大君に対する大忠とでは如何に差別があり、何れを真に重んずべきかを説いて、遂に大膳を大悟せし

めて身方にするのである。

これ等の皇室に対する美はしい忠誠が先例となつて、延寶期に至つて、「日本王代記」や「神武天皇」や「和氣清

磨」などが現れるのである。

四 身替の誠心を取入れたもの

ゆり若大臣	寛文二、二月	日暮小太夫正本
常陸坊海尊	寛文二、八月	天下一出羽掾 正本
公平法問評	寛文三、九月	天下一上總掾 正本
多田満仲	寛文八、六月	
佐野源左衛門	寛文十、七月	

二つの女の身替物 謡曲『仲光』に初めて現れた、忠臣が主君の身替となつて、主君を助けるといふ美しい物語は既に、前期にも現れてゐることを説いたが、『ゆり若大臣』や『佐野源左衛門』に於ては、それが美しくも、女の身替となつて現れてゐる。百合若がむくり征伐をして、戦ひ勝つて眠つてゐる間に、其臣の別府兄弟が悪心を起して、主君を置去りにして歸國し、お家を横領するのみか、主君の御臺まで手に入れようとして迫るが、御臺が聴入れぬ爲に、臣の忠太に命じて池へ沈めさせようとする。忠太は困りはて、御臺を我家につれゆき、事實を物語ると、忠太の妻は御臺の身替になりたいといふ。悲と嘆のうちに、女房は御臺と争うて、身替の犠牲となつて御臺を助けるのである。『佐野源左衛門』の女身替は、之とは幾分趣を異にし、我が良人平内兵衛が悪事に加擔し、兄佐野源左衛門常世を殺して、その所領を奪はうとする陰謀を知ると、平内の妻は事實をあかして兄を落ちさせようとするが、兄は容易にそれをきかぬ。常世の妹は極力すゝめて兄を落した後、後難を恐れ、袈裟の例にならつて、自ら兄の寢所に入

り、身替の犠牲となつて兄を助けるのである。かくと知つた平内兵衛は驚いて佐野の後を追ふが、其時隠れてゐた佐野は飛出して、人間であるならば仇討事件に關して、我が爲に御前をも申なほすべきであるに係らず、義兄を殺して領地を横領しようとは憎むべきだ、一切を鎌倉に訴へるといつて、平内を討殺し、妹の仇を報するのである。

海尊と法問評 『常陸坊海尊』では、義經の二男が、兵をあげて天下に覇を争はうとして、熱田の大宮司に養はれた悪七兵衛景清の二子景平景時に身方を求めると、二子は之を快諾する。鎌倉では土肥遠平の謀にて、今は九州に流されてゐる景清を迎へにやり、父親をだしにして二子を擒にしようとする。之を知ると景平景時は、父を殺されてはとあつて、兄弟互に身替にならうと争ふのである。其處にも身替の美しさはあるが、有ゆる身替仕組の中で、最も成功を収めてゐるのは『公平法問評』の身替である。しかもこの作は寛文期の淨瑠璃中『頼光跡目論』と共に、最も有名な二篇であるから、此處に其大體を要約することにする。

源頼義は佛法を信すること深く、有爲轉變の世をはかなみ、三子の中、加茂次郎義宗を僧として、自分の亡き後を弔はせようとし、満容上人に剃髮の役を託する。僧となることを欲しない次郎は公平にたよる。公平はその依頼を快諾して、次郎出家の動機が満容の勧誘にあるとなし、満容を訪れて大宗論を試み、斷じてその剃髮を許さぬといふ。萬民尊崇の的たる満容上人に對する公平の無禮を知ると、頼義は怒つて次郎公平の討伐を義家に命ずる。義家は國綱を招いて、兄次郎を討伐する苦痛を述べて策を講ずる。國綱は乃ち我が子竹若丸を害して身替となし、次郎と公平とを何處へか落して、頼義の心の和ぐ時を待つてはといふ。かくして公平をも此策に同意せしめ、城に火を放つて、焼死と見せかけ、次郎をつれて石山寺に落ちさせる。城に火の手が上るのを見ると、義家は城に攻入り、偽首をとつて

事實らしく次郎討伐の始末を頼義に告げる。隠された事實を知らぬ頼義の御臺は、義家を招いて、次郎の最期の模様をきき、先祖満仲の時には、三男美女丸が父の意に背いたのを、殺害した體に見せかけ、仲光は我子の幸壽丸の首を討つて、満仲父子の間を目出度く直した例をひいて、今は仲光程の侍のないことを歎き、己が兄の首を討つ義家の頼み甲斐なきを悲しむ。義家は一生懸命の思ひで事實をかくす。やがて勅諭によつて頼義父子は和睦せしめられる事となり、頼義は次郎を許すから連れ來れと義家に命するが、義家はお指圖によつて既に殺したといふ。處が頼義は亦、満仲の時、仲光が美女丸を助けた例を引いて、殺したといふのは偽だ。汝等は決して次郎義宗を殺すことはないとして殺せといつたのだといふ。この時、實際には殺されなかつた次郎義宗をつれて、公平が現れる。其處へ又關白が現れて、滿容上人と公平との間を和け、萬事目出度解決するといふのだが、かうした謡曲「仲光」の身替は、色々と手をかへ品をかへて應用され、それが後代に及ぼした影響はまことに少くないのである。その中「菅原傳授手習鑑」の「寺小屋」の場や、「義經千本櫻」の「鮎屋」の場などに於けるものは、最も知られてゐる所である。

それから「多田満仲」の前半には、相馬良門の反逆が扱はれてゐるが、後半は「法問評」に於けると全く同一の身替を扱つたものである。

- 五 主君に忠義を鼓吹するもの
 - あたか高だち 明曆頃 天下一長門掾正本
 - 松浦合戦 萬治三、十月
 - 判官吉野合戦 萬治四、三月

- 菅原親王 寛文三、正月 大和掾、和泉太夫
 - 今川物語 寛文三、五月 天下一大和掾
 - 公平生捕問答 寛文三、五月(？) 大和掾、和泉太夫
 - 景政雷問答 寛文初年——中頃
 - 三浦北條軍法比 寛文八、七月 大和掾
 - 備五郎いかつち論 大和掾
 - 新高館 寛文九、五月
 - 牛王姫 寛文十三、正月
- 凡ての武勇物 單に傳記的の武勇物もないではないが、公平物や準公平物は勿論、其他の武勇物の凡てに於て、何れも其主君に忠義を盡すべき態度や傾向の、明かに現れてゐないにしても、多少の意圖のない作はないといつてい、位であつて、「安宅高館」にしても、「新高館」にしても、「判官吉野合戦」にしても、皆義經に對する忠誠が根本の狙ひをなし、さうした人物の活躍が主として描かれてゐるのであるが、其中舞曲を轉用し、若しくは之を改作した高館系統のものは、前期の遺物であるから、此處には再び記述する必要はないと思ふ。
- 牛王姫の忠節 同じ判官物であつても、前期以前から廣く語られてゐたといふ「牛王姫」は、「十二段草子」が戀愛基調のものであるのとちがつて、既に述べた如く、むしろ忠義物中に列すべきものである。牛王は三代承恩の主君と知りながら、牛若を心密に戀する折柄、伯母の尼公が之を六波羅に訴へたと見るや、命をかけて牛若を逃がし、如

何なる拷問苛責を受くるも、遂に牛若の所在を語らずして節義を守るのである。牛王の歩んだ道は、戀愛ではなくして、むしろ主君に對する忠節であつたのである。

主君の恩と忠節 『松浦合戦』に於て、大館判官が謀反を企て、宗任を招いて義家討伐の加勢をたのむと、宗任は今主君とも仰ぐ恩人に酬ふるに仇を以てすることを好まず、斷乎として大館の依頼を拒み、一旦松浦城を攻め落されはするが、遂に都にのぼつて、義家に乞ふて二萬騎に將として、再び九州に攻下り、判官の首を討つて九州を支配することゝなるのである。かうした恩を知る宗任の態度も甚だ忠誠に近いものである。

『菅原親王』の第四段に於ては、菅原親王逆心の報が傳はると、頼義は公平國綱を従へて討伐の爲山陰道に向ふのであるが、其時美作の住人奥野權太夫近年は、代々源氏の忠臣でありながら、菅原親王から利を以て釣られると、忽ち變心し、頼義一行の到来をまつて、毒酒を盛つて之を斃さうとするのである。かくと知ると、忠臣源内は死を以て之を極諫するのである。けれども利に盲ひた近年は遂に源内を一刀兩斷にして惡事を遂行しようとする。密に成行を見てゐた近年の妻女も亦、夫の忘恩非道を極諫するが、近年に微塵も反省の意なきを知ると、九歳の時から頼義の御臺にかしづいた恩誼と、主君を害せんとする夫の惡逆と、一身を捧ぐべき夫に對する愛情とを思ふて、暫く進退に悩むのであるが、遂に一身の運命を定業と觀じ、娑婆を厭ふて、三歳の愛兒を殺して夫の反省を促すのである。此處にも主君の恩を思ふ忠節の情は溢れ切つてゐるのである。

『景政雷問答』乃至『權五郎いかつち論』に於ても、讒に遭ふて幽閉の身となつてゐる我子景久の家に飛込んで、鎌倉權五郎は景久を鎌倉へ引立てようとするのであるが、景久は主君義家の恩を思ふて父を諫め、なか／＼動かうと



簽題「語物川今」と「帝皇宗玄」

せぬ。と景政はそれこそ主君を思ふて親を思はぬ不孝者だ、罪なくてかゝる憂き目に遭ひながら、義家に従つてゐる必要はない、もし鎌倉に去つたからとて討手を蒙らば「一方を討破つて日本にをらばこそ、……高麗契丹國にも打こへ國一つの王となり我子孫をたやすまじ……」といつて、景久を引立てようとするが、君臣の道父子の禮を全うするには、自分が死ぬより外はないとして、不意に父の刀を取つて、景久が自殺しようとする、景政も遂に我を折つて、泣いて鎌倉に歸るのである。景久の態度も結局武家時代の忠臣の態度であつたのである。

『公平生捕問答』の第五段に於て、今は惡逆の讒者廣長の爲に熊野に幽閉されてゐる頼義を救出さうとするに方つて、下手をすると、番人が頼義を殺すかも知れないことを憂ひて、公平等は先づ番人の知人を経て、前後の事情を明かにし、廣長が如何に無道惡逆の者であるかを語つて、番人に頼義の引渡しを要め、若し反對するとあらば、頼義も共討首にする旨をのべると、番人はむしろ公平等の忠誠に感激して、直に頼義に引合せるのである。頼

義は一切の事情を知ると、公平等の苦心と忠誠とに泣くのみである。

一種の忠義 『三浦北條軍法比』の第三段に於ても、道寸軍に捕はれ、恩義をかけて送還された芹田川島の二人は

郷里に歸ると妻女に暇をつけ、子供をつれて、主君北條早雲の前に出で、芹田はいふのである。生還したのは道寸の恩である。此上道寸に對して弓を引けば忘恩になるし、弓を引かねば主君に對して忘恩になる。乃ち此際暇を頂き度く、其代り二子の中、長男は君に捧げ、次子は道寸に捧げたいといふ。川島も芹田と同様に、一子を捧げるから暇を頂きたいといふ。早雲は二人の言をきくと、つくづく感歎し、

「天晴たへなる所存かな……日本廣しといへども、方々がやうなる忠義の侍又あるべきと思はれず、面々がやうなる侍をふらしておきし此早雲まで末代の記録にとゞまらん事本懐の至也、よの物五十騎百騎より千萬をしくは思へども、左程に思ひ切る上はとゞめてもとまるまじ、また方々なとどめては早雲程なる大將が道を知らぬにぎじやうせり……」

と云つて、兩人の望をきゝ入れ、殊に川島の一子は道寸にやり、女の子一人は自分が育て、やるのである。この兩人の忠義を今日の忠義と比較することは無理であり、頗る妙なる忠義ではあるが、當時に於ては恩義を知り、道を辨へた一種の忠義であつたといつてよいのである。

かくして芹田と川島とは早雲から暇を貰ふなり、子をつれて退き、父子の別れをして各々辭世を殘し、芹田は川島の子勝王丸に、川島は芹田の子花石丸に介錯され、悲痛な死別をするのである。そして首を切られる前に、二人は唯生よりも名の重んずべきことを、こん／＼と其子に説くのである。やがて勝王丸と花石丸とは、各々其父の首をさげて、道寸の城に赴き、右の事情を述べて、父の遺命による奉公をしようとする、道寸も感歎して

「誠に千人にも優れたる心ていかな、あはれ繪にもうつし木像にも作り、もろこしへ渡して、日本にかゝる義者あることを知らせたき……」

といつて、二子を我子として愛するのである。こしらへ物らしいといへぬこともないが、大きい立場からいへば、頗る理にかなひ、義を辨へた忠義であるともいへるのである。

今川の忠誠物語 「今川物語」は、忠臣今川年秀の誠忠物語といつてよい。將軍頼兼を失うて、天下の兵權を掌握しようとした久國が、主君を酒色に溺れしめようとするのを知ると、今川は主君を極諫するのであるが、遂に容れられずして備前に退く。その討手に向つた渡邊民部早友は仁義の士であり、今川の忠節なるを知るが故に、形式的に今川と戦ひはするが、結局代りの首をとつて都へ歸る。今は邪魔者を滅して誰にも憚る所なくなつた久國は、頼兼を熱田へ參詣せしめて、窮地に陥れて自害せしめる。將軍の御臺若君は、めのと光廣に助けられて、光廣の兄蘆屋の兵衛忠正をたよつて明石へ忍ぶ。處が兵衛は恩賞が欲しくなつて、反對する女房を殺して、御臺若君に繩をかけて、久國に渡すべく、都へ送つてしまふ。之を知つた今川は、偽つて久國の使となつて兵衛を討取り、義兵をあげて久國討伐に向ふ。かくして死んだ筈の今川は、智略を以て久國を仆すのであるが、今川のこの間の苦勞と忠誠とは、本曲に接するものをして感憤せしめずにはおかぬものがあるのである。

六 孝行を主とするもの

咸陽宮	明曆三、五月
まつら長者	寛文元、五月
桑原女之助	寛文二、七月
和田酒盛	寛文四、正月

天下一さつま太夫正本

源氏白旗の由来

大曾我富士の牧狩

ぜんじそが

末武印問答

唐銀金山

大和掾 正本

大和掾 正本

仇討の孝行 仇討の孝行を題材としたものは前期の正本にも随分あつたが、此期に於ても曾我物の「大曾我富士牧狩」、「和田酒盛」、「禪師曾我」等を始として、「源氏白旗の由来」や、身替の項にあげた「佐野源左衛門」などものに關聯したものである。殊に「源左衛門」には二重の仇討が仕組まれてをり、また「桑原女之助」の前半には、折山兄弟の父の仇討が仕組まれてゐる。

「源氏白旗の由来」の第三段に於て、仲光は敵の黒熊を討つべく獨り四國に下るのであるが、其際二人の臣が従はうとすると、仲光は之を許さず、忠節の眞義を説いて、「とにかく都へかへり、小次郎をよきに見たててゑさすべし、是第一の忠節なり」といつて、山口十郎を都へ歸らしめて、わが弟小次郎を保護せしめ、石澤一人だけを連れてゆく。やがて山口十郎は仲光の父仲國の首を携へて都に歸り、一々次第を語ると、北の方は悲嘆にくれるのであるが、之に對して十二歳の小次郎は、

「おろかなり母上さま、せんだんの林に入れば染めんどころもほふといへり、武士の妻ならん人、かゝる別れのあらんとはかれて思し召さざるか、その上兄の中光おやのかたき討んとて四國へ下り給ふよし、尤かうぞ有るべけれ、我にもいとま

給るべし、四國とやら下りて見もるともに敵を討ち本望を達すべし、併して下れ山口」

といふ。かうして親の仇を討つことは、仲光がいふが如く、「武士の本意」であり、従つて「親の敵を討たんと思ふ所存は佛神も之を助くる」としてゐるのである。

母に養す燕丹 既に、明曆の半ばに現れた「咸陽宮」も、孝行に

基調をおいたものである。秦始皇の爲に捕はれて、牢獄に幽閉された燕丹は、一日始皇が庭に遊んでゐるのを見つけ、母の嘆を思ふて、一度故郷へ歸されんことを願ふのである。始皇は鳥の頭が白くなり馬に角が生へたらば許してやらうといふのであるが、燕丹が一心に祈念をこらすと、「角ある馬をくじに來り、庭前に膝を折る、次に頭の白き鳥、是もしらすへ飛下る」のである。始皇は乃ち己むなく燕丹の歸國を許し、途中にて、彼を底知れぬ淵へ沈めしめようとするのである。かくて燕丹がある橋を通りかゝると、忽然橋は落ちて其身は淵に沈むが、幸にも大龜に救はれて對岸に着し、無事歸國することが出来るのである。其後始皇はいろ／＼と燕丹を苦めるのであるが、漢の高祖が彼に云つたが如く、「彼は親に孝行なるが



(載所史瑠瑠淨入繪)「者長界月」刊月五年二文寛

ゆへ度々の難をのがれ」ることが出来、遂に始皇を滅ぼすに至るといふのであつて、結局親孝行をば鬼神も感ずる至

徳となし、之を讚美してゐるのが此曲である。

父の爲に死なんとす 『末武印問答』に於て、末武は兵衛友高の爲に功名を盗まれた上に譏奏されると、友高を愛する主君頼信に訴へることも出来ず、無念やる方なくして、其身を隠すのであるが、頼信は更に末武の妻子までも始末させようとするのである。かくて妻子を召取るべき使が来ると、城の者共は怪しんで使を斬つて戦はうといふが、末武の子末春は、

「さやうにあらきふるまひは父上のがかるくともいよく重くなりぬべし、つくく物を案するにたゞ人の讒言にて有べし、さあらは天運曇なく清きかゞみとなりたまはん……たとひとが極つてちうせらるゝ共、おやの爲にきられんは子たる物の道にて有、なげくな」

と涙を流して臣吉川にいつて、母に心配させまいとして、偽つて最後の別を惜みて城をぬけ出さうとするのであるが、その邊の敘述はまことに公平物とは思はれぬほど情味人の心にせまるものがあるのである。

父を救出す松世姫 『小袖賣』の名で知られてゐる『和國美人哥評』の主人公結城七郎景氏は、娘等の歌評が元で、反逆を企てた柴田兵庫を會津の城に攻寄せるが、不幸にして、柴田の爲に捕虜にされてしまふ。景氏の娘松世姫は、自分が才媛であるが爲に、嫉まれて騒亂をも引起し、父を不幸に陥れたとあつては黙つてゐることが出来ず、強ひて母に乞うて、土田の女房一人をつれて會津に忍入り、遊女の體に装うて、敵の城に入り込む縁を求むべく、先づ小袖を買ふ。そして様々の小袖の中にて、「武藏野に一村すゝき穂に出でゝ末にあふたるを」面白いと選び出し、やがて父の七郎景氏を預かつてゐる關守五人の中にて、強ひて姫の縁を求めてやまぬ一人である淺香の望にまかせて、

機到れりと密に喜びながら、淺香の家に至り、一同の酒宴の最中に、人々の目をぬすんで、淋しくも一室に幽閉されてゐる父に近づいて、菓子を與へ、やがて酔ひつづれた一同の手から鍵を盗んで、驚く父を引出し、醉漢どもを蹴殺して逃亡するのである。そして彼女の孝心に感じた玉津島明神の加護を受けて、姫は父と共に義兵をあげて、見事に敵を滅ぼすことが出来るのである。女の纖弱な腕一本にて、燃ゆるが如き孝心に驅られながら、佛神の擁護をうけて敵地に父を救ひ出して、遂に敵を滅ぼすに至る物語が、如何に子女までも感激せしめたゞらうかは云ふまでもなからう。

父の供養に身賣 父の供養の爲に身を賣るといふことは、既に『阿彌陀胸刺』にも先例のあることであるが、さうしたことは、同じ説經の系統を引いた『松浦長者』にも現れてゐる。松浦長者の申子である佐用姫は、父が死んだ後は、家が貧になつて供養も十分出来ないでゐたが、十三年の供養をしようとしてゐる折柄、奥州のごんかの太夫が、此年の大蛇の人身御供となるべき、自分の娘の身替を求めてゐるときいて、母には秘して五十金にて身を賣り、立派に父の供養をして後、母の嘆きの中に、太夫に連れられて奥州に下り、愈々定りの日に大蛇の犠牲にされようとする時、姫は従容として法華經を取出して読み始める。さて一卷は父の爲、二巻は母の爲、三巻は一門の爲、四巻は太夫夫婦の爲、五巻は自分の爲と、聲高らかに讀あげて後、經を巻いて大蛇に投つけると、大蛇の十二の角がかりと落ちる。更に經を以て上から下へなると、一萬四千の鱗がはら／＼と落ち、大蛇は其儘池に入ると思ふと、十七八の娘となつて現れて姫に近づき、自分は此池に住むこと九百九十九年、人身御供を食ふこと九百九十九人、今一人にして千人といふ時、御身の如き貴き人に遇ふ。これ偏にお經の功力にて、幸に大蛇の苦をのがれて成佛する。有りがた

さの御禮であるとして、龍宮の寶珠を贈り、これにてなでると盲目も立所に治するといつて、泣きながら、更に自分の過去の経歴を物語る。姫も乃ち自分の経歴を物語り、やがて太夫の承諾を得て、此龍女につれられて、故郷近き廣澤の池邊に歸り、今は盲人となつて、子供等の慰み物になつてゐる母をたづね出し、龍女からもらつた寶珠を以て其盲ひた目をなでると、母の兩眼は忽ち開く。母子はやがて故郷に歸つて、昔の榮華に戻る。これ皆孝行の御利益で、姫は往生の後竹生鳥の辨財天に祭られたといふのである。

説經的な怪奇的な物語ながら、一身をすてて父の供養の爲に身賣までする純眞な美しい心の物語が、果して何の影響をも之に接するものに及ばなかつたであらうか。

孝子に酒造りを教ふ 寛文期のものといはれてゐる『唐銀金山』も、『繪入淨瑠璃史』によると、立派な孝行物である。高伯龍の子高ふらは、孝心の厚い慈悲深い男にて、常に父の爲に孝を盡し、嘗て彼が商人の手から龜を助けたので、八大龍王は眷屬の助けられた喜び、大に之を徳とし、その後父子が安祿山の弟安龍の爲に苦められた時は、父子を救ひ、又高ふらが虎に襲はれた時は、神龍となつて虎を驅逐した。其後戦亂相ついで彼が貧乏になると、龍王の一族である狸々は、彼の夢枕に立つて、彼に酒をつくることを教へ、それによつて彼は富貴になることが出来たといふのである。まるでお伽話のやうな孝行物語である。

かうした色々な忠孝本位の淨瑠璃が、繰返して舞臺の上に演出された時に、低級な観客に對して教化的影響を多分に及ぼしたであらうことは、改めて記すまでもないことであらう。

一五 寛文期の義理に關する二篇

前期の小篠 前期の淨瑠璃『小篠』に於ては、父の仇討をした繼子の命を母親が救はうとして、其代りに實子を身替に立てようとする美はし、心が、役人を感動せしめることとなつて、繼子も實子も共に救はれたといふ立派な義理立てが描かれてゐることを説いた。此期に於ては、それとも稍趣を異にした、義理の現れた二篇を見出すことが出来るのである。

非道な父の命令 第一は『勝尾寺本地』である。攝州池田の判官代兼冬は、甚しい苦勞性の人物で、娘の婿介道が敵持の身であると知ると、萬一にも介道が敵に討たれた後の事が心配になつて、夜もねられぬまゝに、娘を今の中に離縁するのが上策だとなして、七歳の子までもつてゐる娘に離縁を求めさせる。親の命令にも容易に應じなかつた娘も、勘當されるとあつては八逆罪の恐ろしさに、遂に父の命に従ふ事となる。そして婿介道が容易に離縁を承諾しようとも思はれないので、彼を呼びよせて「毒酒を盛つて心安く死なせ」ることにしようかと相談をきめて、婿は其酌を引受けることになる。さていよいよとなつた時、娘は毒酒と良酒との二つの鉢子をもつて出る。そして良人に毒酒を盛つて之を失ひ、「千代の道をはげれ、世のあざけりを受くべきか」、尋常の酒をもつて父の心にそむきて、永き勘當を受くべきかと案じ煩ふが、遂に「父の御とがめはともあれ、まのあたりにてつまを殺し、世のじんかうにかゝら

んこと、未來のさはりなるべしと思ひすまし、長柄の口をとりかへつねの酒をもる」のである。良人に加擔する娘を見て、父は身をもだえるが甲斐がない。娘は兎も角も良人を助けたことを喜び、父がとがめたら「毒酒を自ら飲み、つまより先きに死ぬべしと思ひ極め」てゐる。其夜父は忽然として婿を夜討にするが、婿は何者ともわからぬ敵に襲はれて首をとつて見ると、それは妻の父である。介道は大に驚き、妻から一切の事情を聞いて、相携へて直ちに菩提

の道に入るのであるが、娘が父の命に従つて、良人を殺すべきか否かに迷ふあたりには、義理と人情の衝突に悩む者の煩悶が、相當に描き出されてゐるのである。

風變りな義理、今一つは「三浦北條軍法比」に見られるものである。然もこれは義理といつても、戦の中に互に仁義の大道を踏み合ひ、大きな義理の立て合ひをした物語である。最初三浦道寸の軍で、北條早雲方の二人を捕虜にして歸るが、やがて道寸が二人を重くもてなして歸してやると、歸された芹田と川島の二人は、主君早雲に向つて暇を願ひ出で、自分達の二子の中、各々一人を早雲に、二男と女の子とは道寸軍に仕へしめ、自分達は死んで義理を立てようとする。早雲も道寸も共に二人の忠誠と義理立てに感心して願をき、届ける。やがて兩軍が秘術を盡して戦つ



表題「首一人百山倉小」と「比法軍條北浦三」

た後に、道寸軍につかへた川島芹田の二子は早雲の一子千代松を捕虜にして歸るが、如何にも敵軍の旗色が面白くないと見ると、道寸は先づ千代松を早雲軍に送還して、最後の奮戦を試むべき警告を與へる。早雲軍では道寸の態度に感激して、我が娘を道寸の息子に送つて和を結ぶといふのである。川島芹田の妙な義理立てと妙な忠誠に加へて、道寸と早雲の義理の張合は、如何にも腹の大きさを思はせる痛快なものである。幾分こしらへ物の感はあるが、痛切な人情とからみ合つた義理には遠いが、大義をわきまへた、まことに理想的な、のんびりした時代の一種の義理として見れば面白いものであると思ふ。

一六 寛文期の戀愛嫉妬

野獸的欲望時代 淨瑠璃の初作とも見るべき『十二段草子』は元來戀愛物語であり、時代物としての味の少い、殆ど純粹な世話味をもつて充された、優美な純情の物語であつた。此傾向が押進められて行つたとしたら、淨瑠璃は直に世話物の世界となり、社會劇の世となつたかも知れないが、それは全く空想であつた。『十二段草子』は僅に其庭園の美、四季の風景、異性の口説落し等の一場面を利用されるとか、若しくは其全曲の壓縮物語が、折々應用されることのみ役立つて、それが純粹な世話物を生み出し、社會劇として發達するまでには、なほ長い時の試煉の下に立たなければならなかつた。

成程、中世時代に於ても戀愛はあつた。思慕はあつた。けれどもその戀愛や思慕は、純情の溢れた相思の戀慕ではなかつた。此時代の戀愛は多くは野獸的本能の欲望に過ぎなかつた。女性を一個の動物視し、無人格視した商品的取引にか過ぎなかつた。女性の意志や感情を無視するは勿論、其年齢も境遇も生命も、一切が顧らるゝことはなかつた。それは未だ配偶者のない妙齡の女性と、既に配偶者を有する女性とを問はず、一樣に獸慾の犠牲とならなければならぬことが甚だ屢々あつた。凡ての若き美しき女性は、かうして非道にして貪慾飽くなき野獸性の餌とならねばならぬ危険に常に暴講されてゐた。男女の間には眞の戀愛は未だ存在せずして、唯獸性の暴威のみが常に牙をむいてゐた。従つて、獸性の威嚇が効力を奏しなるとなると、其處には腕力が直に働きかけた。強奪、誘拐、人買、戦争、皆之等は中世的戀愛の背後に必ず眼を光らしてゐるものであつた。かくて中世は實に眞の戀愛なき時代であつた。

危険な戀愛時代 徳川時代に至つては、其社會的狀態が次第に暴力の發動を許さなくなるにつれて、野獸的中世的戀愛は漸く影を收めたのであるが、女性に對する一般の態度と思想とは、實質に於ては未だ少しも變る所はなかつた。依然として女性は人間ではなく、唯男性の玩弄物にしか過ぎなかつた。其處に女性を一個の人間と見、之が人格を認めた近代的思想の閃きは微塵も認めることが出来なかつた。従つて、寛永正保期に於ても、萬治寛文期に於ても、若くして美しき女性は、常に一樣に、強奪と誘拐と商取引の對象とならなければならぬ危険にさらされてゐた。戦慄すべき危険なる戀愛は常にその頭上に蔽ひかぶさつてゐた。

戀愛情味の擡頭 かくて寛永正保期に於て、女性が度々獸慾の對象として引合に出されることがあつても、それは戀愛物語として發達することはなくして、結局は呪はしく痛ましい、無味乾燥な戦争物語として終つたやうに、萬治

寛文期に於ける戀愛の多くも、勿論それを中心としたものではないのみか、戀愛は唯慘憺たる戦争の口火に過ぎず作者もまた戀愛本位の内面的世話物を描かうとするよりも、外面的社會的活劇争闘を敘述して、物語の筋に變化を作り出さうと苦心するに止まつてゐた。けれども萬治寛文期となつては、寛永正保期とは聊か趣を異にして、よし戀愛物語が等しく社會的争闘の口火たるに過ぎないにしても、戀愛的情味は聊か其色彩を豊かにし、其味を濃かならしめて來たことは明かに之を認むべく、殊に寛文中期以後になつて、ぼつ／＼戀愛が其本質的傾向を見せて來たことは否むことが出来ないのである。換言すれば、公平趣味の武勇的傾向が漸く衰微し、柔か味が擡頭し來るにつれて、人情味なり戀愛味なりが次第に取入れられ加味される傾向を生じ、延寶期に入つて、一層其趣が顯著となるに至つたのである。

戀愛に関する諸曲 試に改めて此期に於ける戀愛に關係ある諸曲をあげて見ると

源平戀遺恨

萬治二年七月

あゝこの若

萬治四年正月

八幡太郎義家

(?)

殿上闇討女袖鑑

寛文四年十一月

阿彌陀本地

寛文七年十一月

日本大王

寛文中頃

景政雷問答

同

仙人龍王威勢諍

寛文十一年三月

比翼連枝之由來

寛文十二年三月

小倉山百人一首

寛文十二年七月

業平一代記

寛文十二年

の十種を數へることが出来るのであるが、その中でも、『日本大王』と『景政雷問答』と『仙人龍王威勢諍』とは江戸淨瑠璃であり、殊に『日本大王』の如きは和泉太夫の語物であり、『景政雷問答』も、和泉太夫の曲かと思はれる疑があることなどから見ても、公平淨瑠璃流行後の形勢が、漸く變化し來れることを察すべく、而も寛文も末になつて、戀愛的情味が次第に増加し來れることを知ることが出来るのである。

それにしても之等の戀愛關係曲も之を二つ乃至三つに分けて見ることが出来るのである。即ち戀愛を取入れてはゐても、『源平戀遺恨』や『女袖籠』や『阿彌陀本地』の如く、それにあまりに重きを置かないものと、『景政雷問答』の如く、衆道に關係したものと、其他の諸曲の如く戀愛味に相當重きを置いたものとに分けて見ることが出来るのである。

先づ第一の種類からいふと、『源平戀遺恨』にも、第二段に二宮親王と堀川の姫君との美しい戀が取入れてあるが、全曲は其儘の戀物語としては終らなかつた。早くから姫を戀してゐた平友重の失戀が中心の動力として展開し、友重が姫の強奪を企むや、忽ちにして源平兩家の争となり、都は動亂の巷と化して、戰禍久しきにわたつて後に、再び源氏が天下を鎮定するといふことに結ばれてゐる。かくして戀愛は、此處では結局源平兩家の勢力争の口火に用ひ

られてゐるに過ぎないのである。

『女袖籠』も亦、源義親が鬼神を討つて、賞美として周防内侍を賜はつたので、戀の對象を失ひ、内侍に對する執着心から、右大將重忠は阿波局に頼つて、大それた假装をして内侍の室に忍んだことから、却つて義親夫婦が逆臣とあやしまれて、討伐軍を向けられ、苦心の後に一切が明白となり、一陽來復に至るまでの道筋を描いたものだが、其處にも戀愛は唯波亂の動機に用ひられたに過ぎない。

『阿彌陀本地』にしても、第一段はせんしやう太子と、あしゆく夫人との戀物語である。第二段すらが、父王の迫害に遇ひながら、互に己を殺して相手を救はうとする美しい夫婦愛の活動である。それがいつか出家物語となり、宗教説話として結ばれてゐるのである。『業平一代記』は未見であるが、この後に現れた業平と井筒の物語から想像すると、恐らく其處には戀愛物語の展開は、蕾のまゝに終らせられたことであらう。その他『仙人龍王威勢諍』に於ても、八幡太郎義家と緑の前といふ超人との艶物語は取入れられ、而も緑の前は到る處にその姿を現して、構想上重要な役をつとめてはゐるが、どこにもさして情味のこもつた場面は見ることが出来ぬ。

此期に於ける戀愛にふれた曲は大抵がかうした運命に終つたのである。即ち戀愛そのものが、未だ世話物としての本質的展開をなすべき取扱を受くるに至らないで、時代物的物語展開の動機としてつまつとして利用されたに過ぎなかつたのである。

戀愛味濃厚な曲 けれども其間にあつても、戀愛は一曲中にあつて相當に重きをなし、小さいながらも世話的な情味を發揮すべく、やさしい花を開いてゐるものもなかつた。

『小倉山百人一首』にも歌人定家と女三の宮式子内親王との戀愛の成立を嫉んで、失戀をなげく橘諸賢の暴逆が仕
組まれてゐる。けれども其第三段には、北野から小倉山に至る間の、戀人同志の情話ではないが、多少の縁ある道中
の風景が描かれ、第四段には、定家と女三の宮との別離の哀愁の場について、定家が落髪したときいて、女三の宮が
庵室を訪れて、面會を強要する場が描かれてゐる。後の場面は、お伽草子『横笛の草子』から借りたものであるとし
ても、本曲が寛文末期のものであるだけに、稍戀愛情調の豊かなものであることを認め得るのである。

けれども萬治から寛文初年頃の作かと思はれ、ひよつとしたら、『八幡太郎琴の縁』と近いものかと思はれる『八
幡太郎義家』には、同じ義家物でも、もつと美しい戀の花が咲いてゐる。成程この曲だとて、結局義家父子が貞任討
伐の戰爭物語ではあるが、其第四段には、『十二段草子』の牛若と淨瑠璃姫との戀に似た純情の戀、情味たつぷりな

世話場が展開されてゐる。都人に對する見ぬ戀にあこがれた
尾上の前は、父貞任の手に捕はれて、幽閉された義家の閑居
を訪れて、牛若の態度さながらで義家を口説き落すのであ
る。

『八幡太郎義家』には、正本に刊年が見られないから怪し
いとせば、『日本大王』こそは、和泉太夫の正本として疑
なき、寛文期の曲であるが、これにも亦『八幡太郎義家』の
世話場と同様なものが見られるのである。即ちその四段目に



座田竹 座羽出 座磨播



(載所船分蓋) 圖居芝

於て、磐余彦命は大和平定に先立つて、一日ある山麓にて、
今は衰へた昔の長者の家を訪れて宿を求め、暫く御滞在あら
せられるのであるが、その間に長者の姫照日の前(十六歳)
は、命に對して戀を感じ、遂に姫の方から進んでそれを打あ
け、頻りに命を口説かれるのである。使命の重き身であるこ
とを思つて、容易に姫の意に従はれなかつた命も、一夜夢に
神のお告げがあつて、命が姫と妹背の契を結び給ふと、天下
が泰平になると聞かせられると、命は遂に意を決して姫と契

を給はせ給ふのである。構想からいふと、之等の曲も亦結局時代物的ではあるが、其一場に盛り込まれた情味は相當
に濃厚なものであり、世話的の香味を充分に臭ぐことが出来るのである。蓋しそれは『十二段草子』の行き方を逆に
行つたに過ぎないものであるからである。(序ながら近松の時代物に於て、凡ての女性が男性から戀を持かけられる
のでなくて、女性の方から先づ戀の口火を切り出すのは、遠因は何處にあるにせよ、之等の曲の影響であると思はれ
る。)

構想及び取材の點では、純眞無垢なる戀愛を取扱ひながら、描寫でなくて物語であるが爲に、結局世話物になり切
らないのは『比翼連枝之山來』である。花の如き少女が美しい少年に出遇つて、「思ひにたゑかねて硯料紙を取寄せ
て、墨すりながし、思ふ言葉を一筆かき引結び」ながらも、それを相手に渡すことも出来ないでゐる時、烈しき雨を

幸に、「今は人めもなにならずとわがさゝせ給ふ御かさに、かの玉づさを取そへて、一村雨の雨やどりしばしはしのばせ給へとて」渡して、「御かさは玉づさの中だちと、たがいに手をしめかわし給へば一念や通じけん、比翼の前それよりもたゞならぬ身となり給ふ」といふ程の間である。そして連理丸は比翼の前に對して、思慕の情やるせなくして遂に死んでしまふ。それを聞くと比翼の前は連理丸の墓に參詣して後を追ふ。墓の上には連理の樹が生じ、二人は比翼の鳥となつて天に上つたといふのであるが、やがて因縁論をかつぎ出して甚しく宗教的なものにされ、戀愛描寫が中心でないが爲に羊頭狗肉の感があるのである。

衆道と不倫の戀 歌舞伎の影響といふよりも、むしろ時代の姿が文藝の上に反映した一つと見るべきは、寛文中頃までのものらしい『景政雷問答』に於ける衆道の描寫である。それはこの曲の第二段に於ける義家と景久の痴話場であつて、決して單に衆道に觸れたといふやうな淺薄なものではなく、痴話場といふに足るほどの濡れ場であつて、此期に於ては頗る珍らしいものではあるが、之と殆ど同文のものを、井上播磨掾も語り、それが「いかつちろんちわものがたり」といつて、延寶二年刊の彼の段物集『忍四季揃』の中にあげられてゐることによつても、此期のものであることを知ることが出来るのである。

不自然といふよりも、むしろ呪はしい戀愛は『愛護の若』に現れてゐる不倫の戀である。繼母が繼子に對する忌はしくも烈しい思慕の情が報ひられぬまゝに、讒言となり虐待となるのが此作であるが、これは説經の物語であるが爲に、必ずしも此期の現象であるかは保し難いものである。

魂の世界の虐待 要するに此時代に於ける戀愛は、まだ人間生活に於ける餘りにも小さい一面に過ぎなかつた。女の生活に於て、情感の生活は、あまりにも威壓され萎縮し切つてゐた。美しい純情の復活を見るまでには、まだ少くも延寶期をまたねばならなかつた。それは心の世界が無視され、魂の世界が虐待されて、物の世界、形の世界、力の世界のみが暴威を揮つてゐたからでもあつたが、他面に於て、女歌舞伎や、ついでは若衆歌舞伎が度々彈壓を受け、動もすれば男女の情的生活を舞臺に表現することが禁ぜられ、淨瑠璃が其卷ぞへを食つてゐたからでもあつたと見るべきであらう。

戀愛以外の情味 戀愛の外に情味を豊かならしめるものといへば、戀愛に伴ひがちである嫉妬とか、繼子虐待とか、別離の悲哀などである。けれども別離の悲哀は生別と死別とを問はず、御臺若君の出て來る作品には必ず繰返されて、御臺若君は屹度天を仰ぎ地に伏して「流涕こがれ歎き給ふ」とあるのが常である。いな必ずしも流涕こがれ歎きの一句によつて敘述されるばかりでなく、江戸淨瑠璃と上方淨瑠璃とを問はず、かなりこま／＼と描寫されて、決して江戸淨瑠璃だからとて堅くるしい武ばつたばかりのものではないのである。例へば同じ『頼光跡目論』でも、却つて江戸の改作では、頼光との死別を四天王等が殊に痛歎する場が加へられてゐるのである。又『景政雷問答』に於ても、景久の母が幽閉された其子を訪れた場面に於ける別離の描寫でも、相當に悲痛な情感をそゝるものがあるのである。かうした情味の敘述は必ずしも少くないから、此上追求をさけて、繼子虐待と、嫉妬を扱つたものについて少しく述べておきたい。

繼子虐待 『愛護の若』のは不倫の戀が原因になつた繼子虐待であるが、『中將姫御本地』の繼子虐待は、前期の『ふせや』型の有ふれた繼娘忌避に出發して、臆言から殺害にまで及ぶのであるが、忠臣が姫を殺したと見せかけて養育

してゐたが爲に、悲惨な結果には終らず、而も姫が説經物語に通有な、寛大な態度に出て、悪事暴露の後も、繼母をかばふて比丘尼生活に入るのである。これなどはもと／＼説經で語られたものが淨瑠璃にも取入れられたものであらうが、此期に至つて、説經と淨瑠璃とが益々接近して、殆ど形式上からも演出上からも差別なきに至つたことを明かに證明するのが本曲などであると思ふ。

嫉妬本位の物語 戀愛の陰には嫉妬がひそんでゐるのが通例であるが、戀愛生活が藝術に於て重きをなさない時代に、嫉妬を取入れた作品が稀なのは自然の勢でなければならぬ。「熊野権現記」とか「ごすいでん」若しくは「熊野の御本地」と稱するものは、元來が説經であるが、要するに摩訶陀國王の妃千王女の寵を嫉んで、蓮華夫人が千王女を苦める嫉妬物である。そしてそれが説經であるだけに、存外世話味に富んだものであるが、「花山院后評」は純粹な淨瑠璃なるが爲に、同じ嫉妬を、物語の主要素としながら、而も時代味が横溢したものと成つてゐる。つまり此曲は「源氏物語」の「桐壺の卷」及び「若紫の卷」に於ける弘徽殿の女御の藤壺に對する嫉妬争を原據として、之に配するに、平正度と源頼光の勢力争を以てしたもので、本曲では事實を逆にして、藤壺の女御が弘徽殿に嫉妬して、平正度に托して、弘徽殿を殺さうとして失敗し、それが因で源平の争となり、やがて争がやむと、藤壺は自ら弘徽殿を殺さうとして、妨げられて怨靈となつて祟る。そして弘徽殿が死ぬと、御門はその死を悲しんで、位を去つて花山寺に隠れさせ給ふ。晴明は修法によつて弘徽殿を蘇らせるが、御門は愈々御讓位あつて、新に御即位の御祝があり、千代松が今様を舞ふことになつてゐる。かうして此作は立派な嫉妬本位の物語でありながら、それが情感本位に描かれてゐないで、それを廻つての外的事件本位、筋本位の一種の物語として描かれてゐるに過ぎないのである。換言すれば本

曲も亦世話的社會的戯曲とまで發達しないで、時代物的物語たるに止つてゐるのである。

一七 明曆寛文期の宗教物

三種に分類 此期の説經として語られたものと、普通の宗教物との間には、大分形式的差別がなくなつて、内容も殆ど區別しがたいものとなつて來た。従つて、淨瑠璃太夫によつて語られた説經も、大分あるやうであるが、本來説經として見た方がいゝものは、その方に入れることとして、今は純粹の宗教物の淨瑠璃を、其名稱乃至内容の點から分類して見ると、本地物、高僧傳、一般宗教物の三つにすることが出来る。

一、本地物 前期の「清水の本地」や「あみだの本地」等の系統を引いたもので、此部類に入るべきものをあげる

達磨の本地

萬治三年頃

月界長者

寛文二、五月

善光寺の本地

(一)

熱田大明神の御本地

寛文五、四月

宇佐八幡本地

寛文五、十一月

筑後代次虎之助正本

伊藤出羽掾正本

- 鬼子母神 寛文七、三月 伊藤出羽掾正本
- 阿彌陀本地 寛文七、十一月 伊藤出羽掾正本
- 聖徳太子御本地 寛文中頃 丹波掾 正本
- あたごの本地 寛文中頃
- 誓願寺本地 寛文八、十月 伊藤出羽掾 正本
- 中將姫御本地 寛文九、三月
- 勝尾寺御本地 寛文十、四月

此十一種の中、第二と第三は元一曲で、二様の名で呼ばれることがあるが、これは正本太夫が異つてゐる爲かと思はれる。又『熱田大明神の御本地』と『宇佐八幡本地』とは、我國の神を祭るもので、所謂佛教の本地垂迹の語とは聊か縁の遠いものである。殊に『熱田大明神の御本地』といふのは寶劍草薙劍を奉祀した由來記、『宇佐八幡本地』は應神天皇の御誕生までの神功皇后の新羅征伐記が主になつてゐるから、他の本地物と一括するのは聊か無理があるやうに思はれる。又『聖徳太子御本地』も、寧ろ高僧傳中に入れるべきかと思ふが、さうすると『達磨の本地』なども同様に扱ひたくなるから、外題名を主にして見れば、此中に収めておいても差支ないといへるであらう。他の本地物も、要するに主人公が神佛に祭られるまでの経歴を述べたことに於ては、お伽草子や假名草子と似たもので、上演に方つて機巧装置を應用して、靈驗功德を示すことを主としたものである。年表を見ても明かなるが如く、寛文中期以後に至つて、一層此種の上演が増加してゐるのは、高僧傳に於ても同様であるが、公平物などの武勇物が漸く衰へ



「たるまの本地」と「月界長者」題簽



かけた反動と、機巧装置の應用が發達した爲でもあるのである。尙此中『鬼子母神』は高僧傳中に、又は一般宗教物中に入られぬこともないが、鬼子母神の由來を説く點からは、此種の中に加へた方が穩當であらう。

二、高僧傳 前期の『日蓮記』一篇に前例を見るもので、今期に入つては漸く多きを加へたものである。

- 御開山親鸞記 寛文三、正月 伊藤出羽掾 正本
- 日蓮記 寛文四、正月
- 曇鸞記 寛文八年(?)
- 曇鸞大師御傳記 (——) 伊藤出羽掾 正本

- びんばしやら王 寛文九、四月
- 釋迦八相記 寛文九、七月
- 善導記 寛文十、三月
- 十界圖 寛文十二、五月
- 十界二河白道 寛文十三、三月
- 聖徳太子傳記

- 江戸肥前掾 正本
- 井上大和掾

此外にも此處に入るべきものもあるらしいが、正本未見にて不明の爲に、此表に加へなかつた。此表中の『日蓮記』は矢張日蓮傳ではあるが、前期の『日蓮記』と同物ではない。『釋迦八相記』も釋迦傳であり、『十界圖』は難陀傳、『十界二河白道』は道釋禪師傳である。『聖德太子傳』も(一)の本地と同物ではない。要するに皆高僧知識の傳記や之に類するもので、盛に機巧装置を用ひて上演され、本地物同様に宗教宣傳的意義の多いものである。

三、一般宗教物 等しく神佛の靈驗功德を説き、若しくは佛教宣傳的のものでありながら、本地物や高僧傳としては聊か面白くないものがある。之に列すべきものには下の如きをあけることが出来る。

一切記 寛文元、七月

よこそねの平太郎 寛文六、十一月

順禮記 寛文十、十一月 大和 掾 正本

比翼連枝之由來 寛文十二、二月

けれども第一には、法然傳が織込まれてをり、第二には親鸞が關係してをり、平太郎だとして高僧的の信者であるから、之等も前の『月界長者』や『びんばしやら王』などと共に、高僧傳中に組入れても差支ないものであるかも知れぬ。けれども次期に於ける宗教物の發展を思ふ時に、殊に『一切記』は前期の『小教盛』の系統をひくものとして、此中に加へても差支ないと思ふ。

『順禮記』は花山院の事を中心として順禮の由來を説いたものであるから、此處に入れてもよからうし、『比翼連枝之由來』は戀愛物語でありながら、結局若き男女の戀を中心として、因縁論をかりて、それ／＼の兩親が悟を開く

に至ることを説いてゐるのであるから、一種の宗教物として見るべきである。

神佛靈驗功德 佛神靈驗とか、信仰や祈禱の功德とか、様々な神祕奇蹟の繰返されることは、前期の淨瑠璃に於けると何の變りなく、むしろ糸操や機巧仕掛の應用が發達し、其技巧が巧妙になつて、一層盛に用ゐられたといつていのである。例へば作中の主人公が危険に陥つたとかいふやうな場合には、觀音や權現や、玉津島大明神や、鹿島大明神や、加茂や、戸隱の明神などが現れて、神託を傳へて保護するとか、救つてくれたりするのである。或は難病にかゝるとか、忽然死んだりすることがあると、祈禱や信仰の功德によつて、即座に平癒したり蘇生したりするのである。

かうして『よろひがへ』に於ても、迫害の爲に死んだ姫は、觀音の救によつて、狐狸の群から護られて、死後三日にして蘇生し、やがて神託によつて、姫は母の後を追ふべく、越後へ行くことを暗示されるのである。『子四天王北國大合戦』に於て、越後にある源頼信は、大膽に謀反され、御臺は落のびてゆく途中、疲勞の極に信越の國境なる熊坂山で死ぬのであるが、其際乳人の國重が附近の僧を迎へに行つた間に、何處からか老僧が現れて、藥を與へて御臺を蘇らせるのである。その老僧も亦中山の觀世音である。

更に死人の蘇生したり難病平癒の例を今少しくあげて見ると、『花山院后諍』に於て、阿倍晴明が祈願をこめると、藤壺の女御は蘇生し、楊貴妃物語の『玄宗皇帝』でも、反魂香を焚くと貴妃の姿は蘇る。『宇治の姫切』に於ても、六段目で、四天王等を導いた尼公は、天竺の仙女龍王で、弘法大師に招かれ、天子の守として來たもので、『今御門の難の救はん爲、かりに姿を現したり、疑をさんぜよと、其丈はたひろの大蛇となつて、神泉苑へ』飛ぶのである。

「月界長者」の初段では、釋迦に頼んで其命に従ひ、己が姫に冠をかぶらせ錦を着せ、一同が同音に念佛を唱へると、姫の病は忽ち癒えるのである。又「勝尾寺本地」に於ても、勝如上人は御門の御惱御平癒を祈禱することを命ぜられるが、父母追善の行に入つてゐたために都に歸らず、御祈禱のしるしにと、上人は數珠と袈裟を手に托するが、途中にて使がこの功德に關して疑を起すと、彼がもつてゐた數珠と袈裟とは忽然空に飛去つて、彼が歸らぬ先に、再び御門の御側を下りて、御惱は忽然と御平癒あらせられるといふのである。未だ科學の力の現れなかつた此時代に於ては、かうした超自然的な事件や行爲が、或程度までは迷信的に力をもつてゐたのである。

神佛の靈驗によつて死人が蘇生したり、病氣が忽然癒えるといふやうな、奇蹟的な現象以外の不可思議は枚擧に遑ない程である。

「一切記」に於ても、父を慕ふ小敦盛は、加茂明神に願がけをして、生田へゆけと暗示されて、生田に敦盛の墓を尋ねて父の靈に遇ふことが出来るのである。

「四天王紫野合戦」と同一の内容である、「八幡太郎誕生記」の三段目では、頼光綱金時の墓が忽然割れて、武藏した三人が現れて敵を睨みつけ、危地に立つた源氏の軍を救ふのである。「しんらん記」に於ても、「横曾根の平太郎」に於ても、鹿島大明神は老翁となつたり、大蛇と化したりして、親鸞の教を聽聞するのである。「四天王高名物語」に於ても、其四段目にて、住吉大明神は頼義の夢枕に立つて、源氏を助けることを告げて武運は急轉廻をなし、幸福なる終局に向つて進められるのである。「女袖鑑」では、戸隠の明神が翁と現れて、王城の守護を傳へ、「小倉山百人一首」に於ても、加茂明神は絶えず歌人定家を助けて、窮地に彼を救ふのである。「公平化生論」では、頼義が山

犬に奪はれたかと思ふと、その犬が後には八幡大菩薩になるといふのも、如何にも無稽であるが、「源氏五代傳記」では、死んだ渡邊綱の兜に、四枚の羽が生へて、口に劍を含んだ虫が兜の鉢から飛び出すと、それを渡邊綱の亡魂だといつて、蜂の神に祭るといふ神祕談もある。それかと思ふと、「天狗羽討」の四段目に於て、頼義の御臺が牢屋の中で安産をするのはいゝが、生れた男の子が敵大膳の爲に慘殺され、御臺も首をさしのべて討たれると、一旦死ぬのであるが、やがて不思議や、むくろは忽ち起き上り、敵の刀を奪ひとつて首打落し、其場で敵を討つといふに至つては荒唐無稽を通り越して痛快至極でもある。「朝夷島渡」に於ても、朝夷が八丈島の數百里南の島に渡つて、鬼神を退治したと思ふと、一天かきくもつて叢雲が舞ひ下り、大山伏が三人現れて、朝夷をつかんで空に消えてしまふ。やがて朝夷は虚空を駆け行く心地がして、とある石山に休むと思ふと、それが筑波山で、客僧が現れて、彼の傲慢心に對し警告を與へるといふのであるが、其處にも面白い神祕不可思議の姿が見られる。更に「和國美人哥謔」の初段に於て、御臺が松世姫の歌をほめると、床にかけてあつた玉津島大明神の神體が消え、代りに女の姿が現れて松世姫をほめ、我こそ玉津島の明神をり姫の神靈で、松世姫の歌の奇特を表はさん爲に現れたのだといつて姿を消したり、五段目でも老翁が現れて、玉津島明神が松世姫の影身に添うて守り、今日に至つたなどといつて、危険を救ふ如き靈驗的不思議は、殆ど有ゆる作品に現れるといつてもいゝ位に應用され、さうしたこと全然見られないものは、むしろ殆ど無いといつてもいいのである。

教義の宣傳 一口にいへば、徳川時代の初期に於ても、佛教は頗る隆盛であつた。天下を擧げて、上下悉く佛教の信者であるが如く思はれた。けれどもそれは表面のことであつて、凡ての人間が心から佛教を深く信仰してゐるとい

ふことはなかつた。凡てを宿業と觀じ因果應報の理をさとりながら、存外不信な生活をなすものも素より少くなかつた。現實は夢幻であり、泡影に過ぎないと云ひながら、頗る現世生活に對して強い執着をもつてゐた。かくて一般の人間が實際、厭離觀に立つとか、未來思想に憧れるといふことは思ひもよらなかつた。けれども概していふと、一般の人間が、極めて安價な歸に生きてゐたことは、争ふべからざる事實であつた。従つて古淨瑠璃に現れた大體の宗教觀は、何かといへば直に娑婆をのがれ、業因の世界を離れて、菩提の道に進み、常住安樂の世界に入るを理想とするものであつた。多くの人間が動もすればさういふ口吻をもらしてゐた。尤も「末武印問答」の主人公末武の如く、折角の功名を他人に盜まれ、自分に身方せぬ主君に對して之を訴へることも出来なくなると、世の中が厭になつて、四天王の一人でありながら、直に娑婆を逃げ出したりするのである。或は『公平道心』に於ける公平の如く、構想の行き詰りからは云ひながら、あの超人的ながむしやらの公平が、忽然として世をはかなんで、髪を切り修業に出たりすることになるのである。『賴義北國落』に於ても、賴義は一旦悲境に立つや、直に「唯何事も前世の業」と云ひ、「身にあやまりあらざれば、遂には正しき花梢に咲かざらんや」といつて、自ら慰めてゐるのである。『曇鸞記』の第二段に於ても、金龍が姫と結婚して戀に酔ひ、宿願の出家を忘れてゐると、或日老人が出て来て、「此の世の樂は風の前の燈火、水の上の泡の如し、只來世の長き樂を求め給へ」といふ。之に對して若君金龍は、

「後世菩提といふことも、此の世の道をたがへずは求むるに易かるべし、心だに眞實の道にかなひなば願はずとも極樂に至らんことは疑なし」

といふのである。又『公平關破』に於ても、其四段目で、義定は公平と共に由比ヶ濱にて其首を討たれようとする

や、公平に向つて、

「云ふに及ばぬことなれど、心をたしなみ清く死ね、さいごにおくれ、かまいて源家の名げし下すな、生きても死しても名こそをしけれ、只念佛肝要なれ」

といふ。若年の義定が死を悲むと思ひの外、この健氣な態度であるを見ると、公平は喜んで、

「只今念佛申させ給へ、來世は某お供申し……みんま王をとりこにして、極樂淨土へ遣引かせ……上品淨土所のうてなの蓮臺に義定公のをせ奉り……來世は心安かるべし」

といふのである。

『十界二河白道』の第二段に於て、道釋禪師が一日虚空を招くと、忽ち火の車が現れて獄卒左右に立ち、道釋を車に乗せて去らうとする。道釋車をおさへ

「さればみだの本願には重罪の悪人も一念の功力にて往生すと説かれたり、念佛の功德は如何に、おふくふしんことばり也、それ三界火宅のすみか、皆々しんいの烟にこがされ有といへども、凡夫更に之を知らず、火宅を出ばや出ん、お車ののりてはつべき身なれば、本願の不思議を見よ、なむあみだ佛」

と唱へると、火車と見えたものは蓮華となり、左右に立つた悪鬼は觀音勢至の二菩薩と現れ、火焰は涼風と變るのである。これ實に道釋の修行の功を示したものであるが、彼の説く所には佛の教がそなはつてゐるのである。

かくして『十界圖』に於ては、淨飯王の子である難陀太子は酒色に耽り、生ける人を射殺したり、火あぶりにしたりして喜ぶ憍虐人であつたのであるが、釋迦の力によつて救はれて佛道修行をはげみ、遂に淨土を見せられ、難陀尊

者と仰がるゝに至る経路が説かれ、『びんばしやら王』でも、等しく極悪の王子阿闍世太子が「恩を以て仇に報ずべし、平等利益悪人また救はれん」とて阿難から大慈悲を説かれ、前生よりの悪を忘れ、一心に唱名して佛果を得、五百の侍女も念佛の行者となり、彌陀一佛の悲願によつて、皆安樂國に往生する有様が示されてゐるのである。

萬治四年二月版（繪入淨瑠璃史所載）

『熊野の本地』は要するに所謂『五翠殿』であるが、その第三段に於て、愈々山に棄てられる事となつた五翠殿は、今は大王の態度のあまりに冷かなるをなげきつゝ、昔の情の言葉の全く偽であつたことを悲みながらも、之を宿業とし因果として泣くのみである。

「只うらめしきは前の世の因果のめぐるお車のやりかたもなき我身かな、よしそれともさきの世の報と思へば恨むべきにあらず、されば現在の果を見て過去未來を知るとかや、後の世も又かくこそあらめと思へばいとあぢきなや」

けれども、遺棄され五翠殿の王子が、やがて成人して後、復讐でもするかと思ふと、母の供養に罪あるものを悉く許すといふのは、さすがに説經的であり、佛教的であつて、大慈悲の理想のまさしくと見られるのが嬉しいと思ふ。

『中將姫御本地』は出羽掾の正本であるが、説經味の豊かなほどあつて、繼母から殺された筈の姫は幸にして助けられた後も、母に復讐しようとするどころか、むしろ後妻を退拂はふとする父に請ふて、母をかばひ、之を助けるの



である。そして后に進められようとするのを避けて、姫は一路佛道に入らんことを願ひ、父の知らぬ間に、夜陰にぬけ出して當麻寺へいそぐのである。そして直に剃髪して、庵を結んで修業し、やがて彌陀如來の來迎を祈つて、尼公の天降りを受け、尼公の命ずるが儘に天女の助を得て、一丈五尺のまんたらを織りなし、天人數多影響ある中に、尼公から佛の功德をきき、人生のはかなさ、淨土のありがたさを説かれ、しみんゝと佛道の樂みを感じ、十三年の後は、姫は極樂淨土に招かれて、女人ながら成佛するのである。そして此間に説かれてゐるのが、要するに速に此穢土を去つて極樂淨土に至るべき佛教の世界觀人生觀なのである。

『聖德太子御本地』の第二段に於ても、太子の命によつて佛像を守つてゐる時春が、守屋の爲に首を討たれんとする時、彼の妻は子供を連れゆきて「如何に佛が尊きとて命にかへる法やある、めいどのせめがつよきとて誰か此世へかへる人もなし」と口説きながら、悲を訴へ改宗を迫るのであるが、時春は此時斷乎として之を退け、我戀しくは西方に向つて佛の御名をとなへよといつて、更に

「人間の定命は六十二歳と申せども老少不定のことなれば樂むうちのはかなさは夢まぼろしの如くなり……らい世を願はぬ事ならば無間地獄におち沈み、なかく苦受くるは目のまへなり」

と述べ、佛法の由來、釋迦の念願を説いて、従容として日羅等と共に首を討たれるのである。序ながら、人間の定命を六十二歳としたのも面白い。

要するに今期に入りて佛教題材の作は可なり増加して、法然親鸞を説いた『一切記』の外『日蓮記』『善導記』『曇鸞記』や、達磨の傳、道釋禪師傳等色々のものが現れたが、宗派的色彩の濃厚なものは未だ現れずして、本來の佛心

の教理そのまゝを説くに終始してゐるのである。かくして結局「あみだの本地」の説く所に凡ては盡されてゐるのである。

「あみだの本地」は既に其大序に於て

「さて、其後それせつがとくふつの春の花は十方のしゆじやうにひらけ、しゅんしんけうの秋の月はよくしやうがこくの園を輝し、ないし十ねんせんに、もししやうぜすんばわれ正覺ならじとありがたくもじよくせ末代のぐちむちの凡夫、五しやう三じうの女人まで佛果を得ん事何疑あらん、されば經に曰く、西方くは十萬をくぶつどうせかい、ミヤうはつこくらくどうぶつ、がうあみだこんけんさいせつばう誠に四十八のたぐはんをみてしめ給ひ、じやうたう正がく成給ふあみだ如來の因位のむかしを尊奉るに……」

と述べ、又第五段には、

「昨日見し人も今日はいつしかはかなくも、若しといへども頼みなき無常ぞ悲しけれ、かゝるつたなき世の中に迷ひ暮す輪廻のきづな、何としてかははなれん、つら／＼惟るに、偶うけがたき人身のうけ菩提心に到らずば又もや三途にかへりつゝしやう／＼せ、が其間三惡道にださいし、六道四生を迷ふ事は皆一心のまことなくもらし、さいあくしんじうさかんるゆへ、とんちんちの三どくは、ときに重り日にまさり、むめう煩惱のくらき道よりくらきに入、いつかほつしやうの悟をひらき誠の道にいたりあん養けらくをまゐ、あゝ悲しきかなや、あけくれあくしんにほこり、我と地獄におつるなり、じやうだいとでもかくの如し、いはんや末法濁世に至りなば一切衆生皆悉く三惡道に沈まん事こそ悲しけれ、我大願を起し末世のしゆなりやくせすんばあるべからず、今生の樂是迄なり、まことの悟を聞かんには王位とて何かせんと忝くも御かざりを召か

へさせ給ひつゝすでに御ぐしそり給ふ……」

と説き、曲尾は

「諸佛の御願多しといへども、忝くも阿みだ如來の御本願さいあくしんのものなり共、一念のた佛そくめつ無量さい、げんじむびらくこしやうしやう／＼一さいとう菩提心二世安樂の御ちかひ有がたし共申斗はなかりけり」

と結ばれてゐるのであつて、結局人生の無常をさとり、煩惱の羂を断切つて、名念佛菩提の道に入るべきことを勧めてゐるのである。かくして古淨瑠璃に現れて居る宗教思想は、唯佛教の教理そのまゝから一步も出てはゐないのである。時代人の心の底から湧き出た信仰でもなければ、體驗に立つた思想でもないのである。單なる佛教の教理の宣傳、これが古淨瑠璃に於ける宗教味の概観といへると思ふのである。

一八 明曆寛文期の上演

依然たる未完成戯曲 唯文學の立場から見ると、明曆寛文期の淨瑠璃が、前期のそれに比べて、相當に進歩したことはいふまでもない。けれども其戯曲的價值乃至演劇的本質に於て、どれだけ進歩したかといふと、その進歩の程度は文學的進歩に比べるとむしろ一層遅々たるもので、未だその物語性を脱すること、かなり遠きものがあり、それだけまた淨瑠璃の淨瑠璃たる特性をそなへてゐたともいふべく、従つてまだ完全なる戯曲性演劇的價值を具備するには

至らなかつたといつていいのである。

蓋し淨瑠璃が最初人形と結合して、操芝居を創り出してから後、五六十年を経過する間に、若し淨瑠璃が上演本位にどん／＼發達したとすれば、出来るだけ人形の活躍の完成を早からしめ、舞臺本位に、背景や場面や、時間などを充分眼中においた、所謂戯曲的に演劇的發達の経路をたどつて、もつと／＼眞の人形本位たるべき歩みをつゞけた筈である。ところが實際に於ては、観ることの本位、人形本位であるが如き目的を以て進みながら、其本質に於ては、淨瑠璃の詞章や構造やは、歴史的傳統的發達の経路に禍されて、いつまでも／＼、今期はさておいて、古淨瑠璃時代の後までも、物語本位の歩みをすゝめ、話の筋を進めることにのみ、あまりに重きをおいてゐたのである。舞臺本位に上演本位に物語の詞章や構造を進歩させることに腐心せずして、依然在來風の物語を作成して、その物語を本位として、それに従つて、人形を活躍させることにのみ腐心したのである。即ち上演を眼目としてゐながら、その實それを徹底させることなくして、語物を重んじ過ぎ、淨瑠璃の詞章構造を本位としてゐたのである。つまり本末を顛倒してゐて、それが氣がつかなかつたのである。氣がついてゐても、それを改め得る作者がなかつたので、如何とも爲し得なかつたのだといふよりも、語る事のみ氣をつけて、本當にその作品を舞臺上に演出し表現して見せるといふことに向つて、注意が拂はれなかつたのであると私は斷言したのである。若し舞臺上に本當に作品を表現し、物語を動作本位に再現するといふことに充分注意が拂はれたとしたら、第一には對話の進め方のみでなく、第二には場面の變化、背景や装置の變化、第三には時間の扱ひ方といふ點等に、もつと意が用ひられた筈だと思ふ。さうしなければ充分な表現が出来ないからである。もし之等の諸點が充分に考へられるとすれば、淨瑠璃の詞章や構造は單に文學と

して、其筋を進めるといふ以上に、もつと戯曲的であり演劇的になつた筈である。

場面の變化と背景 前述の如く、寛永承應期に於けると同様に、明暦寛文期に至つても、いな其後に及ぶまでも、古淨瑠璃が上演を眼目としながら、上演を本位にしないで、淨瑠璃の詞章構造を本位とし、人形の動作を従として、本末を誤つてゐた。それが爲に淨瑠璃はいつまでも／＼、戯曲的演劇的發達を完成し得なかつた、と私が斷言するのは、單なる理論ではないのである。それは第一に場面の變化と背景の發達の點からも、之を證明することが出来ると思ふ。

素より有ゆる淨瑠璃が、場面と時とを無視して書かれ構造されてゐるとはいへぬ。場所を無視し場面と時間とを眼中に置かずして、人事が展開しよう筈もないことである。けれども、その場面と人物の活動と、時間と、筋の進みとの關係を、限られたる場面、舞臺、勾欄といふものを中心にして考へない儘で、いつまでも同じやうな筋の繰返しが続けられたのである。従つて、場面が幾ら度々變化しようが、何でもなかつたのである。舞臺的場面などはあまりに眼中に置かないで筋は進めて行かれたのである。だから詞章通りに場面を變化するとすれば、又場面を構造するとすれば、かなり繁雜であり、随分不可能であつても、それはあまりに氣にしないで、筋が進められて行つたのである。凡てがさうだとはいはないが、さうした場合もかなり屢々平氣で繰返されたのである。それと同時に、舞臺の上の時間的關係といふことも屢々眼中に置かれなまゝで、筋が進められて行つたのである。一例をとれば「桑原女之助」の第六段に於て、騰突されて家の滅びた敗北者と、騰突して一時的勝利を得た者とが、北條時頼の前で、對決によつて裁判される場合に於ても、裁判の途中で、騰突者の使用した偽印を取寄せる爲に、わざ／＼使者は騰突者の家に向

つて走らされるのである。

そして騰奏用の證據品たる小箱が扱われて、それが裁判の場へ持出されてから、裁判は進められることになつてゐるから、舞臺本位にいふと、その間裁判は中止されてゐる筈である。しかも物語では、筋を進める爲に、僅に其處が數行費されてゐるに過ぎないが、此處に舞臺的時間の考慮が少しも拂はれてゐないのみか、使者が騰奏者の家宅捜査をするといふ上に於て、起つて来る處の、場所的舞臺的變化に關する考慮は何も拂はれてゐないのである。かうした例はさらにあるのである。けれども此種の不合理については、古淨瑠璃に於ては何も考へられなかつたのである。唯物語の筋を進めるといふことにのみ主として注意が拂はれたのである。即ち文學としては考へられてゐても、演劇的戲曲的には時と處に關して、深く考へられなかつたのである。

道行と背景 淨瑠璃に於けるこの矛盾、上演を目的としながら、それよりも物語の筋を進めることにのみ注意し過ぎて、實際は物語本位であつたといふことの傳統的な誤謬は、道行の發達と、それに應ずる背景といふものゝ上に、最もよく現れてゐると思ふ。今日は歌舞伎を上演するに方つて、道行の中の風景の變化に應ずる爲には、背景を動かして變化させることによつて、詞章の味を出さうと努めてゐるやうであるが、さうした工夫が古淨瑠璃時代に行はれただらうとは、想像するだに不可能なことで、近松以後に於てすら、かゝる工夫が行はれたことを知らないのである。つまり道行の詞章の上では、風景は幾ら變化しても、背景は變化させない儘で上演されたことであらうと思ふ。江戸の淨瑠璃に於ては兎も角も、道行に重きをおいた井上大和掾の淨瑠璃に於ても、道行の風景の變るにつれて、背景を一々變化させたといふことに關する何等の文献をも見出さないのである。いな道行の如き背景の烈しき變化を要する

場は別としても、せめて變化の多い、其他の場面々に應ずる背景が、一々取かへられたといふことを知るに足る片言半句も、まだ私は見出し得ないのである。或はそれは私の淺學の爲かも知らぬが、若し道行の場は別としても、他の有ゆる場面に應ずべき背景を取換へることが、充分に行はれてゐたとしたら、操芝居の背景は、近松時代に於てもつと發達した繪としてでも見られたことであらうし、近松作の『用明天皇職人鑑』の鐘入の段とか、井上播磨の正本『頼光跡目論』の鹽釜の段などの如き場面以上の挿繪の殘存するものを、もつと今日見得たことであらうと思ふのである。否それのみでなく、背景の發達とか、背景の變化の點が、操芝居に於て充分に考慮されてゐたとしたらば、今少し古淨瑠璃の場面の上面に、戲曲的考慮が拂はれ、上演の上に演劇的考慮が費されてゐた筈と信するのである。

寛文貳年七月版 (繪入淨瑠璃史所載)



である。享保六年に至つて、近松作の『信州川中島合戦』が上演される際に、これまで通りに、簾の上に富士の山の書割をすることをやめて、新しく張抜にしたといつて、記録に残つてゐる位であるから、背景や装置の上の進歩は、近松時代に至るまでも、餘りに多く見られなかつたにしても、古淨瑠璃時代に於ても、主なる場面では、簡単な構造

を組立てるとか、幕などの上に、ある程度の背景を贅くといふことは行はれたであらうと思ふ。けれども近松以後に於ける背景や装置などから推測すると、古淨瑠璃時代、殊に明暦寛文時代に於ても、淨瑠璃の文章に現れたやうに、一々寫實的な背景や装置を用ひて、操芝居を上演するといふことが行はれたと信ずることは出来ないのである。一口に云へば、その文章の敘述と、その態度とが、それを可能ならしめるべく、企てられてゐなかつたからである。かくして場面の變化とか、装置や背景の設備や取換といふやうな點は、相當自由主義に立ち、いゝ加減に適宜に行はれたものであらうと思はれる。それと同時に、人形の活躍といふことも、之に類したものであつたことであらう。つまりが生きた人間が相當活躍してゐるやうに表現の出来る場合は、之をさうするが、その不可能な場合は、必ずしも詞章の表現以上に工夫を凝らすことはない。又それは不可能なことである。従つて文字通りに、有ゆる詞章を人形の動作に翻譯するといふことに、此時代に於てもまだ努力が費されることはなかつた程度であらう。あまりに寫實的文學的表現をするなどといふことは、詞章そのものが之を許さなかつたからである。かくして結局淨瑠璃そのものの上に、まだ戯曲的演劇的統一などいふことがないのであるから、自ら上演そのものゝ上にも、便宜主義自由主義によるほか、舞臺的勾欄的統一などは得られなかつたことであらうと思はれる。

大規模の仕組と戰爭 以上の如く極めて自由な表現意識の下に、頗る適宜に全曲の統一にかまひなく上演することが平然として行はれ、又其作品の性質上さうする外に仕方がなかつたのであらうから、一つにはまた如何なる大規模の仕組も自在に之を取入れることが出来たのである。かくして『義經地獄破』に於ては、古今の英雄が悉く集つて、堂々と地獄に攻入ることも仕組まれ、『十界圖』や『十界二河白道』や『曇鸞記』などに於ては、度々地獄の場が表

現されたりしたのである。それかと思ふと、公平物や其他の武勇物に於けるが如く、素晴らしい大戰爭の場面が自在に描き出されたのである。處がさすがに面白いことには、十萬の大軍が城に押寄せたといつても、結局觀衆の前に現れて大活躍を演ずるのは、兩軍の大將その他副將軍等數人だけである。彼等が互に名乗をあげ、系圖を誇つたりして、武勇を示し合ひ格闘する有様は、今日の戰闘とは全く反對である。雜兵の戰でなくて大將だけの戰である。この意味からいふと、古淨瑠璃の戰爭はあくまで舞臺的勾欄的に整理され表現されてゐるといつていゝのである。後の歌舞伎式である以上に、昔の戰記物式であり、物語式であるのである。

機巧装置の應用 淨瑠璃が全曲的統一を缺いてゐた一つの理由は、機械装置が大に發達して、その利用が此期以後漸く其度を加へたことにもあるのである。「萬治元年十二月朔日阿波の人竹田某、人形を製造して雲井に捧げ出雲の掾と受領」してゐたのが、寛文二年には「大阪に下りて、からくり芝居を興行」したと傳へられるのは、出雲が萬治頃江戶で活躍してゐたことを示すと同時に、當時の機巧装置が既に相當發達してゐたことをも物語り、彼の機巧芝居が、淨瑠璃芝居の上に、相當に影響を及ぼしてゐることを知るに足ると思ふ。現に大阪に於ける出羽掾の芝居は萬治三年三月の「天狗羽討」以後次第に機巧味を加へ、彼が靈驗物を上演するに至つて、愈々架空味機巧味の増加を見えてゐるのであるが、江戸に於ける明暦四年の「宇治の姫切」だとして、其處に糸操や機巧味は相當に現れ、和泉太夫が「あたこの本地」や「田村將軍」を上演するに至つて、一層その機巧應用の度を高めてゐることが明かに見られるのである。かくして此期の後半期に至つて漸く盛になり出した靈驗物は勿論、公平物や其他の武勇物に於ても、機巧装置の應用といふことは劇的不統一を顧みずして廣く行はれ、超自然的怪奇的興味本位の上演が専ら行はれたのであつ

た。

かくして白羽の矢が落ちて石に立つたので、之を抜かうとすると、それが變化となつて昇天するかと思ふと、籠のその愛鳥が猛火となつて消え失せる（後醍醐天皇）とか、敵の大將が天に祈ると、一方の大將が青息を吐いて霧をふらす（ゆり若大臣）とか、一人の天女が現れて見る／＼一丈五尺のまんだらを織上る（中將姫本地）とか、大蛇が立所に女人と變る（日蓮記）とか、大蛇と張良が格闘的活躍をする（咸陽宮）とか、又は「愛宕の本地」に於ける日羅の活躍などは、皆誤魔化せば糸操だけでもお茶を濁せぬこともないが、眞面目に上演したとすれば、皆それ／＼相當の機巧装置を應用して上演したものであらう。

此外「源氏五代傳記」の蜂や、「公平化生論」の山犬だとか、「公平劍の立花」の三面の狐だとか、「箱根山合戦」の虎、「ひんばしやら王」の虎や豹を用ひての活劇、「ゆり若大臣」の鷹其他大蛇の活動などには、皆糸操が應用されたことは云ふまでもないが、場合によつては、機巧装置が見物を喜ばしたこともあつたであらう。

かくして此期の作品に於ては、糸操や機巧装置の應用されて上演されたものが非常に多く、靈驗本位のものに於ては、殊に機巧装置が必ず利用されたのであつたが、歴史的な寫實味の豊かなものには、怪奇味も乏しく、自ら糸操や機巧が全く用ひられなかつたのではないかと思はれるものではないのである。「三位入道頼政」「金時浴陽入」「頼光跡目論」の如きがそれである。それ等は太夫とか作者とかの傾向によつてさうであるといふよりも、未だ偶然的の出現であるが爲に、それがまだ一種の潮流をなすまでに至つてはゐないのではあるが、やがて機巧装置の應用がすたれて、手遣式の操方が發達するにつれて、却つて本當の戲曲的淨瑠璃を導き、實質的操芝居を勃興せしむるに至

るものと見るべきであらう。

公平節の上演 江戸の和泉太夫父子の創めた公平節淨瑠璃の激越なる演出ぶりに關しては、今期の公平淨瑠璃發生

寛文九年刊 さつま小太夫正本題簽



寛文三年刊 新宮内正本題簽

時の一種の演出の方法であつたらしいことは、既に寛永期の薩摩淨雲の曲風を説くに方つて述べた如くである。そしてそれがまた當

舞踊的表現と結尾 構造について説いた項に於て、江戸の淨瑠璃が道行や景事に必ずしも重きをおかなかつたに反

して、上方淨瑠璃殊に播磨の語物に於ては、道行や景事が非常に重んぜられて、『鎮西八郎爲朝』には、此種の節事が四つも取入れられてゐることなどを説いたが、之等の場合に、曲節上濃厚なる表現が行はれたらうことは、折々さうした場面に於てのみ、正本の上に殊に曲節付が試みられてゐるし、而も特に濃厚な曲節付がつけられてゐることなどによつても知られるが、それにつれて人形の動作にも、所謂所作味舞踊味が多く伴つたであらうことは明かで、時代の進むにつれて、其舞踊味が益々濃厚になり、此期に至つてそれがかなりに發達したものゝ如くである。そして此舞踊的表現は、やがて段尾若しくは全曲の結尾に於て、一層著しく詞章的にも現れて來るのである。この段尾乃至全曲結尾の舞踊的な結末は、殊に歌舞伎の影響によつて、現れて來たものと思はれるが、その場面のほの見えて來たのは、此期の寛文頃であつたと思はれる。即ち寛文十三年(延寶元年)の『花山院后評』の曲尾を見ると、其第五段では、花山院には一條院に御位をゆづらせられて、やがてお祝とあつて、五條烏丸の千世松なるものを召して、今様の舞を舞はしめられることになつてゐる。尤も貞享版である江戸版の改作には、此今様の舞は取去られて、終が改作され、四天王が活躍することになつてゐるのである。これと同様の改作は後の『世繼會我』にも行はれ、上方本の『世繼會我』の第五段に於ける風流の舞は、江戸本の改作では取除かれて、全曲が六段に分たれてゐる。上方と江戸ではかくの如く節事の取捨上では多少の差はあるが、上方に於て、歌舞伎から取入れられたと思はれる形跡明かである舞踊的結尾の様式は、近松によつて採用せられて、色々な發達を遂げることとなるのである。尙これについての詳細は拙著『近松人形淨瑠璃の研究』にて説いたが如くである。

ところが寛文五年初夏刊の『熱田大明神の御本地』を見ると、其曲尾には、日本武尊が熱田大明神として祭られて

年々祭を行はせられることゝなつたと記して、最後に

「頃は六月四日の事なれば社人共を近付、明日は當社の祭禮也、今宵はしんかうの事なれば、よもすがら神慮をすゞしめ奉

り、明日恙なく御輿渡らせ給ふ様にと御氏子共へ相ふれよとぞ申ける、

社人共長つて候とて一々次第に相ふれ、やがて祭を渡しける、熱田大

明神の御神體日本武の御神徳有難し共中へ貴賤上下押なめ感ぜぬも

のほなかりけれ」



寛文五年刊「熱田大明神の御本地」終の繪

と結ばれてゐる。これで見ると、神樂を奏したり祭を行つたりしたといふのであるから、舞踊によつて曲を結ぶに甚だ近い結尾である。のみならず、此正本の最後を見ると、本文とは幾分關係の薄い挿繪が一つある。挿繪の右方には獅子頭が二あつて、各々太鼓を打ち、更に其前では冠物をして踊る者が二人をり、笛を吹く一人が馬乗りで従つてゐる。左の繪には一本差して笠をかぶつた馬上の若衆が馬方に従つてゐる。此若衆の上には「清十郎ふし」の文字がある。此挿繪は、曲尾に於ける祭禮の賑を示すものと思はれるが、此繪を單なる空事であるとするには丁寧過ぎはせぬであらうか。萬一これが繪空事であるとしても、此曲尾は『花山院后評』の千世松の舞の先驅をなすものと見るに足ると信するのである。蓋し寛文三年には、江戸中村座で總踊が始められたといふことなど

によつても、歌舞伎の影響として、淨瑠璃の曲尾を舞踊などで賑かにすることなどが漸く始められ出したのであらうと思はれる。

一九 明暦寛文期の正本

江戸本の刊行 明暦に至つて、淨瑠璃の正本には色々な革新が起つた。型の大きさ、製本の仕方、挿繪の體裁、製版元などが、これまでとは見かへたものとなつたのである。第一に版元の點からいへば、これまでの正本は、皆京都版であつたが、明暦の大火以後、江戸にも版元が色々あらはれて、『咸陽宮』や『身替問答』はもすやで發行し、『宇治の姫切』ははんぎや又左衛門で出した。又吉田屋では『六孫王經元』を刊行した。かうして色々な本屋が京都の版元山本九兵衛、鶴屋喜右衛門、八文字屋八左衛門等と對抗することとなり、或は京都の正本屋も江戸に出店を設けるものもあつた。云ひかへれば、明暦以後には、京都の版元からも發行した正本もあるが、江戸の正本は大抵江戸の正本屋か、又は京都からの出店で發行し、上方の正本は多くは京都で出したが、大阪でも出すこととなつたのである。

體裁の變化 第二に注目すべきは、正本の大きさ綴方等であるが、これまでの正本は大抵京都製の小形であつたのが、明暦後に至つて、一體に版形が中形ともいふべき位に少しく大きくなつた。これまで大抵上下二冊にして黒表紙で別々に製本されてゐたやうであるが、明暦以後は一冊に製本されることとなり、柱に上下の文字を入れて、丁附を上下巻別々につけたものが上方本には多くなつた。挿繪もこれまでは、稚拙な技巧に成るものに、印刷後に繪具を處々になすりつけた、所謂丹緑繪であつたのが、此期に至つて、色彩が全く取去られて、圖樣構想が漸く寫實的に、人物も大分大きくなり、寛文に至つては一層大きくなつて、一見した正本の體裁は、これまでとは別物の感があるものとなつたのである。といつてそれは主として上方版のことで、明暦以後に現れた江戸版は、之とはやゝ趣を異にして發達し、上方版と江戸版との間には、非常に差別が起つたのであるから、むしろ之について暫く別々に記述するを便利とするのである。

上方本の形 明暦となつての上方正本としては、大火前に、『さんせう太夫』が山本九兵衛から出てゐるのが(殘存正本としては)最も早い。これは説經でもあり、まだ前期の體裁のものであるから、今のところ明暦四年七月の『平維盛紅葉狩』を最古とすべきである。けれども此正本は今日何處にあるかを知らないから、上方版の此期の現存もので、最も古いものは、京都帝國大學國文研究室所蔵本、萬治二年正月刊太兵衛版『にたんの四郎』(東京帝國大學圖書館舊蔵本と同一にて、現東大圖書館蔵本、及び帝國圖書館蔵本『仁田四郎』は、これと同文であつても、共に寛文七年刊である)だといふことになる。之等はまだ共に半紙判形より稍小さい、所謂中形ともいふべきものであるが、それが萬治二年七月刊の山本九兵衛版『源平戀遺恨』(現時豊竹古榎太夫氏蔵)となると、最早立派な半紙形であり、正確にいへば、半紙二つ折形である。爾來京阪の明暦寛文期に於ける正本は、殆ど全部が半紙判形にして、中形は僅に四種を見るに過ぎず、所謂四六判の小形即ち美濃紙四つ折大のものは殆ど其影を見ないやうである。

それにしても公平本では、江戸よりも上方の方が早くから出てゐると、これまで甚だ屢々説かれてゐるが、それは何處に中心がおかれてゐるのか、何れを上方本の最初の刊本と見たのであるか知らぬが、私の所見では何だかさうでもないらしく思はれる。萬治三年三月山本九兵衛刊の『公平末春いくさ論』を、現存公平本の最初のものとするならばとも角、若し萬治二年七月の『四天王武者執行』をも公平物とすると、それは江戸版であるから、その方が前であり、又『咸陽宮』も既に公平味のあるものと見れば、それも明暦三年五月の江戸もすや版である。従つて唯公平本は江戸より上方の方が先に出てゐるといふ説は、聊か怪しい不明瞭なものであるといはねばならぬ。

上方本の版元 これまで公平本の版元といへば、主として山本九兵衛、鶴屋喜右衛門、西澤太兵衛などであるとせられてゐたが、明暦寛文期の上方面正本にて、版元の明かなものについて見ると

- 山本九兵衛版 五十種
- 鶴屋喜右衛門版 二十二種
- 八文字屋八左衛門版 十九種
- 西澤太兵衛版 五種
- 八兵衛版 一種
- 仁兵衛版 一種

である。これで見ると、上方版正本の大部分は、九兵衛と八左衛門と喜右衛門で刊行されてゐるといつてよいのであつて、草紙屋や、淨瑠璃本屋などは、本屋の仲間でも低級視された傾はあつたにしても、相當に商賣は繁昌してゐた

らしいことを知るに足ると思ふ。

大阪の正本屋と楊貴妃 大阪では久しい間、正本の供給を京都に仰いでゐたのであるが、大阪上久賣寺町三丁目の



丁初 (語物妃貴楊) — 「帝皇宗玄」

西澤太兵衛は、萬治二年には『にたん四郎』を、同四年には『綱金時最後』を刊行してゐる。此太兵衛は寛文二年七月には又『花物狂』を發行してゐるが、『繪入淨瑠璃史』所載『花物狂』の題簽(六〇三頁)を見ると、『正本、九兵衛、新版』の文字が見えてゐる。これは二つの店の間に親しい関係でもあつたことを示しでもするのか、如何なる意味に解すべきか明かでないが、太兵衛といふのは、作者西澤一風の父で、一風は後に正本屋九左衛門といつてゐる。

此太兵衛が寛文三年三月に出した『玄宗皇帝』即ち「楊貴妃物語」は頗る風變りなものである。半紙判形十二行振假名付の三十九丁本にて、挿繪は両面物が十二、片面物が六あつて、他の同時代の正本よりも非常に多數の挿繪を有し、おまけに巻頭には、各段の長々しい説明的目錄がついてゐて、淨瑠璃の正本といふよりも、假名草子風の一種の讀本かと思はれる。けれども題簽を見ると、外題の上に「直の正本」とあり、而も全曲が六段に分れて、すつかり淨瑠璃の

正本風の形式をとなへてゐるのである。つまり淨瑠璃に語つたものを、讀本風にして發行したのであらう。

上方本の行數と丁數 上方本は江戸本に比べると文字が稍大きく、殊に寛文期ものは江戸本の文字より遙に大きく、所見本乃至行數の明かなもの九十七種の中

十六行のもの	七十四種
十八行のもの	八種
十七行のもの	七種
十四行のもの	二種
十二行の玄宗皇帝	一種
不明	五種

であるから、大部分が十六行本で、時々十七八行のものもあると見ることが出来るのである。

江戸本には見られないことであるが、上方本には、既に述べた如く、一冊綴でも前期の面影を残して、柱の丁附の上に、上、下の文字を入れて、其丁附が上、下別々になつてゐることが多く、所見本中、此種のもものが三十五種に上つてゐる。そして丁附は多く「二」から始まつて、中には時々三、四、五などと一丁に數丁數を附記したものもあり、全體で丁數は多く見えても、實丁數はそれほど澤山なく、さりとて落丁でもないといふ場合が澤山あるのである。これは刻版の場合の見當違ひによるものか、江戸の小形を大きくした場合にでも起つたのか、單に丁數を一見多く見せる爲か、理由は明かではないが、上方の寛文版には、かうしたことを屢々見るのである。

さて所見本中丁數の明かなる七十四種について見ると、總丁數の

十九丁のもの	二十種
十八丁のもの	十三種
二十丁のもの	九種

が最も多い方で、此外二十一丁及び十七丁が六種づゝ、二十二丁及び十六丁が五種づゝ、十二丁から十四丁のもものが二三種づゝ、二十三丁ものが二種、十一丁のもものが一種である。

上方寛文版の特徴と段付 上方の寛治寛文版の特徴とも見るべきは、前記の如く丁附が上下巻に分れてゐるものゝ多いこと、各段の段付の下に、「何々の事」といふやうな説明句がついてゐるものが少なくないことで、殊に寛文版にはそれが多いやうである。それも上下の丁附の通されて來る事と共に、寛文の終になつては大體見られなくなるのであるが、今一つ此期の上方版の段付は、大抵、第一、第二、第三と記されてゐて、江戸本には、初段、二段目、三段目と記されてゐること多いのと比べて、聊か趣を異にしてゐる。

最小形の存在 尙此處に附記すべきことは、寛永正保期の正本、「石橋山七騎落」の項にも記しておいた事であるが、同曲は、金平本全集中の複製では、半紙形に近い中形に作成されてゐるが、之が原本たる東北帝國大學圖書館所蔵本によると、全く反對の最小形である。最小形といふのは、普通の小形が美濃紙四つ折形であるのに比べて遙に小さく、即ち半紙四つ折の袖珍形である。中形といふと、美濃紙四つ折の普通の小形より稍大きい方であるのに、何故にこの複製は、原本より非常に大きくしたのか、恐らく唯他の類似正本と共に、保存取扱に便する爲であらうか、そのことが明記してないから、ひよつとすると人を誤りさうな複製である。それは兎に角、寛治元年十月刊の「熊野

之権現記」を見ると、全く此「石橋山七騎落」と同形である。そして兩書共に九兵衛版である所から見ると、折々かうした最小形のものも、九兵衛によつて刊行されたと思はれる。

江戸正本の形 江戸版正本は前期には見られなかつたのであるが、既述の如く明暦大火後間もなく、五月には通油町ますやから『咸陽宮』が刊行され、ついで『身替問答』『宇治の姫切』などが刊行された。此頃の形は小形よりは稍大きく、半紙判よりは小さい、中形ともいふべきものであつた。爾來寛文の末に至るまで、上方で發行され、若しくは上方の出店から出されたものもあるが、江戸の板木屋から刊行されたもの漸く多く、やがて全く京阪から獨立した江戸製の正本のみを見ることゝなつた。其中小形即ち美濃紙四つ折形が最も多く、中にはそれより少し切形の大きい中形、及び半紙二つ折形もないではなかつた。所見本について見ると、

- 小形のもの 三十二種
- 中形のもの 十一種
- 半紙判形のもの 四種

の外に、稍後期のものかと思はれる半紙形も四種あつた。

江戸本の版元 明暦頃から江戸の正本が江戸で出来るやうになり、京阪から獨立することゝなつたといつても、九兵衛や喜右衛門などは江戸に支店をもつてゐたのであるから、絶對の獨立ともいへないやうである。それでも上方から全く獨立して正本を發行した店もかなり澤山あり、此期に於ても十指を以て數へ得るやうである。

此期の正本で、版元が江戸とわかりながら、汚損とか後刷であるとかの理由で、版元の不明なものも少くないが、

- 鱗形屋版 六種
- 升屋版 四種
- 伊勢屋七郎右衛門 三種
- もすや版 二種
- 十右衛門版 二種
- 山形屋版 二種
- 益屋七兵衛版 二種
- 又、右衛門版 二種
- 又、左衛門版 一種
- 藤屋版 一種
- 吉田屋版 一種
- 大傳馬町山本九兵衛版 一種

今所見本其他を合して、版元の明かなものを總計すると二十七種に及び、之が版元を見ると左の如くである。

右の内、もすやは十右衛門であることを何かで見ることがあると思ふが、今どうしても其出處を調べ出し得ない。又最後の江戸の九兵衛版といふのは『義経地獄破』であつて、それは東京帝國大學舊圖書館藏の題簽によるものであるが、これは九兵衛の支店から出したことになつてゐたものであらう。要するに此期には、江戸ではまだあまりに澤

山の正本を發行してゐるものはなく、互に競争の地位にあつたものゝ如くである。尙此版元中後期のものもあるか。

江戸本の行數と丁數 これ等の江戸本の行數を、判明せるもの五十四種について見ると、

十六行のもの	三十七種
十七行のもの	十三種
十五行のもの	四種

であるから、上方本と同様、十六行が最も多く、之について、上方本は十八行本と十七行本が多いが、江戸本ではまだ十八行本はなく、十七行が割合に澤山あるだけである。

丁數の點では、此期にはまだ十丁本は殆どなく、僅に「公平甲論」が一種だけであるかと思はれ、十丁本の發達するのは元祿以後の事のやうである。其他丁數の最も多きは二十二丁であるが、これも甚だ少く

十七丁のもの	七種
十八丁のもの	六種
十九丁のもの	七種
十二丁及び十三丁のもの	各六種

其他は十四丁及び十六丁のもの三四種づゝで、十五丁ものなども見られぬことはないが、結局十二三丁か、十七八九丁ものが最も多いことを見るのである。

木曾物語と愛宕の本地 以上の外に不思議なものが一つある。それは油町かぎや七兵衛版の「木曾物語」で、珍ら

しく半紙形であり、現に上下二冊に分けて製本され、上巻十丁下巻十四丁合計二十四丁本にて、其丁附は上下巻を通じてつけられてゐる。各十五行の輸入本であり、村岡典嗣氏が倫敦にて發見されたものである。萬治頃のものかと思はれ、太夫名も刊記もないが、六段に分たれてあり、淨瑠璃としての形式はそなへてゐるが、或は讀む爲の戦記物かと思はれる。

之とならんで、江戸和泉太夫の正本「あたごの本地」は、喜右衛門版ながら、江戸で發行したものかも知らぬが、兎に角、楊貴妃物語の「玄宗皇帝」と同様に、見返しに内容説明の一つ書が澤山についてゐる。

此外に江戸本としては、此期の上方本と異つて、丁附が上下に分れてゐるものなく、段付が大抵初段、二段目、三段目となつてをり、段付の下に説明句のないことは、既に説いた所である。

東西正本の挿繪 由來本の中に挿繪を加へるといふことは、支那明代の小説の例にまねたものであらうと思はれるが、此時代の淨瑠璃の正本に關しても、最も面倒なるとは、挿繪の作者の點である。上方の正本で延寶天和頃のものには吉田半兵衛の手になつたものが多く、江戸のものは師宣の作が多いとは、『輸入淨瑠璃史』の著者も説く所であるが、明暦萬治から寛文にかけての東西の挿繪の作者は、頗る明かではないやうである。勿論色々の推定もされてはゐるが、結局は不明といふの外はなからう。

それにしても明暦萬治頃の挿繪は、寛永正保期のものに比べると、非常に寫實的となり、筆觸も大分確かになつては來たが、大體に明暦から萬治の初頃のもの、まだ繪の人物がそれほど大きくないのが普通である。ところがそれが萬治の終頃から寛文となると、東西共に、人物の繪が大きくなり、殊に公平物になると、頗る雄健な畫風で其顔は

怪奇な超人的なものとなつて、所謂公平式の、グロテスクな大きな目のものとなつたのである。それが延寶に入るにつれて、再び漸く柔か味の多いものとなり、殊に上方物は所謂時代味の濃厚に現れたものとなつてゆくのであるが、寛文を過ぎては、元禄後にならぬと、江戸本の残存せるもの餘り多くを見受けないうやうである。

挿繪の数の比較 挿繪の数は、一見した所では、江戸本の方が多いうやうで、最初に見られる『咸陽宮』の如きは、

両面見通しの繪が七、片面繪が六あり、『後醍醐天皇』の如きは、両面繪が九もあるといふ風で、最も挿繪の少いのは、『東鑑平鬼王丸』の両面繪三である。

之に對して上方本では、残存せる最初の正本『紅葉狩』の繪の数は不明であるが、其次の『にたん四郎』は両面繪六、『源平戀遺恨』のは両面繪が七である。それから最も挿繪の多いのは『熱田大明神の御本地』と、『宇佐八幡の出来』の各兩面繪八で、最も挿繪の少いのは寛文末の『花山院后評』の兩面繪三である。

それにしても両面繪と、片面繪とが折々交つてゐるので、今比較に便すべく、近代的に両面見通しの挿繪を二頁、片面を一頁として、東西所見正本の挿繪の数を比較して見ると、

△江戸本 十二頁の挿繪

十四種



寛文元年刊 『丸くとんし』



佐藤七太夫正本 『丸くとんし』

十四頁	五種
十三頁	三種
六頁	六種
十頁又は八頁	各二種
九、十七、十八、二十頁	各一種
△上方本 十二頁の挿繪	十八種
十頁	十三種
十一頁	七種
八頁又は十四頁	各五種
十六頁	四種
九頁	三種
十三頁	二種
六、七、十五頁	各一種

右の表によつて見ると、江戸本は六段曲が多いから、自ら各段に両面の挿繪を入れたものが多く、上方本には、六段曲もあり、五段曲もあるが、六段曲でも五段曲でも、何れも各段に両面の繪を挿入したものが普通であるといふ計算になるのである。

東西の變つた正本　かくして東西共に、五段曲でも六段曲でも、各段に両面挿繪一を入れたのが、明暦萬治寛文期の最も普通の正本といふことになつたが、面白いことには、桁外れに澤山の挿繪をもつてゐるものが東西雙方に各々一宛ある。既に記した上方の『玄宗皇帝』と、江戸の『十界圖』とがそれである。太兵衛版の『玄宗皇帝』は、前にも述べたが如く、讀本々位のもので、両面繪が十二、片面繪が六、即ち合計三十頁の挿繪を有するに對して、江戸肥前掾の正本たる『十界圖』には両面繪二の外に、三分の二頁大の繪に、三分の二の文を交ぜたものが両面十と、片面一あるから、結局挿繪の總數は二十五頁に上ることになるのである。要するに之等を見ても、如何に此時代の正本が筋書と繪入番附とをかねた、最初の正本發行の意義を明かにし、つまり讀物兼用本であることが充分に察知出来るのである。

正本の曲節付　此時代の正本に關して、更に少しく附記しておくべき事は、江戸の小形本には曲節付が稀に見られる程度であるが、上方の正本には、かなり澤山の曲節付を加へたものが大分見られるに至つたことである。けれどもまだ寛文期には、語り方の句點を加へたものはあつても、墨譜を加へたものは殆ど之を見受けず、その見られるに至るのは、延寶になつてからの事である。

110 古淨瑠璃正本の作者

寛永正保期　原武太夫の『奈良柴』に、杉山丹後や薩摩淨雲等が初め「十二段」を語つてゐたのに對して、清玄といふ人が六段物の淨瑠璃を作り與へたことが記してあるが、其作品の外題が明かでなく、又「中古戲場説」には、北條宮内が薩摩節の淨瑠璃を作つたことを記してゐるが、それが何時頃の曲を作つたのか、等しく外題もわからないから、古い時代の淨瑠璃の作者に關しては頗る不明であるといふ外はない。

明暦寛文の作者　明暦以後の作品に關しても、作者の明かなものは澤山はない、之を貞享頃まで下つて求めても、僅に八九篇の作者を知り得るに過ぎず、その内最も多くその名を見るのは岡清兵衛である。其他には小島佐平次、四野宮彌四郎、岡五郎兵衛の名を見るものが一篇づゝあるだけである。此四人の外にも二三の作者名を、『聲曲類纂』などはあげてゐるが、其外題名を見ないのであるから、之を如何ともすることが出来ない。今試みに作者の明かな外題をあげて見ると下の如くである。

尤も此處にあげたものは、凡て所見のものであつて、『公平生捕問答』の如きは『聲曲類纂』に引用された見本文から判定したものであり、『繪入淨瑠璃史』に引用されてゐる逸名の作の如きは、未だ其外題を發見することが出来ないが、東京帝國大學圖書館所藏の清兵衛作の逸名のものなどは、『繪入淨瑠璃史』所記の暗示によつて、『高う

ねぢ』であることを判定し得たのである。又閱讀した「頼光跡目論」の岡清兵衛作と記されたものは、刊年は不明であつたが、版式や挿繪から、貞享頃のものではないかと思ふ。

うちの姫切	明暦四歳猛春	江戸和泉太夫正本	岡清兵衛重俊作
箱根山合戦	萬治三年初春	天下一薩摩太夫藤原直政正本	小島佐平次作
公平生捕問答	寛文三年五月(?)	丹波少掾平正信正本	岡清兵衛作
日本大王	寛文八年(?)	天下一丹波少掾平正信正本	岡清兵衛作
高うねぢ	寛文中頃	天下一丹波少掾平正信正本	岡清兵衛作
頼光跡目論	貞享頃	丹波少掾平正信正本	岡清兵衛作
四天王	貞享頃	丹波少掾平正信正本	四野宮彌四郎作
日本兩武將始	貞享頃	天下一丹波少掾平正信正本	岡五郎兵衛作
(逸名、繪入淨瑠璃史所載)	(正月、又右衛門版)	丹波少掾平正信正本	岡清兵衛作

岡清兵衛の傳記　その他の太夫については殆ど何もわからないが、それでも岡清兵衛については「江戸名所咄」に引かれてゐる。

「和泉太夫が淨瑠璃は、岡清兵衛といふもの作る、(いつぞの程にか金時が子をきんびらなりといひひろめ、渡邊の綱が子をたけつなといひけやらしてより、昔がなりに云傳へたる辨慶時宗朝比奈などは彼金平が片手にも足らぬ様に聞えければ、怪刀亂神を好むをのこともは金平を語るを聞ては、そばにてこぶしをにぎりきばをかみてよろこぶ程に、金平といふ事を三歳の

わらへ迄も知りて、日本國へ弘まったり)彼金平作りの清兵衛は、生れつき才發にして、物覺えよく、太平記、盛衰記、あづまかみみなどをそらにおぼへ、儒釋歌道をも少しづつはこころみければ、古事來歴を引事得もの也とかや、此清兵衛近頃病死したるとき、哀にもをしくおもひければ、

金平を作り岡清びやう死して

惜や思へば學もたけつな

を土臺にして、『聲曲類纂』以後の諸書が今日に至るまで皆彼の傳記をつくりあげてゐるのである。けれどもまだ事實上其生死の年月さへ諸説がある、或は其死を元祿四年とか貞享三年などとするものもあるが、貞享四年七月の死が正しいと思はれる。けれども彼の生年と、幾歳で死んだかは明かでない。それにしても岡清兵衛が名乗を重俊といつたことは正本に記されてゐる所によつて明かであり、明暦四年の『宇治の姫切』から貞享頃まで、多く和泉太夫の爲に創作したのであるから、かなり長い間古淨瑠璃に筆を取つてゐたといへるのである。而も最初は公平物風の武ばつたものに多く筆を取つてゐたのであるが、『頼光跡目論』の改作を見ても明かなごとく、彼の作品にも次第に情味を加へようとした跡がまぎ／＼と見られるのである。

二二 古浄瑠璃の特徴

初期は先行藝術其儘 古浄瑠璃といつても殊に寛永正保期の語物中には、舞曲やお伽草子其儘のものや、之を改作したもののがかなり多く、明暦萬治寛文に至つても、間々其種のものを見かけることは、既に説き來つた如くであるが、さうした作の多くは小説的な、非立體的な物語から成り、單に興味を中心とし、話の筋に重きをおいた散文であるに過ぎなかつた。之を戯曲といふには頗る距離のあるものであつた。

依然筋の興味中心 寛永十一年に「はなや」が創作されてから、「安ら判官」「生捕夜討」「明石」等の新作がぼつ／＼現れるに至つたが、依然として大體に、散文的物語の域を脱することは出来なかつた。明暦萬治寛文に及んでは漸く創作の續出を見たのであつたが、矢張あまり變つた仕組のものも、進んだ趣向のものもなければ、表現上何等珍らしいものもなかつた。成程出来るだけ物語を人形の動作に翻譯しようとする上演上の要求から、次第に人物の動作が多くなつたことは事實である。充分な戯曲性はまだそなへるに至らなかつたが、演劇味が増加されて行つたことは事實である。けれども、もと／＼人間の俳優が演ずるものでなくして、而もまだ操り方の巧でない人形の俳優が演ずるのであるから、表情や情味を充分に出し得よう筈もなく、已むなく筋の興味を中心とする外はなかつた。従つて姿色に重きをおく俳優本位の歌舞伎が、最初脚本を重んじなかつたのとは反對に、鬼も角も必要上から、一面では筋の

面白味の方面に向つて、浄瑠璃の發達を見たのであつた。

架空的怪奇的表现 かうして一方では筋の面白味の方から演劇味を増しては來たが、矢張もと／＼非戯曲的な物語たるに過ぎなかつたからには、其筋を面白からしむる手段としても、他の一面に於て、表現上に工夫を凝らして、浪漫味を多分に取入れて、頗る架空的怪奇なものたらしめること

萬治三年刊

(東北帝大蔵)



によつて、一層演劇味を加へようとしたのであつた。それはそこに出て來る人物の凡てが、生きた人間でなかつたからでもあるが實際に文學そのものゝ進歩が、まだ生きた人間を描かうとし、生きた人間の生活を表現しようとするまでに至らなかつたから、殆ど先行藝術其儘を繼承して、自然に荒唐無稽なものとなり、甚だ架空味の豊富なものとなつたのである。人物の多くが超人的であり、其處に超自然的な非人間的な世界が現出したのである。つまり、唯さうした超人的なものをかつき出して、面白可笑しい物語

の筋を傳へようとしたのである。又さうするより方法がなかつたのである。従つて凡ての人物は手足は動かしても、その頭は空つぽであり、空想やお説經や教理や理想の上に、美しい着物を着せた、人形的見世物にしか過ぎなかつたのである。公平物ばかりでなく、其他の武勇物や靈驗物の多くも皆さうであつたのである。

機械的要素と大規模

話の筋を面白からしめんとし、その爲には、寫實的現實的であるよりも、架空的怪奇的浪漫

的であることを求め、それによつて演劇味を豊かならしめようとしたのであるから、之が再現に方つて、自ら機械的要素を多分に要することゝなつたのである。換言すれば、之が上演に際しては、糸操の外に機巧を盛に應用したのである。此傾向は萬治から寛文に至つて漸く甚しく、やがて延寶に入つては、靈驗味の増加と共に、一層其度を加へて行つたのである。そして又機械的要素を多分に取入れて、其演出を自由な技巧的なものたらしめたが爲に、人間以外の鳥獸蟲蛇も容易に活動せしめ、雲とか水とか、日月の如き自然現象も面白く表現することが出来、従つて古淨瑠璃の規模は非常に大きなものとなり、又場面的制限をあまりに考へず、出来るだけ戯曲的ならしむることにあまりに注意が拂はれることなく、背景なども大して重きを置かれなかつたが爲に、久しい間淨瑠璃は、極めて自由なのびくした語物の域を脱することが出来なかつたのである。

童話的啓蒙的教化的 物語の筋を面白からしめんことを目的とし、その目的を達せんが爲に、架空的怪奇的浪漫的な味を多分に取入れたが爲に、古淨瑠璃は其表現に於ては、糸操や機巧を應用して、頗る機械的ならざるを得なかつたのであるが、翻つてまた其内容の點から見ると、非常にお伽草子であり、童話的であつたともいへるのである。お伽草子の童話的傾向を多分にもつてゐたのみでなく、忠孝思想を鼓吹するものが多いとか、神佛の靈驗功德を示さうとし、宗教宣傳的傾向のものも多かつたといふことは、古淨瑠璃がそれだけ啓蒙的教化的傾向を多分にもつてゐたことを示すものともいへるのである。またさうした第二義的教化的傾向を多分にもつてゐるだけ、古淨瑠璃は藝術の第一義から遠ざかつてゐるともいへるのである。

經濟的要素缺乏 公平物乃至その他の武勇物に、武勇的冒險味怪奇味が多分に現れ、靈驗本位の宗教物に菩提心の

鼓吹が大に見られたのは當然ながら、封建的威力のみ尊ばれた時代に、國體觀念や忠孝思想の現れたものゝ存外多いことも、古淨瑠璃の一つの特徴といふことが出来るであらう。従つて凡てが敬神崇佛の念と、勸善懲惡の道義觀を伴はないものはないといつてもいい位であるが、未だ現實味世話味の盛り入れられること甚だ少なかつただけに、人買物や誘拐物以外に、經濟的要素の織込まれたものは殆ど認められないのである。

傾城事的情調 現實味が少いといへば、寛文期の終までの古淨瑠璃に、戀愛味を取入れたものは頗る少く、僅に數篇を數へるに過ぎないことは既に説いた如くである。就中戀らしい戀の場面を入れたものといへば、『日本大王』と『八幡太郎義家』と、衆道味を取入れた『景政雷問答』乃至『権五郎雷論』位のものである。その他の世話味の現れたものも甚だ少く、所謂傾城事といふほどのものを取入れたものは未だなく、『三浦北條軍法比』や『今川物語』などには、白拍子を舞はせるといふことはあり、『和田酒盛』にも多少の艶やかさの見られる場はあるが、そこに歌舞伎的な靡情調といふやうなものはまだ現れてはをらぬ。所謂傾城事の取入れられるに至るのは、延寶期に入つてからの事で、加賀掾の語物である延寶五年刊の『靜法樂舞』などはその早い方であらうが、寛文期の作と思はれる『和國美人哥謔』には、傾城事に甚だ近いものが現れてゐる様に思ふ。此曲の第四段に於て、捕虜の敵將結城七郎景氏を預つてゐる五人の者共が、父の景氏を救ひ出すべく、敵地に入り込んで遊女になりすましてゐる松世姫を垣間見にかけて行つて、宿の亭主から姫をかりて歸り、酒宴を催してゐる中、姫が五人の一人から舉動を怪まると、

「其時姫君大歪たんぶとくみおんしが前にもちゆきて、なふいかに、つれなきとの、みづからが歪なり、是一つ開し召せ、お約束の歪也とてひざによりそひたはむれ給ふぞおかしけれ、一さの人々あらうらやましの御歪我に給はり候はゞ三ばいかさ

れ申さんと口々にいひ立られ、心ならずおんしもしうけくのふだりける、その時姫君さしきを立、御殿類なる聲をあげ、
當世はやりし浮世忘れといふうたをはつたとあげてぞまひ給ふ、先せいやうのあしたには谷の戸いつる雲の聲めづらしくさ
へつりて、軒ばの梅もさきにほひ……」

といふ風に『十二段草子』の影響に成つた四季の景色を、姫は歌ひつ舞ひつするのである。云ふまでもなくこれはまだ傾城事でないことは勿論であるが、これが漸く淨瑠璃に傾城事の取入れられる先驅をなすものと見ることは出来るであらう。いなさうした傾向が寛文期に既にほの見えてゐることを示すに足るものと思ふ。

謡曲的情調 更に古淨瑠璃に於ける特徴の一つは、謡曲味の多量に取入れられてゐることである。謡曲の題材が初期以來既に多分に古淨瑠璃に借入れられ、若しくは出處や原據を謡曲に有するものが多く、若しくは謡曲的曲節が取入れられること少くないことも既に述べたのであつたが、大和掾に至つて、謡曲的情調を淨瑠璃に取入れたことは想像以上である。それは彼がもとゞ謡曲に興味をもち、謡曲を巧にしてゐたことにもよるのであらうが、それによつて彼は淨瑠璃そのものに情味柔か味を加へようとしたのである。彼の謡物である寛文十年仲春刊の『鎮西八郎爲朝』を見ると、名所見物の節事や城の繪圖見の節事などに加へて、勇將爲朝が茶の徳を讀へて趣をそへようとしてゐる上に、第四段に於ては、蘆屋藏人は爲朝を酔はせて殺さうとして、二臣をして謡ひつ舞はせつする場が添へられてゐる。その場は先づ二人の若者が立つて、「時の調子をうかどひて、はつたとあげて謡ふ」から始まつて――

「君が代はくあまの羽衣まれにきてなすともつきぬいわばなるらん、こくどあんどん長久のよるこびのまひをかなでつつ、
いさく君をいさめん、ふいくわの春もよろづとしなをよるこびはまさりぐさ、きくのさかづきとりくにくぐれやくを

ぐるまの、てまづさへぎるきよくすいはなのほそてをひるがへし、さすもひくもひかりなれや、よもつきしくくすりの
みづはいつみにて、くめどもくいやましに、のめばかんろもかくやらん、さればうたにも山川のきくのしたみづ、いかな
ればひかれて人のおひやせくらんと、いにしへ人のながめしも、たゞ此さけの事やらん、あれく御らん候へ、御まへにみ
へしほうらいのしまにさかふるまつがへに、ひなづるはずを出て、君がよはるなわふなるいわほのかたにかめあそび、ち
よよろづよもかぎりなみかぞおだやかに、國もゆたかによろこびのまゆをぞひらく花のふた、いまをはるべとさくやこの梅
はさきだつ花の兄、あきさくきくはおとぐさ、ともにかさめるはるあきのいくとし月もかぎりなく、きみをいわふときく
の酒いざやすめてつわものまじわりのみある中のふんはひさしきわかみどり、あほぐにあかぬちよもやちよも、ちよ
もやちよも、せんしうはんせいとことふきしていわぬ入てぞまひにける、ためともきやうにぞうじ給ひ、あふぎをひらきゆ
やくあれば一ざの人々一とうにかゝるめでたき大將ぐんをしんめいぶつたもをうごあれと、ひやうしをそろへこゑをあげ、
よはるをさづくる此君のゆくすへまもれと我しんたくもつけをしらす松かぜもむめもさかふる君もめでたけれ、あつばれ
ゆらなるあそびやと上下はんみんをしなべ探かんぜの物こそなかりけれ」

と此一段は結ばれてゐるのである。思ふに、此邊は謡ひがりの曲節で謡ひ、それにつれて舞はしめたものであらう。其外大和掾の謡物には、寛永正保期の若狭掾の謡物にならつて「つらくおもんみるに……」と長々しい謡曲的の序の文を以て始める曲が少くないことによつても、また彼の段物集『忍四季揃』中の曲節付を見ても、「ウタヒ」と節付された處が非常に多いことによつても、彼が詞章上曲節上謡曲味を如何に多分に取入れたかを知ることが出来るのである。そしてかうした傾向は延寶期の加賀掾によつて、一層その度を加へることとなるのである。

日本の特色の節事 更に古浄瑠璃の特色中最も著しいことの1は、景事、道行等の節事を大に發達させたことである。拙著『近松人形浄瑠璃の研究』に於て説いた如く、道行の如きは、鎌倉時代の宴曲にも既に見られ、謡曲にも短いながら常に現れたものであるが、古浄瑠璃に至つて、これは一層發達の閃を見せ、大和掾に至つて、『十二段草子』

寛文二年 (京都帝大蔵)



の影響を受けて、景事と道行とを著しく發達させたのである。由來、日本人は天地自然の風光を賞翫し、自然美を愛好すること甚だしきは國民的特性の一つであり、従つて自然の風物をかりて、日常の感情思想を述べるといふことは、古來ありふれたことで、外國文學には殆ど見られぬことである。既に久しく謡曲を愛好して、其情調曲節を樂みながらも、形式に飽き足らなかつた大和掾は、浄瑠璃の世界に飛込むや、知られてゐる限りに於ては、先づ謡曲味の豊かな『紅葉狩』を語つて、その中に「しほがま」の景事を加へることを試みた。而

も彼は此「しほがま」の景事を、後にはまた『頼光跡目論』にも用ひ、その他にも之に類した景事を屢々取入れ、殆ど其有ゆる語物中に景事を加へないことないといふ風である。彼の自然を愛し、自然美を好むの感情は、自ら彼の人事に對する情操とも結びついて、全曲中に四回も節事の繰返される『鎮西八郎爲朝』ともなつたのである。更に大和掾の正本たる事が明かである『渡邊智略討』の第三段を見ると、「さても〱世にはすむべきものにて有、公平の物のあはれを觀念し、竹綱をあらきなりとせいごんを受くる事こそきたいなれ」と述べてゐるほどあつて、ついで現

れてゐる同曲の道行には、公平季宗が頼義の輿をかいて進む様を説きつゝ、

「……げにやうきよと開時はうきにはもれぬあみのわの、ぜんせのがうの身につもり、きすなにひかるゝおぐるまのめぐるし
くれをいといつゝ、みのにかゝればかさのほの露、かゝりたるをいと打はらひうらゝと〱のしづのわざ、くはいるか
へるまつかぜのおとはあらしのよそにのみ開やいせをのあま共が、みるめもしをのたくひ迄、取あつめたる思ひ草たのしみ
つきてかなしみのふいくわのともゝおはり成、いとだのはらに付給ふ」

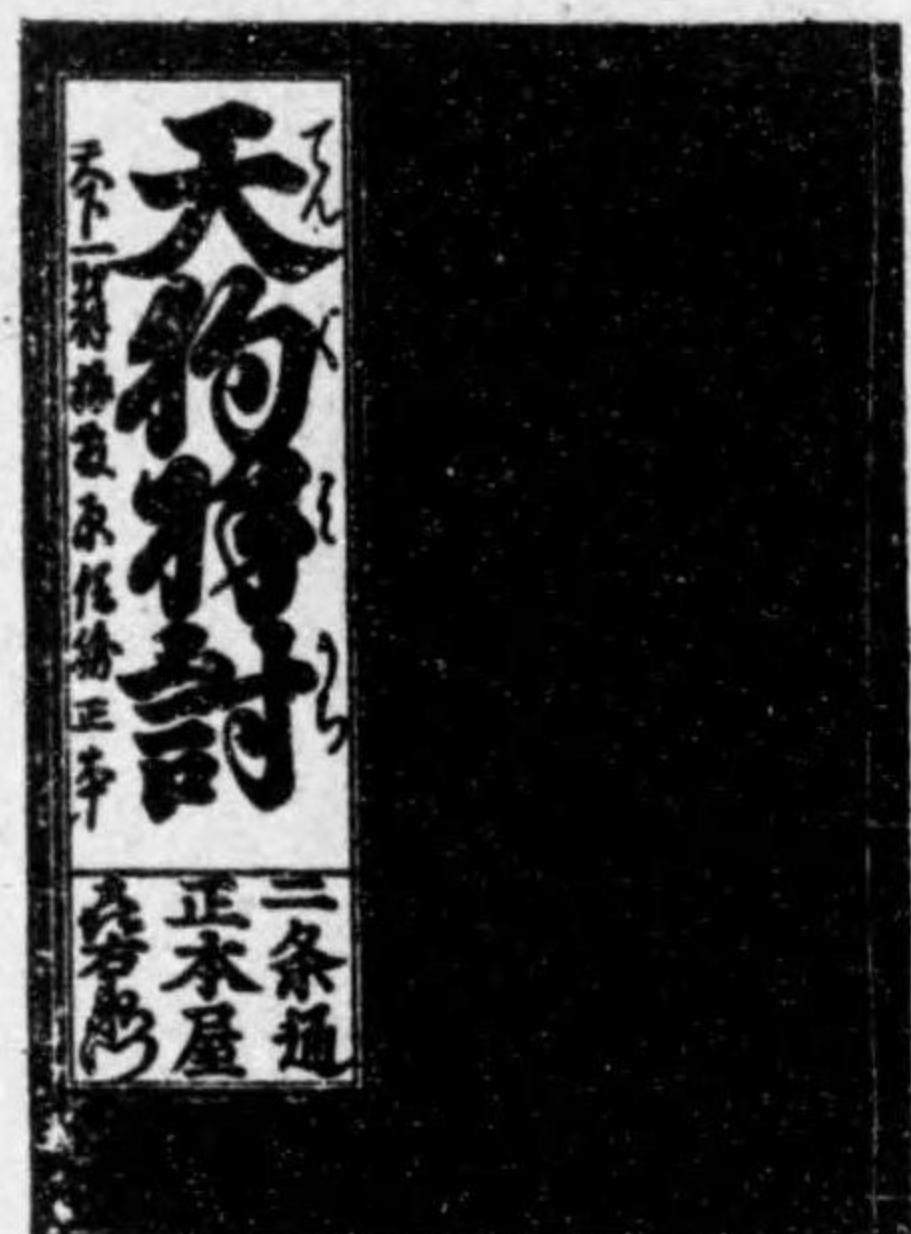
と述べられてゐるが、漸く人情が自然の情景と融合するまでに道行が進められたといつていゝかと思ふ。そしてまた大和掾の段物集『忍四季揃』を見ても、其中に四季の景を取入れたものが十一種も數へられることや、公平物にも、『公平劍の立花』などいふ外題すらあることから見ると、四季の景を加へて情趣の添加に意を用ひようとしたことが、此期の浄瑠璃には一體で目につくのであるが、これはやはり『十二段草子』の影響であるのである。かくして之等の景事と道行とは、近松によつて愈々完成されることとなるのであるが、日本舞踊の特色たる所作事振事の展開は既に此古浄瑠璃時代に約束されてゐるといつてもよく、此時代の殊に大和掾の語物の景事道行の詞章が、やがて歌舞伎の舞踊發達を刺戟すること少くなかつたといつてよからうと思はれる。

起結の形式と源氏讚美 舞曲の起結に屢々見られた形式的な句は、古浄瑠璃となつて一層形式的なものとなり、各段の首は勿論、大序から「さても其後」を以て始められることとなり、各段の終も全曲の終も皆「感せぬものこそなかりけり」とか「中々申ばかりはなかりけり」とかいふ風の句で結ばれることとなつたが、此習慣は太夫の音聲の出し始めと結び納めとに重大な關係をもつてゐたが爲に、かなり長い間一個の様式として守られて居たのである。け

れども寛文期になると、起句の場合には、此不自然はやゝ緩和されて、むしろ舞曲時代の状態に立返り「かくて」とか「去間」とか「其後」とかいふ様な起句が用ひられることもあるに至つた。けれども此風は全般に通じたものではなく、まだ太夫によつて其風を異にする状態にあり、結句だけが依然何れの太夫の語物にも、殿として形式的に守られてゐるのであつた。そして度々説いた如く、結末に源氏讚美の句をつけて全曲を終るといふことは、源氏に關係ある凡ての曲に通じた慣例であつて、これが元來源氏の末葉たる徳川氏讚美であつたことはいふまでもない。

結論 之を要するに、初期の淨瑠璃には、戦記物風の物語もあつたが、お伽草子風の架空的な物語と、人買誘拐お家騒動等を主材として、中世風の悲哀味の濃厚な世相物が多かつたのである。やがて明暦寛文期になると、之等の傾向の反動ともいふか、悲哀味よりも武勇的架空的傾向の勝つた、幾分樂天への動きを見せたものが多くなつて來た。暗黒から光明へ、戦争から平和へ、雜然たる混沌から、一歩々

萬治三年三月版 (輸入淨瑠璃史所載)



々整然たる様式へ、空想から現實へ、物語から歌謡的戯曲へ、かうした経路をたどつて、中世文學から近世文學への形態と内容とが、漸次其歩みを進めてゆく状態が、古淨瑠璃の間にも、極めて緩漫ながらうかゞはれるのであつた。お伽草子に見られた無邪氣な、童話的な他わいない、のんびりとした馬鹿々々しさも、鹿瓜らしい武ばつた怪奇的なグロテスクな公平物の蔭に、依然として微笑を見せてゐた。貴族的な氣取つた趣味の溢れてゐる先行藝術の氣風も、まだ

萬治三年卯月刊

(東北帝大蔵)



公平淨瑠璃の間に其面影を残してゐた。かうしてお伽草子や幸若舞曲などに興味を見出してゐた江戸の民衆は、公平の單純な素材な行動に魂を奪はれてゐたのであつたが、單純といふことは結局無變化といふことであり、千篇一律といふことであつた。それは單純を愛好し武勇に憧れながらも、絶えず變化を求めてやまない江戸の民衆にとつても、遂に倦怠と飽満をもたらす外はなかつた。かくして公平淨瑠璃も十年を出でずして衰微の途を辿る外はなかつたのである。といつて、公平淨瑠璃に現れて來る人物も、多くは武士か貴族か、高僧か老翁か、絶世の美人か、あつさり

諦める世捨人か超人かであつたが、それでも既に之等の語物はお伽草子などより一層切實に、其對象を「貴賤上下押なべた」一般においてゐた。取入れられた材料は先行藝術のそれと大して變つてゐないにしても、銃口を向けられた狙ひが既に民衆であつたからには、其取扱ひ方が漸く民衆の魂の糧となるべく目論まれつゝあつたのは當然であつた。かくして武勇物について、啓蒙的な靈驗物宗教物は再び發達して行つた。寛文から延寶にかけて宗教物本地物高僧物は中世的勢力を盛り返して愈々發達し、浪漫的機巧的演出によつて民衆の心を捕へ、戦國時代の中世的貴族的氣分は漸く洗煉され淨化されて行つた。かうしてやがて延寶頃から元祿にかけて歌舞伎方面から次第に吸収されて行つたのは、これまで古淨瑠璃に缺けてゐた戀愛味世話味社會味であつた。

一二一 古淨瑠璃の文化史的價值

平民藝術興隆の曙光 足利時代の中期に現れて以來、久しい間單なる語物に過ぎなかつた淨瑠璃が、足利の末期から慶長頃にかけて三味線を伴奏器とし、人形と結んで、京都に於て一種の劇藝術として産聲をあげて間もなく、それが江戸に進出するや、悔るべからざる勢を以て迎へられながらも、なほ舞曲やお伽草子などを其儘若しくは多少の手を入れたものを臺本として用ひ、未だそれほど輝かしい前途を約束することが出来なかつたのであるが、寛永の半に至つて「はなや」が現れ、それについて「安口判官」の出現を見、京都に於ても、「生捕夜討」「明石」「はらた」「小笹」などの優れた作品が現れることとなり、淨瑠璃も其前途に立派な結實を豫約されることとなり、我國獨特の文化現象としての平民的新藝術興隆の曙光は、漸くほの見えるに至つたのであつた。

明暦大火の拍車 といつても、これまでのところでは、新興平民藝術たる操劇も、いつまで其生命を持續し得るものであるかは、まだ豫測することを許さないのであつたが、承應慶安頃からの江戸の社會的情勢と風俗と、和泉太夫の性質と趣味とは、武勇的傾向の豊かな操劇を生み出すこととなり、漸くこれが江戸民衆の嗜好人氣と合するものがあり、愈々江戸操の進出を見んとする折柄、之に拍車をかける一大椿事が現れたのであつた。それは明暦三年正月十

八日江戸本郷丸山の本妙寺から起つた大火と、翌十九日小石川鷹匠町に起つて、二十日に及ぶ三日間に亘つた明暦の大火である。何故に明暦の大火が江戸操の新機運に拍車をかけたといへるであらうか。

吾々は不幸にして、其昔公にされた有ゆる淨瑠璃正本の残存を恵まれないのみか、私一個人としては尙更實際殘存してゐるものでも其悉くに接する幸福をもち得ないのであるが、そして又「武江年表」の云ふ所によると、忽然として十萬八千に近い生靈を生きながらの地獄に驅り立てた明暦の大火が、江戸一般の人々に對して如何に大なる影響を及ぼし、殊にそれが與へた精神的打撃の如何に無量であつたらうかを觀察し、記述したものを、遺憾ながら私はまだ見出し得ないのであるが、試に古淨瑠璃の年表をつくつて見て、明暦三年正月十八九日から後、未だ半歳ならずして、同じ三年五月、既に「咸陽宮」なる一曲が現れてゐることを知る時に、私は手を拍つて、之に目を眩らないではゐられないのである。而もそれが秦の始皇の宮殿咸陽宮を焼失せしめる事に終る一種の武勇曲であり、孝行曲であることを知る時に、此咸陽宮の一篇が、暗に明暦の大火になぞらへたものであらうことを思はずにはゐられないのである。

咸陽宮と公平淨瑠璃 既に此期の記述の最初に於て、公平淨瑠璃の勃興の理由として述べたが如く、明暦の大火によつて長縮し恐怖し戦慄し切つて、人間の魂が未だ笑に飢え慰安に饑えてゐる時に方つて、當時の例によつて、少くも「咸陽宮」の正本刊行前の四月には、既に此曲の上演を見ただらう江戸の市民は、如何に渴仰して之を迎へたことであらう。さゝやかなる笑も同情も、心からの歡喜を以て迎へたらう市民に對して、「咸陽宮」の上演が果して何者をも與へなかつたであらうか。大正十年來「新劇研究所」を設けて、新演劇の研究を實演的に研究し、多數の研究生

を養成しつゝあつた私は、大正十二年の關東地方に於ける大震災火災直後、深川や日比谷に於て慰安演劇を催して、大衆の喜の的となつたことがある。又澤田正二郎主宰の新劇一座が、當時中村吉藏作の劇物劇「地震」を上演して、大いに歓迎されたことは、何人も未だ記憶に新たなる所であらう。かうした意味から見て、恐らく無料か低料金で見せられた「成陽宮」の上演が、慄え切つた江戸大衆の魂に多少の慰安を與へ、それがまた正に興らんとしつゝあつた武勇物の操劇に對して、少からぬ影響を及ぼしたであらうと想像することは、必ずしも無理なことではなからうと思ふのである。否かうした恐ろしい精神的彈壓まで加へられて、萎縮し切つた江戸人に對しては、武勇物の操劇こそは一層好個の慰藉ともなり刺戟ともなつて、所謂公平淨瑠璃の勃興を促すことゝもなつたであらうと思ふ。そしてその公平淨瑠璃こそは、思想的方面と藝術的方面と、兩方面に對して、かなり偉大なる文化史的貢獻をなしてゐるのである。

思想的方面の貢獻 既に寛永保期に於て、「清水の本地」「阿彌陀の本地」「日蓮記」等に現れた宗教的傾向が、先行藝術以來の遺物であつて、それが傳統的勢力や様々な原因と結んで信仰をあほり、宗教心の喚起に油をそゝいでゐることは、此期の中頃から次の延寶期に至つて、本地物靈驗物が愈々盛になるのでも明かであり、又勸善懲惡を基調として、「生捕夜討」「はらた」「弓繼」「小雀」等に於けるが如く、忠孝を推奨するものが、明暦萬治寛文期に於て愈々盛に行はれたことは、此期の殘存曲百三十篇中、忠孝にふれたもの若しくは之を強調したものが、大凡其三分の一に及んでゐることによつても知ることが出来るのである。けれども明暦寛文期の古淨瑠璃に於て、思想上特に面白いと思はれるのは、忠孝の項に於ても説いた如く、この期に入つて、國體の尊嚴を高唱したものの七篇、三種の神器

の威徳をたゞへたもの三篇、皇位皇室の神聖を謳歌したものに六篇を數へ得ることである。

其昔南北朝時代に於て、朱子學の輸入以來、其影響を受けた北畠親房の「神皇正統記」に教へられて、謡曲「大江山」「羅生門」「田村」などに於て、「日本は神國なり」と喝破され、それが謡曲の愛好者によつて、幾度となく繰返されたことは事實である。けれども謡曲の愛玩者は貴族であり武士である。日本が神國であり、歴代の天皇之を次々にゆづり受けてしるしめし給ひ、他の何ものといへども、之に一指だもふるゝこと能はずとする思想が、一般民衆の耳に繰返し々々力強く訴へられたのは、蓋し此期の淨瑠璃によつてである。かくして日本が「平生天皇の御國」たり神の國たる觀念は、一般民衆の頭に漸く親みある言葉となつたのである。日本の國體が千古不變にして、神の皇子たる、永遠に萬世一系の天皇が之をしるしめさるべき國たるものが、動すべからざる眞理として、底深く大衆の念頭に刻みこまれたのである。

之と同時に、三種の神器の尊貴なる威力が、繰返して舞臺的表現によつて、民衆の目に見せつけられたといふことは、民衆をして之に對する敬虔の念を増さしめると同時に、皇室に對する尊崇の念を深からしめたこと疑のないことである。

皇位を神聖視し、皇室を尊崇すべきことを説いた作が、既に前期に現れたことは面白いことであるが、明暦萬治寛文に至つて、此種の作が六篇を數へ得るに至つたことは、一層喜ぶべきことであつた。而も之等が單に主君に對して忠誠を盡すといふが如き、所謂武士の忠義に止らずして、更に一步を進めて、皇室尊崇の念を、明確に現してゐたといふことは、愈々欣快なことといはねばならぬ。かくして朝敵入鹿退治の「大織冠魔王合戦」が現れ、兒島高德の忠

誠物語である「後醍醐天皇」は現れたのである。試に「源平敵討の遺恨」に見える「さて一天の君の御恩は軽きや重きや、それ四恩の中にすぐれ、ことに重きは天子の恩と記されたり」と絶叫して、義理の爲に敵に組せんとする瀧山大膳を説いて、まことの忠道の進ましめた源頼光の態度を見る時に、皇室尊崇の念の如何に明確に現れてゐるかを知るに足るであらう。之等の美しくも貴い眞の忠誠と國體尊崇の念とが先例となつて、次の延寶期に至つて、神武天皇の御東征を題材とする「日本王代記」や、「神武天皇が」生れ、更に『和氣清麿』の如き作品が見られることゝなるのであるとは、既に説いた所であるが、之等が未だ文化の低い一般民衆の耳に向つて飽かず注ぎこまれる時に、漸く皇室國體尊崇の念を強めしめるに役立つたであらうことは、云ふに及ばぬことであらう。

大和少掾 正本 (東北帝大蔵)



而も之等の國體の尊嚴を説き、皇室尊崇の精神を説いたものは多くは之れ明暦寛文期乃至其後の所謂公平物又は之に準ずる武勇淨瑠璃であるのである。そして其處に展開される所の世界は、多くは頼光頼義若しくは之に準ずる源平時代であり、頼光頼義が反逆者に悩まされるか、讒言によつて、悲境に陥るかして苦んでゐる間に、四天王若しくは子四天王等の武勇や智謀によつて、武運が回復するといふ趣向が最も多きを占めてゐるのである。之は文學的にいへば謡曲『大江山』や『羅生門』によつて代表さるべき若しくは、お伽草子に見られる酒童子物語の歌謡的展開とも見

られるのであるが、歴史的には今日未だ充分なる研究が遂げられてゐない武家發生時代の前の時代であり、平安朝末期の事柄である。この浪漫味夢幻味の横溢せる頼光頼義の時代に題材をとつて、源氏の隆昌繁榮を謳歌するといふことは、やがて其末裔たる徳川氏を讚美することである。ことに慶安の反亂などが見る／＼鎮定された直後に於て、徳川氏に對して苟くも弓を引かんものは、凡てがこの通りであるぞと暗示せんばかりの例を、取かへ引かへ舞臺の上に見せつけるといふことは、徳川幕府にとつては、まことに好ましいことであつて、それがまた惹いては天下を安靜ならしむることに與つて功果があつたことはいふまでもなく、かくて公平淨瑠璃の行き方は一石二鳥の感を抱かしむるものがあり、此時代の作者の着眼は、極めて惻巧であつたと云はねばならぬ。

處が徳川時代は要するに徳川氏の時代である。武士は勿論のこと、一般民衆がなほ動もすれば將軍あるを知つて、皇室あるを忘れてゐる此時代にありて、國體の尊嚴を説き、三種の神器の威力を讃へ、皇室の神聖を高唱し、忠孝を謳歌したものが公平物乃至武勇物の中、三分の一にも及んだといふことは、文化史上特に注目し値することではなればならぬ。

之と同時に忘るべからざることは、この時代に於ては、なほ一般女性の社會的地位が如何に低いものであつたかといふことで、之に對して古淨瑠璃は屢々例證を提供してくれるのである。例へば人妻の強奪とか處女の横領とか、人身賣買といふやうなことは、中世時代からの遺風であるとはいふものゝ、古淨瑠璃時代に於ても、かうしたことは文藝の上のみでなく、實際の社會生活に於ても、なほ屢々繰返されたことであらう。かくして古淨瑠璃が、女性文化史上に提供する材料は決して少くないと思ふ。

藝術的方面の貢獻 文化史的に見て、古淨瑠璃が藝術的に貢獻したのは、それが演劇の發達に及ぼせる意義である。お伽草子の傳統と、其處に豊富に含まれてゐる夢幻的浪漫味と、舞曲に含まれてゐる戰記的物語的傾向とは、寛永正保期を経て、明暦寛文期に至つて巧に融合し、戰記的冒險的武勇談の公平淨瑠璃と、之については其反動として夢幻的靈驗本位の宗教的淨瑠璃とを發達せしめたのであつたが、かくして一般大衆の新娛樂たり慰藉たる淨瑠璃發達の文化史的根柢が漸く確立したといつてよいのである。

蓋し明暦寛文期の淨瑠璃も、主として其筋を傳へることを目的とし、興味中心の物語であり、事件の時間的配列はあつても、まだ人物の性格と、場面の舞臺的統一に於て、殆ど考慮が費されてゐないので、人物の多くが、唯だらくと平面的に顔をならべてゐるに過ぎず、お伽草子の延長以上に多くを出てゐないものでありながら、既に讀む爲のお伽草子から、形式上にも表現上にも稍趣を異にした、歌謡的操のお伽物語にまで發達したのである。戯曲的演劇的にはまだ不十分なものでありながら、技巧的演出的には漸く厚みを加へて來て、此處に世話味と寫實味と戯曲性との盛り込んだ、大きな藥籠を携へた一大戯曲家さへ現れて來れば、いつでも戯曲的演劇的完成を遂げ得る見込のあるものにまでなつて來たのである。此歌謡のお伽物語ともいふべき古淨瑠璃に、歌舞伎の方面から漸く世話味と寫實味と情味とを吸収して、戀愛や義理や嫉妬などの色々な要素を多分に加へて、時と場所を統一し、人物の性格を明確にして、之を歌謡的朗讀的戯曲にまで發達させ、日本獨特の淨瑠璃劇を完成し、他面に於て、日本の國劇たる歌舞伎發展の基礎をつくり上げたのが、實に近松門左衛門であつたのである。

かくして民衆の爲の歌謡的演劇の發達を促すに至る基礎的大工事に於て、一つの大きな役割をつとめ、古來久しく貴族僧侶の獨占であつた文藝を、完全に一般平民階級の娛樂にまで引下げるに與つて力あつたことは、古淨瑠璃の文化史的價値の最も大なるもの、一つであるといはなければならぬ。



第一圖 「たむら」 伊勢島宮内正本

古淨瑠璃の現代的意義 古淨瑠璃の文化史的價値と意義とが以上の如きものであるとする時に、それが現代に於ける意義と價値も亦自ら之を判定するに難くないであらうと思ふ。詳言すれば、古淨瑠璃が既に三百年の昔からもつてゐた所の、特に日本的なるもの、日本民族的なるもの、就中、日本民族が長き間の傳統の上に築き上げた國體に關する觀念を始として、皇室の尊崇、皇位を神聖視する思想、忠孝の精神、偉大なる犠牲精神、之等を強調し、之等を明確に認識し、體得せしめること、之が古淨瑠璃の暗示する所の現代的意義の一つである。他の一つは、古淨瑠璃の中に多分に包含されてゐる浪漫味の暗示である。戯曲を構成する寫實味と共に、驚くべき規模の雄大さと、自由にして奔放極りなき浪漫味とが生み出す興味とである。由來我歌舞伎劇は浪漫主義に立つて、歌謡味と舞踊味とを

多分にそなへた、感覺本位の繪畫的藝術であつて、寫實主義を基調とする近代劇とは全く其趣を異にするものである。繪畫味と舞踊味と音樂的情調と浪漫味を取去つてしまふ時に、國劇の特徴は全く失はれてしまふのである。これを思

ふ時に、來るべき我國劇に對して何等かの暗示を與へるものは、殊に浪漫的情調といふことではなからうか。果して然りとすれば、音楽を基礎とする上に、浪漫味を多分にそなへた古淨瑠璃が、來るべき國劇に對して何の關する所もないであらうか。有ゆる方面が急轉回して、日本的なもの、多くが失はれて行きつゝある今後に於て、我國劇も亦西洋近代劇の模倣にのみ終始することを以て、果して足れりとすべきであらうか。一切の浪漫味を取除いて、有ゆる日本的なもの、日本民族的な傳統的情味を取去ることによつて、唯寫實的に生み出されたものが、よく日本民族獨特の演劇としての魅力と價值と意義とをもち得るであらうか。此意味に於て、古淨瑠璃が立派に研究の價值を有すると同時に、之が後代の國文學乃至國劇に及ぼせる影響を思ふ時に、又決して古淨瑠璃の研究を輕んずべきではないと信するのである。

一三三 古淨瑠璃の影響

四方面の大體 古淨瑠璃の影響といつても、本篇が延寶以後の淨瑠璃に關する可なりな部分を含んでゐないのであるから、爰に其全面について詳述することを避け、歌舞伎との交渉や、淨瑠璃殊に近松に對する影響や、民族學的影響、その他廣汎にわたるものについては、次の延寶享保期の研究の方に譲つて一纏にすることにし、今は文化史的方面と、淨瑠璃方面と、一部分の歌舞伎方面と小説其他讀物方面の四段に分けて、極めて大體を説くに止める。

一、文化史的方面 文化史的方面から見て、古淨瑠璃の影響が如何なるものであるかは、古淨瑠璃中に取扱はれ、

強調されたものが、如何なるものであつたかについて、文化史的價值や思想的道德的方面の状態を説いたことによつて、大體明かになつてゐること、思はれる。既に説いた如く、寛永正保期の淨瑠璃にすら、「生捕夜討」の如く、皇室に對する誠忠を絶叫したものがあつた。其他忠孝を説くもの少からず、明曆寛文期に及んでは、更に國體の尊嚴を説き皇室の神聖を高唱し、忠孝を強調したる作品が頗る多く、大凡殘存總曲の三分の一に及んでゐるといふことは、これが武士階級以下一般平民の娛樂を目的とするものであるだけに、甚だ意義あることといはねばならぬ。而も恰も今日紙芝居に興味を感じてゐる兒童に對するが如く、頭腦の程度頗る低級なる子女に向つて、國體の觀念や忠孝の思想が單なる理窟や説法としてではなく、まさしく具體的につぎ込まれたのであつたからには、之が思想的に大きな影響を與へたことは繰返して説きたるに及ばぬことであらう。

二、近松に及ぼせる影響 慶長以後寛文に至る淨瑠璃が、延寶以後の淨瑠璃に及ぼせる影響は、延寶期以後の淨瑠璃が、更に三轉期を明示して居ることによつても明かであるが、其中最も著しき影響は、嘉太夫角太夫の物語や、惹いては近松の作に現れてゐるのである。

延寶後の物語に改作されたものには「日本王代記」や、又その改作「神武天皇」に改作された「日本大王」だとか貞享頃になつて江戸物に改作された「花山院后評」だとか、「爲義産宮詣」に改作された、「景政雷問答」などがあり、其他酒吞童子や聖徳太子傳、日蓮傳なども色々と改變して上演されてゐるのである。

かくて古淨瑠璃が後代の淨瑠璃に及ぼせる影響は枚擧の煩にたへぬ程である。就中古淨瑠璃が近松に及ぼした影響は色々な方面から見たことが出來、第一に近松物の序の文の發達は、寛永正保期の若狭掾の「生捕夜討」の重々しい

序の文が先例をなしてゐるもので、爾來大和掾即ち播磨掾の語物は、大に此序の文を發達させ、近松に至つて一層その文が味を増して居るのである。更に近松の作の結句も、舞曲から傳統を引いた形式句が、古淨瑠璃時代を経て、尙繼承されたものであり、源氏讚美の末文の如きは、全く近松が古淨瑠璃の形式を其儘襲用したものに過ぎないのである。



年三文寛 年五文寛 年三文寛

第二に技巧上構想上から見ると、近松の女は男に先つて戀を打開けるのが例であるが、その例は『日本大王』の照日の前にも、『八幡太郎義家』の尾上の前が、義家に對する態度にも現れてゐる。かうした技巧といふよりも構想は、或は歌舞伎の傾城事に於ける遊女の態度から出たものではないかと思ふが、近松は常に此構想を取入れてゐるのである。又近松の作に於ける曲尾の舞踊といふものも、『あつた大明神の御本地』に端を發して、『花山院后諍』等に現れたものが取入れられたものであるが、これも最初は歌舞伎の總踊の影響が働きかけたものであらう。

第三に近松若しくは其推定作が大和の正本その他の語物から、節事即ち景事や道行を其儘取入れたり、或はそれらを改作して利用したりした數も可なり少くなく、寧ろそれが意想の外に多數であることも忘れてはならぬ事であらう。

う。

今寛文終までの中、主なる例をあげて見ると

- | | | | | | |
|-------|---------|-----------|----------|----------|-----------|
| ○古淨瑠璃 | 熊野之權現記 | (懐胎由來) | ○近松物及推定物 | 蟬丸 | (懐胎十月由來) |
| | 源氏筑紫合戦 | (嚴島八景) | | 百合若大臣野守鏡 | (宮島八景) |
| | 賴義金剛山合戦 | (屏風物語) | | 鎌田兵衛名所盃 | (名所屏風の四季) |
| | 公平法門諍 | (石山落義家月見) | | 忠臣身替物語 | (石山寺月見) |
| | 賴義北國落 | (掛物そろへ) | | 信田小太郎 | (信田掛物そろへ) |
| | 源平哥論 | (歌仙の段) | | 百日曾我 | (歌仙) |
| | 花山院后諍 | (神おろし) | | 信田小太郎 | (神おろし) |
| | 同 | (道行) | | 弘徽殿鶉羽産家 | (花山院道行) |
| | 源氏熱田合戦 | (蓬萊の四季) | | 十二段 | (長生殿四季) |
| | 〔日本大王〕 | (天づくし) | | 甲賀三郎 | (天づくし) |
| | 〔日本王代記〕 | | | | |

の如くであるが、此外にもまだ見出せるであらうし、又延寶以後の古淨瑠璃に例を求むれば、もつと澤山あるやうである。これ等の中、『公平法門諍』は井上大和掾も語つてゐるが、もと上總掾の語物であるし、和泉太夫の『日本大

王」にある「天づくし」は大和掾の「日本王代記」にも用ひられてゐる。かうして見ると、近松物や近松の作だらうと推定されてゐる物の多くには、殊に大和掾即ち播磨掾の語物の筋事が著しく澤山に取入れられてゐることを見るのである。

第四に、近松が古淨瑠璃を改作し、若しくは其一部を取入れたる、又多少の影響を受けたりしたものも随分あるのであつて、一通り之をならべても次の如く澤山に上るのである。尤も次の表には近松物として明白なるものと、多少の疑がありながら、近松物と推定されてゐるものも加へておいたのである。それにしてもこれは寛文までの古淨瑠璃についての影響であるから、延寶以後に影響されたものをも加へたら、もつと其數を増すことであらう。

○古淨瑠璃

○近松物及推定物

○近松物等の上演年月

こあつもり	念佛往生記	延寶六年
牛王姫	牛若千人切	延寶七年
八島	門出八島	貞享二年
	凱陣八島	貞享三年
源氏十二段天狗内裏	十二段	元祿三年三月
石橋山七騎落	頼朝七騎落	貞享三年正月
よりまさ	源三位頼政	不詳

大會我富士の牧狩

頼朝演出

不詳

公平法門評	忠臣身替問答	元祿二年八月
ぜんじそが	百日會我	元祿五年十月
あいこの若	都富士	元祿六年正月
しやか八さう記	釋迦如來誕生會	元祿八年四月
中將姫御本地	當麻中將姫	元祿九年四月
頼光跡目論	多田院開帳	元祿九年
をくりの判官	當流小栗判官	元祿十一年二月
頼親二度の逆心	文武五人男	元祿十四年春
しだ	信田小太郎	元祿十四、五年
頼光勇力評	大掛物十幅一對	元祿十四年九月
頼義北國落	大磯虎稚物語	元祿十五年
小袖會我	最明寺殿百人上臈	元祿十六年三月
佐野源左衛門		

諏訪本地兼家	甲賀三郎	寶永元年四月
誓願寺本地	春日佛師枕時鶴	寶永元年十一月 (歌舞伎狂言)
判官吉野合戦	吉野忠信	寶永四年一月
	療靜胎内裙	正徳三年五月
酒吞童子	酒吞童子枕言葉	寶永四年九月
	傾城酒吞童子	享保三年十月
平の維茂紅葉狩	梶狩劍本地	寶永六年九月
ゆり若大臣	百合若大臣野守鏡	寶永七年五月
石橋山合戦	源氏冷泉節	寶永七年秋
大織冠魔王合戦	大織冠	正徳元年
花山院后評	弘徽殿鶉羽産家	正徳二年五月
天神御本地	天神記	正徳三年二月
聖徳太子御本地	聖徳太子繪傳記	享保二年十一月
天草四郎島原物語	傾城島原蛙合戦	享保四年十一月
あつた大明神の御本地	日本武尊吾妻鑑	享保五年十一月

表中「春日佛師枕時鶴」が歌舞伎狂言である外は皆浄瑠璃である。

此外、近松が若狭掾や大和掾や出羽掾等の五段曲形式を取入れたことや、題材や構想上に古浄瑠璃から何かと影響を受けたことや随分多いことである。かくて舞曲やお伽草子の如き先行藝術が、先づその儘古浄瑠璃に取入れられたり、改作して取入れられたりして、やがて新しい創作を生み出すに至り、舊來の物語的傾向に漸次戯曲性が加へられて、遂に近松が生み出される経路を顧み、忽然として近松が飛出したものでないことを思ふ時に、近松に及ぼした古浄瑠璃の影響は頗る大きいものがあることが自ら肯かれるであらう。

三、歌舞伎への影響 近松物に現れた戀愛の場に於ける、女からの口説きかけの構想や、曲尾に於ける舞踊の附加は、歌舞伎から侵入したものであらうことは既に述べた。今後延寶後の浄瑠璃に次第に増してゆく世話味は、主として歌舞伎から吸収されたものであるが、古浄瑠璃が歌舞伎に及ぼした影響も決して少くはないのである。そしてその第一は、古浄瑠璃の特徴の項に説いた如く、古浄瑠璃殊に大和掾等が盛に發達させた景事道行等の節事が、後の所作事の展開に刺戟を與へたことで、第二は公平浄瑠璃の様式が歌舞伎上演の方面に侵入したことである。初代市川團十郎は延寶元年十四歳の時江戸中村座にて初舞臺をつとめ、「四天王稚立」の狂言にて坂田金時に扮し、顔を紅と黒にて隈取り、體を丹朱にて染め、大形の童子格子の着つけに、丸ぐけの帯をしめ、斧を提げて大立廻りをして、大喝采を博したと傳へられてゐる。かうした怪力無双の勇士や鬼神などに扮して、荒唐無稽な浪漫味の横溢した荒事と稱する一種の藝風が、和泉太夫の公平物の様式に則つたものであることは云ふまでもないが、爾來此藝風が歌舞伎に於ける一種の様式となつて、上方に於ける藤十郎の傾城事的世話風の傾向と共に後代にまで持續されたのであつた。「關東血氣物語」には、和泉太夫櫻井丹波掾の藝風が團十郎の藝に影響したことについて、いつてゐる。――

「元祖市川團十郎は荒事師の開山なりしが、此大夫の有様を深く用ひ、今の海老藏迄も其形を残せしなり」
「今の海老藏」といふのは、二代目の團十郎のことで、初代の團十郎は浪人堀越十藏の子として萬治三年に生れ、幼名を海老藏といひ、十藏の友人である俠客唐大十右衛門が、初代團十郎に海老藏の名をつけたのである。その初代團十郎は實に公平發生時代に生れて、公平全盛の間に育つたのであるから、彼が其所演の中に公平味を多く取入れたのは極めて當然のことである。試に彼の狂言と役割を見ても

- 一、元祿元年七月中村座上演 『金平甲論』の公平
- 二、元祿十年五月中村座上演 『兵根元會我』の五郎
- 三、元祿十一年十一月中村座上演 『吉野靜菴盤忠信』の忠信
- 四、元祿十三年正月森田座上演 『景政雷問答』の權五郎
- 五、元祿十三年十一月中村座上演 『金平六條通』の公平
- 六、元祿十四年七月 同座 『當世酒吞童子』
- 七、元祿十五年正月 同座 『星合十二段』の辨慶

彼が如何に公平味を歌舞伎に取入れたかを察することが出来るのである。更に二代目團十郎も亦、父をまねて荒事に興味をもち、元祿十年五月江戸中村座の「兵根元會我」に父に従つて山伏通力坊、同十三年十一月同座の「公平六條通」に公平の子怪童丸に扮した以來、父と共に有ゆる荒事をつとめ、又會我物の五郎に扮すること枚擧の煩に堪へない位であり、其他猪早太とか、石山源太とか、篠塚五郎とか、和藤内とか、金時とか、忠信とか、權五郎とか、景清

とか、有ゆる公平式の役をつとめてゐるのである。

團十郎の藝風の上に、公平淨瑠璃が一種の様式を生み出させた他面に於て、古淨瑠璃其物が歌舞伎の脚本上に與へた影響も決して少くないのである。試に古淨瑠璃を改作し若しくはその影響を受けた歌舞伎狂言を大體あげて見ると下の如くである。

○古淨瑠璃

よろひかへ

花山院后諱

をくり判官

公平甲論

こあつもり

月界長者

びんばしやら王

○歌舞伎上演年月及座名

延寶三年霜月江戸市村座

延寶五年 都萬太夫座

天和二年 江戸市村座

貞享四年 江戸市村座

元祿十六年 江戸森田座

元祿三年七月 江戸中村座

元祿四年 京都大和屋甚兵衛座

寶永三年九月 早雲座

元祿七年夏 都萬太夫座

元祿七年 大阪岩井半四郎座

元祿七年 京都村山平右衛門座

○歌舞伎狂言

「鎧 替」

「藤壺の怨靈」

「小栗忠孝車」

「二人照手姫」

「小栗十二段」

「金平甲論」

「一谷坂落」

「榮花熊谷櫻」

「日本月蓋長者」

「日本阿闍世太子」

「あじやせ太子やまと姿」

業平一代記

元祿七年 都萬太夫座

〔業平河内通〕

和田酒盛

元祿七年頃 大阪村山平十郎座
寶永五年 山村長太夫座

〔和國風流兄弟鑑〕
〔傾城一張弓〕

中將姫御本地

元祿十年十一月 大阪荒木與次兵衛座
寶永五年三月 江戸中村座

〔當麻中將姫曼陀羅由來〕
〔中將姫京雜〕

判官吉野合戦

元祿十一年十一月 江戸中村座
享保十三年 江戸中村座

〔吉野靜基盤忠信〕
〔兜基盤忠信〕

大友眞鳥

正徳四年 江戸森田座
元祿十二年九月 江戸山村座

〔金花山大友眞鳥〕
〔五頭大伴魔取〕

百合若大臣

元祿十年三月 江戸中村座
元祿十三年 大阪竹島座

〔一張弓勢三韓退治〕
〔今用百合若〕

酒吞童子

元祿十三年 京都龜屋座
元祿十四年七月 江戸中村座

〔當世酒吞童子〕
〔鬼城女山伏〕

高館

元祿十五年七月 江戸山村座
元祿十五年七月 江戸中村座

〔新版高館辨慶狀〕
〔梵天國寶船〕

梵天國

元祿十四年 江戸森田座

誓願寺本地

寶永元年十一月後 都萬太夫座

〔春日佛師枕時鶏〕

さんせう太夫

寶永四年 早雲座
正徳元年 大阪篠塚座

〔三莊太夫〕
〔女三莊太夫〕

あいこの若

享保三年冬 夷屋松太夫座
正徳四年七月 江戸森田座

〔傾城三莊太夫〕
〔愛護若〕
〔兒櫻十三鐘〕

佐野源左衛門

享保八年十一月 江戸中村座
寶曆八年 江戸中村座 顔見世
市村座

〔鉢の木教書〕
〔木毎花相生鉢木〕
〔正銘雪鉢木〕

かるかや

文政二年六月 中村座(常磐津)
享保二十年八月 豊竹座
元文元年 大阪中山座

〔再夕暮雨の鉢木〕
〔刈萱桑門筑紫幟〕
〔刈萱桑門筑紫幟〕

御開山しんらんき

寛延二年七月 豊竹座
江戸豊竹座
文化七年十一月 大薩摩吉右衛門座

〔華和讚新羅源氏〕
〔親鸞聖人繪傳記〕
〔親鸞記〕

右の親鸞物の狂言、いづれも本願寺の故障にて中止となる

頼光蜘蛛切

明和二年十一月 江戸市村座

「蜘蛛絲梓枝」

天保八年十一月 江戸市村座

「來宵蜘蛛線」

安永三年九月 江戸市村座

「日蓮記」

文化十三年九月 江戸河原崎座

「日蓮記御法花王」

慶應元年十月 江戸守田座

「鶴飼石御法川船」

明治二年十月 江戸市村座

「花楓高祖御傳記」

明治廿七年五月 歌舞伎座、福地櫻痴作

「日蓮記」

鎮西八郎爲朝

天明五年三月 江戸桐座

「婦柳妹脊的」

天草四郎島原物語

寛政元年正月 大阪角座

「けいせい飛馬始」

しやか八さう記

安政元年三月 江戸中村座

「花都廓繩張」

あさひなしまわたり

慶應三年五月 江戸中村座

「花見臺大和文庫」

平の維茂紅葉狩

明治二十年十月 新富座

「朝夷巡島記」

以上は、寛文終までの古浄瑠璃が延寶以後の、歌舞伎狂言に及ぼせる影響のみをあげたものである。若し之に延寶

「新曲紅葉狩」

前の歌舞伎に及ぼせるものと、延寶後の古浄瑠璃が、歌舞伎狂言に及ぼせるものとを加へると、まだ随分澤山に上るであらう。

四、讀物への影響

俳優本位、俳優の容色本位の傾向が多かつた歌舞伎に於ては、脚本の發達が遅れたに反して、人形本位の浄瑠璃では、早くから正本の發達をうながし、寛永頃から正本が發行され、それに繪を入れてはゐながらそれでも最初は必ずしも讀むことのみを目的としたものではなかつたが、元祿以後になると、専ら讀む爲の浄瑠璃が發達した。それは實に各方面にわたり、殊に筋の面白い寛文頃からのものは、大抵原曲そのまま、讀物として發行されたのであつた。

これとは異なつて、唯浄瑠璃に筋をとるとか、縁を求めたりして、小説として書かれたものが、延享以後になるとかなり澤山現れたのである。その中最も多いのは、やはり公平に縁のあるものであるが、それとても必ずしも寛文期のものゝみとは限らず、後期のものを翻案したものも少くない。今原曲の時代に關係なく、公平に關係ある小説のみを列挙すると下の如くである。

○公平味の小説

金平若盛	三卷	延享元年刊
金平化物退治	三卷	延享三年刊
公平寶船	二卷	寶曆二年刊
金平伊勢參	二卷	寶曆二年刊
金平鳥居引	二卷	寶曆九年刊
公時接穂梅	二卷	寶曆十年刊

金平役おとし	二卷	寶曆十年刊
金時西國順禮	二卷	寶曆十一年刊
金時一代記	五卷	明和四年刊
金平猪熊退治	三卷	明和六年刊
金平龍宮物語	三卷	明和七年刊
近代金平娘	三卷	安永六年刊
金々金平	二卷	安永九年刊
金平異國繞	三卷、吳増左作	安永八年刊
金平子供遊	三卷、四方赤良序	天明四年刊
金平一の富	二卷	天明四年刊
金時幼稚立	二卷	刊年未詳
金平手がら盡	二卷	刊年未詳
公平七小町	二卷	刊年未詳
金平初わらひ	二卷、柳川桂子作	刊年未詳
金平武者修行	一卷	刊年未詳、大和屋版

以上の外、公平物以外の古浄瑠璃で後の小説の展開に資料となつたものは、各正本の頃に記しただけでも少くない。

二四 説經とその太夫

慶長以後の正本と太夫 説經が遠く平安朝時代に端を發し、次第に行はれて一種の物語として流行したことも頗る古いことであるが、或は面白可笑しく聴衆を喜ばすことによつて、其目的を達せんが爲に、それがいつか傀儡師と結んで、その結果人形浄瑠璃が生み出されるに至つたのではなからうかと思はれる。けれども之を文献によつて證據立てることが未だ出来ないのみならず、説經の變遷はかなり明かでない所もあり、太夫の經歷傳統等についての材料も不充分であるから、そして又延寶元祿に至つても尙相當に流行し、語物の數も随分澤山あるのであるから、之等については、改めての研究にゆづる事として、此處には慶長以後私が顧みなかつた説經の正本と其太夫とを羅列して、其形式的特徴と變化とを聊か説明するに止めておきたいと思ふ。

残存正本あるもの 先づ正本の残存してゐるものに次の如きがある。

説經かるかや	寛永八、卯月	天下一説經與七郎正本
さんせう太夫	寛永頃	佐渡七太夫正本
しんとく丸	正保五、三月	天下一説經佐渡七太夫正本
さんせう太夫	明曆二、六月	

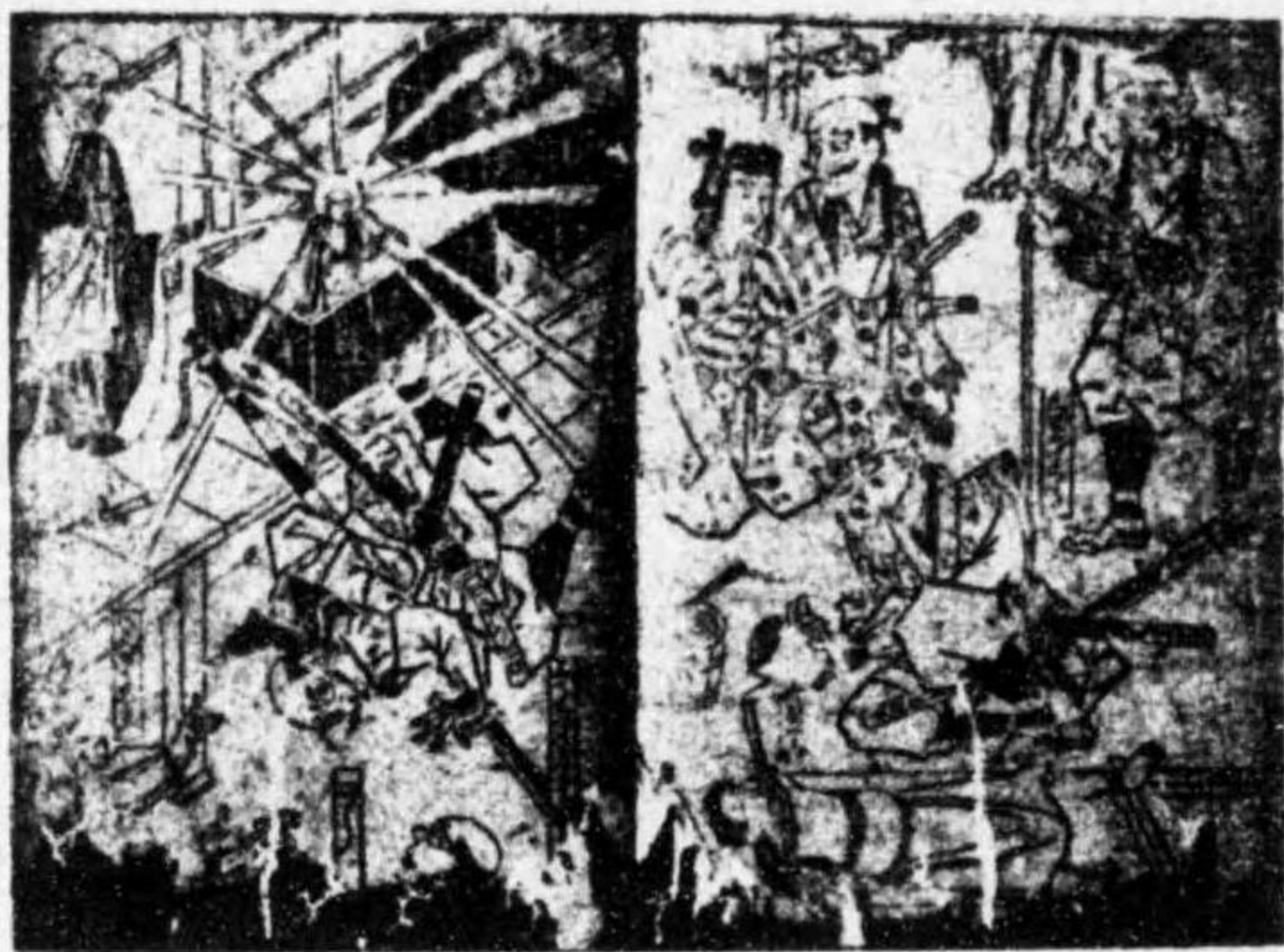
熊野之權現記(すいいでん)	萬治元、十月	
あいごの若	萬治四、正月	日暮小太夫正本(?)
まつら長者	寛文元、五月	天満八太夫正本(?)
しんとく丸	寛文元、九月	
ゆり若大臣	寛文二、二月	日暮小太夫正本
かるかや	寛文二、八月	
おくり判官	寛文六、九月	
さんせう太夫	寛文七、五月	
誓願寺本地	寛文八、十月	
疊鷲記	寛文八、(?)	
王昭君	寛文九、十月	日暮小太夫正本

正本の残らぬもの 慶長頃に語られた『阿彌陀胸割』も、後代の如く説經太夫によつて語られたかと思はれるのであるが、兎に角以上は皆正本の残存せるものである。此外に正本の残存不明ながら、慶長寛永頃から語られてゐたことを傳へられるものに、『梵天國』録田『いけにゑ』等があり、萬治頃には語られてゐたと信ぜられるものに、『小栗判官』の外に『信田』などがある。これ等は其頃の刊行正本を見ないものであるが、石田氏藏筆寫本の『梵天國』は寛永頃の原本から出たものではないかと思はれるのである。其形式も古風であり詞章も稚拙なものであるが、要す

るにお伽草子の『梵天國』を改作した六段物である。『録田』も『信田』も正本を見ないが、共に舞曲その儘であつたが爲に、古くは正本を刊行しなかつたのではなからうか。かくて、元禄頃に至つて改作されたものが『録田正清』又は『伏見常盤』と稱するものであらうし、『信田』は改作の所謂『信田小太郎』と呼ぶものであらう。『生贄』に

は古い正本があつたらしいことは『繪入淨瑠璃史』に説かるゝが如くであるが未見である。けれども寛文五年には、日暮小太夫によつて、『生贄』等が名古屋で語られたことが記されてゐる。

寛文期の説經形式 上に擧げた表中には、淨瑠璃として語られたものもあらうが、之等の説經も、最早寛文期となつては、淨瑠璃との間にどれだけの差別があつたか疑問である。元來說經の正本は、最初六段に分れず、殆ど段切といふものなく、唯發賣上の便宜からともいふべき區分が三つに分れ、三冊に印刷製本されてゐたのであるが、寛文に至つては宛がら淨瑠璃然として、立派に六段に分けられて來た上に、寛永頃に大序を飾つてゐた



寛文七年刊 さんせい太夫

「ただいまときたてひろめ申ほんちは國を申さばしなのくにせんくわう
 じによらいたうのゆんでのわきにおやこぞうぼまつといわれおはし
 ます御ほんちをあらあらときたてひろめ申に、ゆらいをくわしたづれ申に……」(寛永八年版せつきやうかるかや)

「ただいまかたり申御物がたりくにを申さばたんごの困かなやまぢぞうの御ほんぢをあら〜ときたてひろめ申にこれも一たびはにんげんにておはします、にんげんにての御本地を尋ね申に……」(與七郎正本及び明暦二年版、さんせう太夫)

といふやうな、説經獨特な語り出しも、最早寛文に至ると失はれてしまつて、淨瑠璃と少しも異なることなき

「申むかしのことかとよ、つくしちくぜん六かこくの大小やうなばしげうぢどのと申ける、まる間しげうぢどの……」(寛文二年版、かるかや)

「それおやこ兄弟のわりなきことは、そうかいよりもふかし……」(寛文七年版、さんせう太夫)

の如き書出しとなつてゐるのである。

説經の内容的特徴 かくして形式上に殆ど特異點を認めがなくなつた寛文以後の説經は、それでは他の淨瑠璃と之を差別し得る點はなくなつたかといふと、主として説經の正本の内容は、本地物であり靈驗物であり、佛教趣味の哀

佐渡七太夫正本 「しんとく丸」



愁の情調を帯びてゐるが上に、其結末に於て、敵を征服し仇を討つ代りに、敵を許し仇を助けて、如何にも其根柢に大慈悲の佛教的理想が漲つてゐるのが多いやうである。その點が普通の淨瑠璃の復讐的仇討的であるのと、よほど趣が變つてゐると思ふ。そして又説經の語物の中にも、戦争もあれば活劇もあるが、主人公の多くが無抵抗的であり、大體に世話味が勝つてゐて、それが全曲に哀愁を漂はせる所以でもあるが、その世話味がやがてまた淨瑠璃に影響してゆくことも少なくないやうである。

説經の太夫 太夫については、延寶以後の説經について記す時に改めて説きたいと思ふが、少しく之に觸れておく

と、江戸では、結城孫三郎に江戸淨瑠璃が始まるなど、「譚海」には記してあるが、正本の上から見ると、現在では佐渡七太夫が最初で、彼の「しんとく丸」には正保五年の刊記がある。それについて明暦二年の「さんせう太夫」も彼の正本であるから相當力があつたものであらうが、今少し詳しく其傳記を知り得ないのは残念である。けれども彼も天滿八太夫と共に寛永以前から語つてゐたゞらうとは「繪入淨瑠璃史」にも述べられてゐる。

天滿八太夫についても、殆ど明かでないが、寛文五年の「江戸名所記」(淺井了意著)の挿繪に、彼が大薩摩と櫓をならべて、「おぐり」の看板をあげて居る所から見ると、大體に其時代と其勢力を察することが出来ると思ふ。此八太夫が石見掾であることは「繪入淨瑠璃史」下巻の考證によつて明かであるが、彼は延寶頃に至つてなほ種々の正本を出してゐる。貞享元祿に至つての八太夫は二代目であらうが、「尾陽戲場事始」には、寛文五年尾頭町東側に於て説經芝居を興行したといふ天滿八太夫の名が見られてゐる。又同書の同じ寛文五年の項に「尾頭町西側に於て説經操芝居興行、太夫、日暮小太夫」の一行があるから、尾張では江戸の太夫も、小太夫のやうな上方の太夫も共に軒をならべて語つたことが知られるが、その小太夫と同じ頃かと同じ「抱き柏」の紋所を用ひた日暮八太夫がゐて、四條河原にて芝居を興行したことを「聲曲類纂」が記すが、それ以上には何も明かでない。

「さんせう太夫」を語つてゐる天下一説經與七郎は寛永頃の太夫といはれ、大阪の人らしいが、未だ多く明かでないことは既に述べた所である。

▲参考七

享保七年刊「十二段草子」

本研究第一四頁に於て、享保七年版「十二段草子」を未見である旨を述べたが、昭和十二年五月水戸彰考館にて、はからずも之を發見した。

【體裁】 彰考館藏「十二段草子」は、美濃紙形十四行本にて、上卷十五丁、中卷（第七段以下）十六丁、下卷（第十一以下）十一丁、合計四十二丁の三冊より成り、全三冊を通じて、挿繪は兩面五、片面五あり。奥に「江戸日本橋南一丁目 萬屋清兵衛板」と見える。

【段付】 初行に「第一、十二段、並、上るりごせんもうしこの事」とあり、以下各段に▲第二▲第三などとなり、其下に説明がついてゐる。第十二段の頭にだけ▲がついてをらぬ。そして第十段の終が「ふきあけのはまはこれかたよ」で終つてゐる。

【刊年】 版元の上に「享保七壬寅年八月吉日」とある。

【解説】 以上によつて察すると、京都帝國大學附屬圖書館寄託古梓堂文庫本と同一と思はれる。（一〇六頁一一〇頁参照）

明曆寛文期正本概説

○説經さんせう太夫

天下一説經佐渡七太夫正本

【體裁】 安田文庫所藏本。別に稀書複製會複製本あり。小形十四行、上中下合二十四丁。段切によらず、唯紙數の都合にて、上中下の三冊に分けたものと思はる。挿繪は各冊三づゝ有り、内兩面繪二。さうしや九兵衛版。

【太夫・刊年】 各卷初行に、佐渡七太夫正本と記され、各卷の奥に、明曆二丙申歲六月の刊記がある。

【形式・曲節付】 淨瑠璃と異りて、段切と思はれる所はなく、三冊にはなつてゐても、それは必ずしも其處で文章が切れてゐるといふ意味ではないやうである。最初に

「只今語り申御物語國を申さば丹後の國かなやき地蔵の御本地をあら／＼とき立てひろめ申に、これも一たび人間にておはします……」

といふ説經特有の語り出しがあつて、そこにコトバの曲節付があり、最後は

「觀孝行の金焼地蔵の御本地を語りおさむる末繁昌ものがたり」

と結ばれてゐる。曲節付としては唯コトバ、フシ、ツメだけがある。

【目録】この正本の初丁には、後の和泉太夫の『あたごの本地』に於ける如く、次の如き太夫名や内題などがあつて、目録がついてゐる。

天下一説經佐渡七太夫正本 さんせう太夫 上中下目録

いわき殿ながされ給ふ事同兄弟都へのほる事△なおいの浦にて人賣の事、付タリ、うばたきさいご△さんせう太夫兄弟かいとめつかふ事△兄弟おちるせんぎの事、付タリ、三郎たち聞の事△三郎兄弟にやきかねをあてる事△つし王落事太夫おつて、付タリ、ひしりきしやうの事△ひしり都七條しゆしやかまでつし王おくらるゝ事△むめづのゐんつし王丸やうし、付タリ、世に出給ふ事△つし王丸たごの國へにうぶ入、付タリ、ひしりにたいめん△つし王太夫三郎きらるゝ事△つし王は、ごのゆくへたづね給ふ事

これで見ると、この種の正本は、語る爲の臺本をかりて、讀ませる爲に發行したものであることを明かに推定し得るやうである。

【梗概】有名な話だから、梗概など必要もないやうに思はれるが、念の爲に大略を記す。

上卷 奥州岩木の判官は、罪によつて筑紫の安樂寺へ流される。御臺と姫と若とは、伊達の郡しのぶの庄へ浪人する。姫と若とは、一日燕の飛ぶのを見て、父を戀し、父が筑紫へ流されてゐると聞き、罪の赦免を願ふべく都に上る。三十日の旅をして、越後のなおいの浦に着き、宿を求めるが、千軒の家一軒も宿をかさぬ。それはこの浦に、人賣の悪人がある風聞が立ち、一層宿を貸すなどの、地頭の命令あるによる。已むを得ず母子等乳母と四人は、黒森の下あふきの橋にやどる。そこへ人買の名人山岡太夫が来て、感しつすかしつして、四人を家に連れ歸り、女房に隠し

て、夜密に濱路につれ出し、海路を都へ案内すると船に乗せる。而も母と姫達とを別々の船に乗せるのである。母は悲のあまりに投身しようとするが、打擲されてそれも許されぬ。かくして姉弟は二貫五百にて宮崎三郎に買はれ、

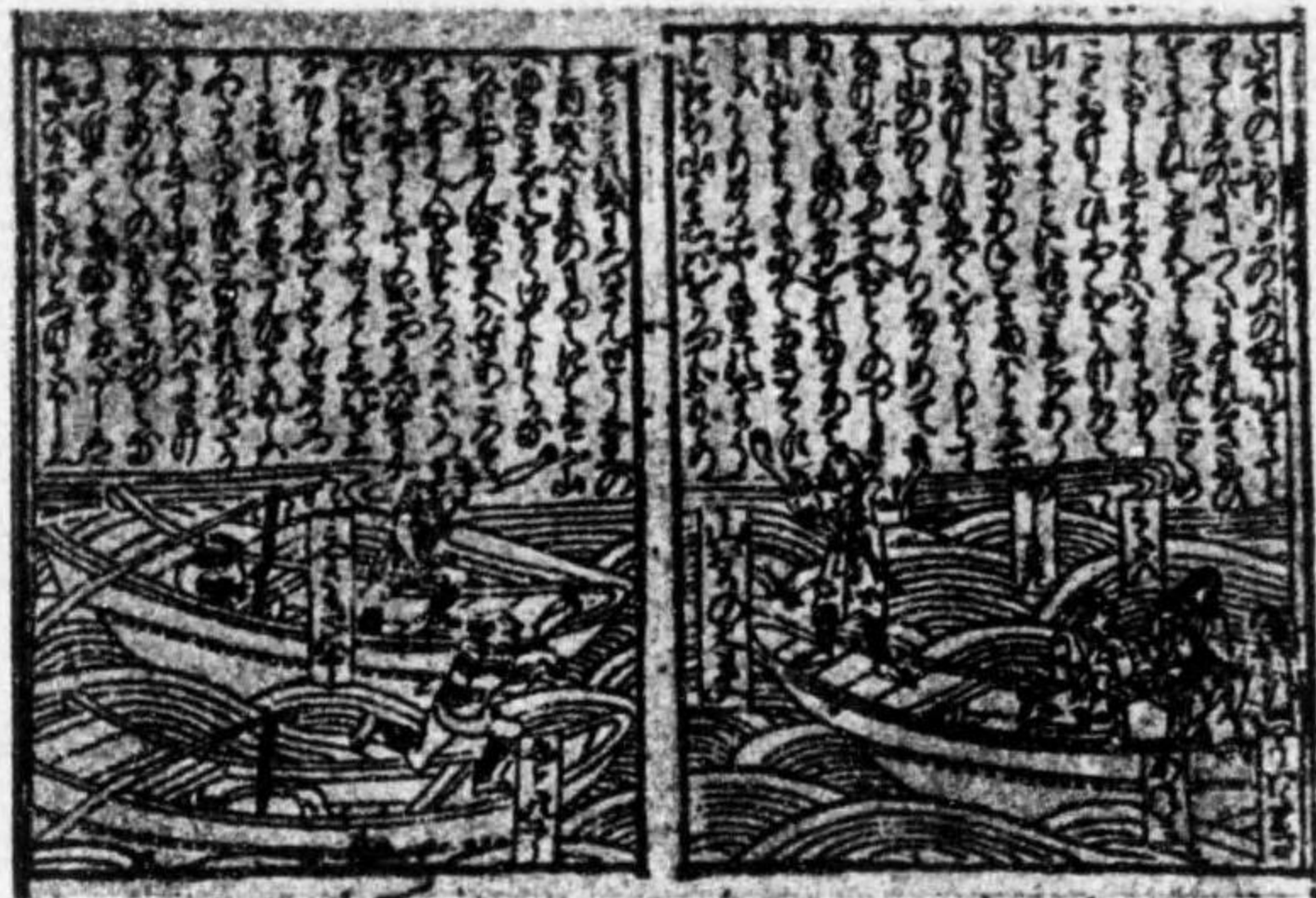
更に丹後のさんせう太夫に十三貫にて賣られる。

姉弟はさんせう太夫に買はれて以來、習ひ覚えぬ水波と柴刈とを強ひられ、山人達から助けられると、一層ひどく虐待される。遂に死を決して岩鼻に立つた時、同じく三年前に買はれて來た伊勢の小萩は、二人の爲に姉となつて、勞を助けんことを誓ひ、命があらば又も世に出得べきことを説いて、死を思ひとまらせる。

中卷 安壽對王が虐待にたへかねて、逃亡しようとする、さんせう太夫の子三郎は之を立聞して、一層虐待し、顔に燒鐵をあてたりする。けれども守袋の中の地藏が身替になつて守つて呉れる。姉はやがて、弟對王を脱出させるのである。對王は國分寺を見つけて、追手を逃れるべく聖僧にたよる。聖僧は對王をかばつて古箱に入れて、吊り上げる。追手の太夫は聖僧に向つて對王を要求し、それを拒むと誓文

を要める。聖僧は神そろへをして誓文をたてる。

下卷 やがて太夫の三男三郎は、古革籠の繩が新しいのが怪しいとて、革籠を下して見ると、對王がもつた肌の守



「夫太うせんさ」 本正夫太七渡佐 版年二曆明

の地藏が、光明燦然と輝いて、三郎は兩眼がくらんで、縁から下へ轉り落ちる。聖僧はやがて對王をつれて都へ上る。都七條朱雀まで來ると、對王をおいて聖僧は郷里へ歸る。その時に腰の立たない對王は車に乗せられて、天王寺へ參り、おしやり太子の力にて腰が立ち、數多の稚子達と茶坊主をしてゐる中に、むめすの院に見たてられて養子になる。それは「額によねといふ字がすはり、兩眼に人みの二たい」あるを見られた爲である。やがて系圖をもつて御門に奏上し、本領安堵は勿論、日向の外に丹後五郡も賜はり、父には迎へを出し、姉を丹後へ迎へにゆく。國分寺へ行つては恩ある聖僧に感謝し、またさんせう太夫と五人の子を連れて來させ、姉を殺した罪によつて、太夫を重罪に處して、その首を三郎に鋸引きさせ、太郎次郎には賞美を與へ、更に奥州へ母をさがしにゆく。母は悲歎の爲に盲目となつて粟の鳥を逐ふてゐたが、對王が肌の守の地藏菩薩をとり出して母の目にあてると、母は忽然として眼があく。やがて山岡太夫も罰し、再び富貴にさかえた。これも親孝行の爲である。金燒地藏の本地はこれ。

【解説】この種の人買物語は、足利時代から廣く行はれてゐたものでもあるし、この明曆版『さんせう太夫』の文章が如何にも拙劣である上に、詞句も出版年代より遙に古めかしい處があり、表現も頗る古雅な所があることなどから見ても、もつと古く古いものを、此頃版行したのではないかとも思はれるのである。

それにしてもこの哀話は、人情に訴へることの強いものがあつたと見えて、後代に至るまで廣く行はれてゐるのであるが、最初に燕を見て父を思ひ出す趣向などは、『かるかや』に於て、花の散るのを見て悟りを開いたといふ趣向から脱化したものであるやうに思はれる。

【演出】母親の兩眼が忽ち開いたといふ處では、人形の上に如何なる工夫を凝したか知らぬが、革籠の蓋をあけて

見ると、地藏菩薩が光明を放つてゐる處は、今日なら何でもなくやれるが、電氣仕掛のない、マッチもない時代に於てどうしたのであらうか。ひよつとしたら、唯文章の上だけでおいたのであらう。

【出處】『陸奥風土記』に傳へる傳説によると、白河天皇の永保の頃に、陸奥の領主岩城判官正氏が讒せられて西國に流されるや、安壽姫と對王丸の姉弟は、父を慕ふて母と共に西國へ下る途中、越後の山岡太夫といふ商人の爲に、母は佐渡へ、姉弟は丹後由良湊の山庄太夫といふ長者に賣られた。山庄太夫等父子は安壽姉弟を虐待し、汐汲や柴刈に酷使してゐる中、對王丸はのがれて寺にかくれ、安壽姫は死んでしまつた。やがて對王丸は京に出て梅津院といふ公卿の養子となり、一家の不幸が上聞に達するや、本領安堵となり、山庄太夫は捕へられて竹鋸にて殺されたといふのである。この傳説が殆どその儘に説經として語られたものである。

以上の地方傳説の外に、丹後金燒地藏本地と稱せられるものもある、これ等が原となつたものであらう。

【原據】本曲が寛永頃のものと思はれる與七郎の正本を、省略改作したものであることは、それと對照する時に明かに背かれる。

【影響】本曲が哀愁に充ちてゐるため、古くから好んで説經に語られ、『かるかや』などと共に繰返して上演されてゐる中、遂には説經と淨瑠璃と混同されるに至つたやうであるが、かくて改版や改作も頗る澤山に見られるやうである。

下にあげる如く多種多様の版がある外に、まだ文彌節の『山樹太夫』、角太夫正本の『都志王丸』等があり、之等は皆大同小異の文であり、又さうだと思はれるが、改作には、寶永五年十月豊竹座上演、紀海音作の『山樹太夫戀慕

湊」、更に之を改作した享保五年九月豊竹座上演の海音作『山莊太夫霞原雀』、享保十二年八月竹本座上演、竹田出雲作の『山莊太夫五人嬢』、寶曆十一年五月竹本座上演の半二松洛小出雲等作の『由良湊千軒長者』などがある。

更に歌舞伎には、三莊太夫（寶永四年早雲座）女三莊太夫（正徳元年大阪篠塚座）傾城三莊太夫（享保三年夷屋座）、『由良湊千軒長者』の原作たる由來千軒蟹鬼湊（寶曆四年八月江戸市村座）初代櫻田治助作の常光榮鉢木（明和六年十一月江戸中村座）三莊太夫銚鷄藏（天保八年七月市村座）昔談柄三樹太夫（嘉永五年四月河原崎座）其他増補三樹太夫等がある。

又讀物としては寛政六年刊山東京傳作『山樹太夫七人嬢』三卷、寛政七年刊櫻川慈悲成作『山樹太夫物語』二卷、文化六年刊梅暮里谷峨作『山椒太夫榮枯物語』五卷、文化九年刊山東京山作『山樹太夫咲分嬢』六卷、文化十三年刊『三庄太夫茨物語』一卷などがある。

【諸種の正本】 非常に廣く行はれたものであるだけに、所見本中主なものでも次の如く澤山にある。

一 さんせう太夫

【體裁】 京都帝國大學圖書館寄託、古梓堂文庫本。半紙形十七行十九丁半。兩面繪三、片面五。奥に「山本九兵衛板」とある。

【刊年】 太夫は不明だが、奥に寛文七丁未五月吉日の刊記がある。同じ九兵衛版でも明曆版とは異り、淨瑠璃に語つたものかと思はれる。

【形式・曲節付】 六段にて、各段には段付の下に左の如き説明書がある。

第二 兄弟なげき 井 いせのこはぎなげきの事

第三 三郎じやけん 井 つし王おちゆき給ふ事

第四 兄弟わかれの事 井 ひじりせいもんの事

第五 つし王都へ上り給ふ 井 ひじり道行

第六 つし王世に出給ふ 井 さんせう太夫さいこの事

大序は「ワキコトバ」それおや子兄弟のわりなき事はさうかいよりもふかし……」で始まり、最後は「せんしうばんぜいの御よろこびめでたき共中々申ばかりはなかりけり」にて終つてゐる。

本文は『徳川文藝類聚』第八所收のものと殆ど同文なれど、此方がやゝ文章に詳しい處がある。

曲節付は、コトバ、フシ、色フシ、ソウフシ、中セメ、ツレフシ、色コトバがあり、太夫とワキの指定の外に、五段目には道行がある。

二 さんせう太夫

【解説】 東京帝國大學圖書館藏本。『徳川文藝類聚』第八卷所載と同文にて、延寶六年四月刊、正本屋五兵衛新版。享保十年正月の近江屋九兵衛版と同文。

三 さんせう太夫 帝國圖書館藏本

四 山樹太夫 東洋文庫本

【解説】 共に半紙形十行三十二丁繪なし稽古本にて、五段に分れ、山本九兵衛版。

五 山榭太夫

東京帝國大學圖書館藏本

【解説】 山本河内掾作にて、出羽掾正本である。

六 山庄太輔

【解説】 前島春三氏及び斑山文庫藏本は正徳三年九月刊三右衛門版にて、佐渡七太夫豊孝正本。

七 山庄太輔

家藏

【解説】 説經章指六段物として『おくり判官』『くまがえ』『志田小太郎』『法藏比丘』『ごすいてん』『ふしみときわ』と共に扉の目録にあげられてゐる説經物。九行五十丁の半紙本にて、六段より成り、各段の首尾には淨瑠璃風の定形句がある。同じ佐渡七太夫正本ながら、本文は明暦版とは異り、享保三初春、板木屋總兵衛刊。

八 さんせう太夫

斑山文庫本

九 さんせう太夫

京都帝國大學圖書館寄託、古梓堂文庫本

十 さんせう太夫

徳川文藝類聚第八所收

【解説】 京大本は徳川文藝本とは本文多少異り、小形十七行十丁、両面繪三あり、享保七年寅の正月刊、鱗形屋孫兵衛版、六節に分れてはゐるが、讀本物にて、段付はない。徳川文藝本は近江屋九兵衛版にて、延寶六年四月刊、東京帝國大學圖書館本と文章を同じくし、享保十年正月刊、又斑山文庫本は享保七年刊。

○成 陽 宮

【體裁】 昔て『金平全集』の編者水谷不倒氏によつて所藏され、それによつて、氏が同全集中に加へられたのであるから、複製本は原本に似たものであらうが、之によつて見ると、前期の正本と異り、上下二卷に分たれてゐないで、十六行二十二丁半の中形本である。この書の一つの特徴は繪の數の非常に多いことで、両面繪が七、片面繪が六ある。挿繪の中、最後の張良は所謂公平物の竹綱に、樊噲は金平に似てをり、これが公平物の最初であるといふよりも、既にこの前に於て、公平を主とした曲のあつたことを推定せしむるに足るのである。

【太夫・刊年】 正本太夫の名は明記されてゐないから詳でないが、和泉太夫の語物らしく思はれ、奥には「明暦三丁酉五月吉日、もすや開板」とあるから、その歳正月の所謂明暦大火の直後に、江戸で刊行されたものと見るべく、江戸版淨瑠璃としては最も古いもの、一つである。けれどもこれは大火前から漸く江戸版が現れてゐた證とも見るべく、若しくは大火後をねらつて、上方から下つた版木屋の手になつたものとも見ることが出来る。別に延寶七年版もある。

【形式・曲節付】 六段曲にて、各段首尾に前期同様の形式句があり、初段首には、序の句「さても其後」について「つらく／＼の四きをくわんするに、天もんを見て地へんをさつし、人もんを見ては天下をくわせいす、こゝをもつてせいたうぎにあたる時は國家まさにはうによたり……」の序の文がつけられてゐる。

曲節付としては三重があるのみ。その三重の置き方は「しやじくの雨ぞ三重ふりにける」の如く、後代の形と同様

になつてゐる。

【原據】 少くとも第四段は謡曲「感陽宮」により、華陽夫人の彈琴の邊が主題となつてゐる。又張良が黄石公から兵法の奥義をさづかる條は、謡曲「張良」及舞曲の「張良」によつたものである。其他に「はなや」や、お伽草子の「ぼんてん國」の趣向を取入れた跡が多い。

【梗概】 初段 燕の大將燕丹の甥に、身の丈九尺五寸の樊噲があり、部下に荆軻、秦舞陽などの勇士がある。燕丹が秦の始皇に謁せんとしてゐる折柄、始皇が獵に出た一日雷雨に遇ひ、松下に雨をさけて、松を太夫に封じた處へ、燕丹が砂金、きんらんの巻物、珊瑚などを土産としてやつて来る。始皇は之を見ると、燕の富を奪はうとして、燕丹殺害を計り、宮殿へ買をしないで、かゝる處へ貢物を持運ぶことを怒る。樊噲は始皇の眞意をさとて燕丹を守る。始皇は更に手をかへ品をかへて難題をもちかける。遂に象を放つて燕丹を殺さうとするが、樊噲は物の見事に大象を握りつぶす。

二段目 始皇は獵場での怒に驅られて、更に白頭將軍をして五十萬騎に將として燕丹を攻めしめる。燕丹は様子を知つて自害しようとするが、樊噲は之を諫めて、幾萬の敵も一手に引受けるから安心しろといふ。やがて白頭將軍が名乗をあげて本當に攻寄せて來ると、樊噲は即ち、文珠菩薩百日説法の、みのりの原を死人が原とせんとて奮戦し、遂に千七百人を斬る。この時敵の副將軍が燕丹と組んで谷に落ちたが、樊噲は薙刀を揮つて白頭將軍を驅逐し、更に古木をもつて敵を追拂ふ。

三段目 燕丹は不幸にして白頭將軍に捕へられて牢に入れられ、殺さるゝ日をまつ間も、故郷の母を思ふて泣く。

牢番は之に感じて彼を大切に扱ふ。

漢の高祖の臣張良は、智略第一の勇士にて、名を揚げんとして一心に觀音に祈願する。或時童子のお告げにて、かひの土橋へゆけといふ。行つて見ると衣冠正しき老翁が沓を川中に落す。張良が川に入つて沓をとらうとすると、大蛇が現れて紅の舌をまき、沓を頭に頂き、張良めがけて飛びかゝる。張良即ち切つてかゝると、大蛇は大に恐れて頭を垂れる。張良乃ち沓をとつて岸に飛び上れば、大蛇は川に沈む。見てゐた老人は喜んで、我は黄石公といふもの、武略の奥義を授けんが爲に來たといつて、三略の巻を授け、秦の國へ行けといひ、觀音の姿となり、光を放つて虚空に上る。張良は駒に乗つて直に出發する。



丁初「宮陽成」

一旦難をのがれた樊噲は、討秦の加勢を漢の高祖に求めんとして行く途中に、張良に遇つて、馬の事から争を始めて斬合ふ。樊噲はくさりかたびらや、甲を三領も着てゐるので微傷も負はぬ。争の最中へ黄石公が空から現れて兩人に諭し、その結果樊噲は高祖の臣となつて、張良を助けることとなり、二人は漢に歸る。

四段目 燕丹牢にある間、一日始皇が庭に遊んでゐるのを見つけ、母の嘆を思ふて、一度故郷へ歸されんことを願ふ。始皇は乃ち烏の頭が白くなり、馬に角が生べたらば許してやるといふ。燕丹が一心に祈念をこらすと、「角有る馬そくちに来り庭前に膝を折る、つぎに頭の白き烏はもしらすへ飛下」つたので、始皇は已むなく燕丹の歸國を許し、途中に、彼がある橋を通ると同時に、底知れぬ淵に落込むべくたくらましめる。成程燕丹がその橋を通ると、身

は落ちて瀕に沈むが、忽ち大鵬に救はれて向岸につき、無事に歸國することが出来る。

燕丹母子は相遇ふて大に喜ぶが、秦の大軍の攻入ることを恐れて荆軻にはかると、折柄始皇の爲に親兄弟を討たれ、更に金をかけて行術をさがされてゐるはんまきを利用するが上策とあつて、荆軻ははんまきを訪れ、始皇の前へ持参して、彼と組討をするから、汝の首をかせといふと、はんまきは大に喜んで、己が首をかき落して荆軻にわたす。荆軻は更に秦舞陽に助力を求め、やがて二人ははんまきの首をもつて始皇に謁し、彼を斬らうとすると、始皇は死にのぞんで華陽夫人の琴の一曲をききたいといふ。已むなく之を許すと、始皇は彈琴中に逃出す。かくて荆軻秦舞陽は敵に圍まれ、無念の中にさしちがへて死ぬ。

五段目 荆軻秦舞陽の首を始皇に見せると、「二つの首動く見えしが、まなこをくわつと見ひらいて、始皇の口を覗みければ驚き内へ入給ふ、あみにせかれてかなはねば、悪口したりしぶらんじやうが首を食ひ切り口より煙をふき、虚空をさしてぞうせにける」。

秦始皇は怒つて燕丹を討たせることになる。燕丹の部下共は之を聞くと、皆各々財寶を携へ妻子を落ちさせる。諸代の臣等亦争ふて逃亡する。燕丹は途方にくれて、母と子を連れて山中に逃げるが、不幸にして山賊の爲に捕虜にされる。

樊噲は張良を伴ふて燕丹を救ふべく歸國の途中に、山賊共が燕丹母子を輿にのせて、始皇の都に行つて賞を得んとしてゐるに會し、山賊等を欺いて輿を下ろさせ、「漢の高祖の臣下張良とは其也、又あれなるは此燕丹の甥の樊噲といひもあへずかいつかみ、首引ぬいてすてにける、樊噲枯木をふり上げてさらりくとなぎふせ」、燕丹母子を輿から引下ろす。

ら引下ろす。

六段目 燕丹を漢の高祖の處へつれてゆくと、高祖は燕丹に對面し、「御ぶん親に孝行成ゆへ度々の難をのがれ行末とてもたのみ有」といつて、これから悪王始皇を滅すことになる。

時に咸陽宮には不思議が現れる。即ち美しい蟲が一匹出て段々に大きくなり、之にさはるものは焼死する。遂に屏風障子をもやして咸陽宮を焼くことになる。蟲はやがて聲をあげ、「われは是荆軻秦舞陽はんまきが執心、驕るものは久しからず、我本懐を達したりとて猛火となつて失せ」る。

その後張良樊噲の力にて漢は秦を滅し、燕丹を昔の國に封する。これ皆孝行の徳である。やがて漢は更に楚の項羽を滅して四百年の天下を保つ。

【解説】 筋としては、財寶を多量にもつてゐる燕丹を討滅して、之を奪ひ取らうとして、秦の始皇が様々の難題をもちかける。かくて燕丹は捕虜にされたり、牢に入れられたり色々苦められるが、遂に臣下等の執心が始皇を討滅して昔にかへることが出来るといふのであるから、前期の領土財寶強奪を主題とする『はなや』型に學び、難題をもちかける處は『梵天國』型にも似たもので、臣下の執心によつて救はれるといふのは、敵役を用ひないで、奇蹟魔力による幼稚な手法で、自ら劇的緊張を弱める恨はあるが、それがやがて漸く勃興しかけて来る機巧仕掛を用ふる上には必要な仕組でもあるのである。

兎に角前期の仕組を取入れてあること少くはないが、さすがにこの期に入つては、仕組が漸く複雑となり、前期の單純な構造には見られなかつた筋の面白味が生じて來てゐることは、何人にも容易に肯かれることである。それにし

ても不幸な主人公が度々死地から救はれることとなるのは、皆親に孝行なるが故であるとし、孝行の徳を讚美してゐることは注目に價するものである。

【演出】 二段目に於て四十萬の大軍をもつて、白頭將軍の兵は燕丹を攻めるといひながら、舞臺の上では大將同士の組打が行はれるだけで、雑兵は殆ど見物の前へ顔出しをしない處に如何にも舞臺的興味がある。

一段目に於て、樊噲が物の見事に象を握りつぶす邊や、五段目に於て、樊噲張良が山賊の首を引ぬいたりする邊は、如何にも所謂公平風の淨瑠璃に似てをり、自ら和泉太夫の語物らしく思はれる。さるにても樊噲の態度が公平風であり、張良が竹綱らしく見える處から考へると、既記の如く、この前に公平淨瑠璃が存在したことを思はしめるものがあり、公平淨瑠璃は既に明暦以前から行はれてゐたものゝやうである。

三段目の大蛇活躍の場や、老翁が觀音の姿となり、光を放つて虚空に上つたりするあたりや、一段目の松が俄に大木となる處や、はんゑきが自分の首を切つて荆軻にわたす處や、更に荆軻秦舞陽の首が、かつと眼を開いて始皇をにらみ、悪口ついた男の首を食ひ切つて煙をふき、虚空に失せたなどいふ處は、糸あやつりの使用のみで、強ひて演ずれば出来ないことはないにしても、場合によつては機巧裝置を適當に用ひた場合もあつたことであらうと思ふ。殊に六段目の美しい蟲が段々に大きくなり、二人の魂が火焰をあげて、咸陽宮を焼く邊などは、相當機巧的に色々な工夫が凝されたものであらうと思ふ。それにしても死んだ荆軻等の首が、かつと眼を見開いたなどいふ邊は、當時人形の目の開閉がまだ自在でなかつたらうことを思ふ時に、斯かる寫實的の演出が行はれたかは疑問である。

【影響】 公平淨瑠璃の興隆に影響したこと多いことは、研究篇にも屢々説いたが、四段目で自分の首を斬つて渡す

邊は、近松の『天智天皇』に影響し、樊噲が象を握りつぶす邊は、後の象引の原據と思はれる。『義太夫年表』所載寶永五年七月豊竹座上演、紀海音作『秦始皇帝太夫松』は未見ながら、本曲と關係がありさうである。

○うちの姫切

江戸和泉太夫 正本

【體裁】 帝國圖書館藏本の外に、金平本全集に複製がある。十六行十八丁の小本にて、挿繪は兩面五、片面二、奥に「はんぎや又左衛門」とある。

【太夫・刊年】 卷頭に「江戸和泉太夫正本」、奥に「明暦四歲猛春」の刊記がある。

【作者】 奥に「作者岡清兵衛重俊」と記されてゐる。作者名の記されてゐる珍らしきものゝ一つである。と同時に岡清兵衛の作としては、最古の一つであり、この以前に彼の作がまだあつたかと思はしめるのである。

【形式・曲節付】 六段曲にて、各段首尾に形式句があるが、その中「さても其後」で始まるのは一、三段だけで、二段及び四、五、六段の首は、「其後」で始まり、又一段目には、別に序の文があり、六段目にも「一たび天とたんに落ち日月光失ふといへども忠臣再び世を照す」の序文がついてゐる。

曲節付としては『咸陽宮』と同様の三重のつけ方が目につくのみ。

【梗概】 一段目 多田滿仲に頼光千代若の二子があり、臣に藤原仲光がある。頼光の後見には綱金時貞光末武の四天王がある。その頃天下に不思議が數々あり、都に化生の者が出るといふ噂があるので、頼光が尋ねて見ると、錦の勾當は過去四十九年間の化生の話をして、やがて公卿の女で、嫉妬深き故に鬼女になつて、都の人をなやます宇治の

橋姫が出るといふ話をすると、頼光は之が討伐を四天王等に命ずる。直に金時が平げに出かけると、今迄見えなかつた星が出て、くるり／＼と廻つて、やがて鬼神が光を放つて虚空に去る。夜半になつて末武が薄衣かついた女と見て捕へると、それは貞光であつた。その中に綱ははし姫を髻切丸を以て討とる。

二段目 化生退治で、頼光四天王等は恩賞を受ける。やがて駿河國から、武藏相模の國守本間入道が逆心の企ありと奏し、滿仲父子は征伐を命ぜられる。

中國五國の領主由良の武者所らいしんは、天下の武將たらんとし、度々乞うて許されず、恨んでゐる折柄、滿仲父子が不在中ときいて都に上る。帝は仰天されるが、滿仲の二男千代若は三十五騎をもつて禁裡を守護し、河内守に封ぜられる。千代若の頼信はやがて新戦自及せんとするが、敵を油断させてのがれる。

三段目 かくて頼信は「武將たるべき身が人より先に落ちたりと諸人のあざけり末代までの家のきず、されば一命にかへても惜むは武士の家名にて候」といつて、先づ主上を都から落し參らせ、あとから切つて出て、仲光に負はれて津の國に走る。



「切姫の治字」 本正夫太泉和戸江 刊年四曆明

らいしんは帝を奪つて、その屋敷に連れゆき、己に將軍の宣下を願ふ。雪の日の事である。帝が不運を歎かせ給ふ

折、天人數多ドつて遠からず一瞬の來復を知らせる。

四段目 滿仲が東國を平定した處へ、仲光から都の様子を知らせたので、直に都へ上るべく濱松まで來ると、土民は皆家を空にしてゐる。二萬のらいしん軍が攻めて來るからだといふ。滿仲の部下は皆驚いて退散し、七人を餘すのみとなる。滿仲が落膽して自及せんとすると、四天王等がとめて敵を追散らす、——(此段は殆ど戦の場である。)

五段目 其後滿仲頼光は、らいしんの手から帝を奪取らんとして、先づ山科あたりにて都の様子を伺ひ、高札をたてて民を安心せしめんとするが、らいしんは長くも帝を失はうとして、播磨の兵衛重ひらをして、太子もろ共に帝を瀬田へ連れ行かしめる。之を見ると民は非常に嘆いて帝の玉顔を拜せんとする。乃ち輿から帝を下ろし奉ると、帝は高聲に叫んで、「朕萬乗の位をうけ、四海の政私なしと思へども、誤る處あればこそかやうになりゆく、是逆臣のわざならず、天の罰する刑なり、世をも人も恨むまじとは思へども、神武天皇より五十六代十善の帝にためしもなき崩御を遂げ末世の記録にとまらんことこそはかなけれ」と仰せられると、民は歎のあまりに争ふて自害する。そこへ尼公が薄衣をつけた四五人の上臈をつれて、帝に對して昔のよしみあるもの、お名残を惜み奉りたいからとて近づく。薄衣をとつて見るとそれは頼光と四天王等である。かうして彼等は巧に帝を救ひ奉る。

六段目 四天王を導いた尼公といふのは、天竺むねつちの仙女龍王で、弘法大師に招かれ、天子の守護として來てゐるもので、「今御門の難の救はん爲、かりに姿をあらはしたり、疑をさんぜよと、其たけはたひろの大蛇となり、しんせん苑へ」入ると、頼光は之を拜する。やがて頼光綱金時の三人は、都へのぼつて敵の處をつかうとし、頼光と師弟の間柄なる七條のもんくわん法師を訪ふ。「さすが天下のあるじを三人にて討んと心ていは日本一の不敵人や

と打笑ひ」ながら、丁度明朝らしいしんの爲に大般若を修することになつてゐるから、その經箱にかくれてらしいしんを討てと法師は教へる。乃ち教への通りにして、首尾よく敵の首をちうに打落し、綱は庭の枯木を引倒して小脇にかいこみ、金時は大石を軽々と引さげ、敵に向つて戦を挑むと、數千の侍は鬼か人かと肝をけして逃げ失せる。やがて帝は還幸あつて恩賞を賜ふ。

【解説・影響】 題名は全曲を貫くものではなくて、唯一段目に於て、橋姫といふ變化を退治するが爲に用ひられてゐる。要するに反逆者の現れる世たることを豫め表すが爲に、一段目は用ひられたものであらう。二段目以下は反逆人退治の軍物語であるが、反逆人は例によつて、一度は都に入つて、長くも帝を惱まし牽り、遂には危害までも加へ牽らうとする。それを四天王等は一度は女に扮し、二度目には大般若の經箱にかくれて、敵の家に忍入り、機を見て飛出して逆賊を仆すといふのである。頼光四天王等の忠誠と、その奇智とは注目すべきだが、大般若の經箱を用ひて敵を殺す計畧は『頼光勇力譚』にも『公平末春いくさ論』にも用ひられてゐる。

この作には、まだ公平は現れてはゐないが、四天王殊に綱金時は公平式行動を度々繰返し、既に型の如く活躍をつづけてゐる。それでは四天王の行動は飽くまで寫實的なものかといふと、三段目には天人が出て来てお告げをしたり、六段目にも尼公が出て来て怪しげなお告げをする。かくして怪奇味の多い軍物語となつてゐる。

【演出】 かくの如く怪奇味がなかく、多い作のことであるから、至る處糸操が用ひられてゐるのは勿論、機巧さへも用ひられてゐるかと思ふ。六段目で、尼公がはたひろの大蛇となる處などそれである。そして四天王の行動は、六段目に至つて和泉太夫物の特徴を明かにしてゐる。さるにても一段にも五段にも薄衣を着て女装をさせることによ

つて、一種の滑稽味と奇智を見せてゐるのは、作者の技巧の非凡であることを示すと同時に、演出上の功果に悔るべからざるものがあつたらうと思ふ。

【原據】 初段の宇治橋姫に關しては、『古今集』『伊勢物語』等にも見え、又『色葉集』卷三、『八雲御抄』卷一、『顯注密勘』卷十四等にも、『宇治橋姫物語』にも物語として作られ、更に『平家物語』劍卷にも出てゐる。本曲は之に滿仲頼光等の軍物語を結びつけたものである。

△平の維茂紅葉狩

天下一大和少掾藤原貞則正本

【體裁】 頼原退藏氏の調査によると、東京帝國大學圖書館舊藏本。今日正本の存在を知らず、『繪入淨瑠璃史』の記述をみると、半紙形にして、「後々のものに比ふれば稍小さく」、前期の正本が「挿繪に粗末なる丹緑の筆彩色のある小本にて、概ね二冊づゝに別れ」てゐたに、半紙形の一冊本となり、繪に筆彩色がなくなつて、精細な繪となつた、つまり新形式の正本の初頃のものとしてゐる。版元は題簽に「二條通、正本屋九兵衛」とある。又題簽の中央に外題が「もみちかり」、その右に「平のこれもち」とあるが、内題には唯「紅葉狩」とある。

【太夫・刊年】 題簽の外題左側に「天下一大和少掾藤原貞則」とあり、奥に明曆四初秋日とある。

【形式・曲節付】 六段曲にて、大序と曲尾には形式句あることが見本によつて明かだが、他は明かでない。然し大抵各段首尾に皆形式句があつたと推定し得る。

曲節付はなかつたらしいが、句切點はある。

各段首の體裁は次の如くである。

紅葉狩 初段
清文むほん 二たんめ
もみちかり 三たんめ

初段首——さてそのち、それよてんへんをあんするにひくわらくやうのことはり、さかんなるものついにほるふ、
たつくるまきはあくきやく也、こりに……

曲尾——とみないさまぬものこそなかりけれ。

【梗概】 本朝五十九代宇多天皇の御時、天下に二人の武將があつた、一人を余五將軍維茂、一人を豊浦將軍清文と
明曆四初秋版（繪入淨瑠璃史所載）

いつて、二人が都を守護してゐた。維茂は形柔和にして心に如何なる天魔鬼神にも屈せぬ強さあり、仁義の徳をそなへたれど、清文は驕慢邪曲にして、常に維茂を妬んでゐる。

嘗て維茂勅許を得て信州戸隠山に紅葉狩をなし、鬼神を退治するが、清文は維茂の不在の機を利用して讒奏し、兵を差向けて維茂を討つ。衆寡敵せず維茂は敗れて奥州へ落のび、豪族國平に頼る。國平は厚く維茂を遇し、或時維茂の望にまかせて、塩釜の風景を賞せしめる。



もみちかり 四たんめ
もみちかり 五たんめ
もみちかり 六たんめ

維茂の御臺若君は清文を避けて嵯峨に居たが、家の主判官太夫は二心を抱き、御臺若君を敵に渡さうとする。其時忠臣光貞は判官太夫等を討滅し、御臺若君を助けて、三田日向守の館にのがれ、時の到るをまつ。その間に維茂はひそかに繪旨を受け、清文を討滅して、再び世に榮える。

【解説】 維茂が紅葉狩に行つたあとで、虚に乗じて讒奏して、清文が維茂を不遇に沈めるが、機を得て再び維茂が世に出るといふのだが、その間に維茂の御臺若君は、敵に苦められつゝ時をまつといふので、前代の構想その儘のものといふべく、その中に大和掾一流の景事たる「塩釜の段」を入れたことは、この太夫の特色であつたと見ていゝ。戯曲的には前期の作を遠ざかること少いが、塩釜の景事など、文章の點からは、頗る進歩してゐる。

【塩釜の段】 大和掾が得意としたこの一段は、延寶二年刊の彼の段物集『忍四季捕』にあげられてゐるが、之を『繪入淨瑠璃史』引用の文と比較すると大分差があるのはどう解釋すべきであらうか。先づ文の一部を比較して見よう。

△繪入淨瑠璃史引用文

- 浦に出させ給ひける、もとより手馴ししは衣、すそを結んで肩にかけ、塩釜車……
- すてくさいつとなくなくも……
- 都の空にあるならばふたばみつばののきづくり
- 唄ひ戯れあるべき……

△忍四季捕の文

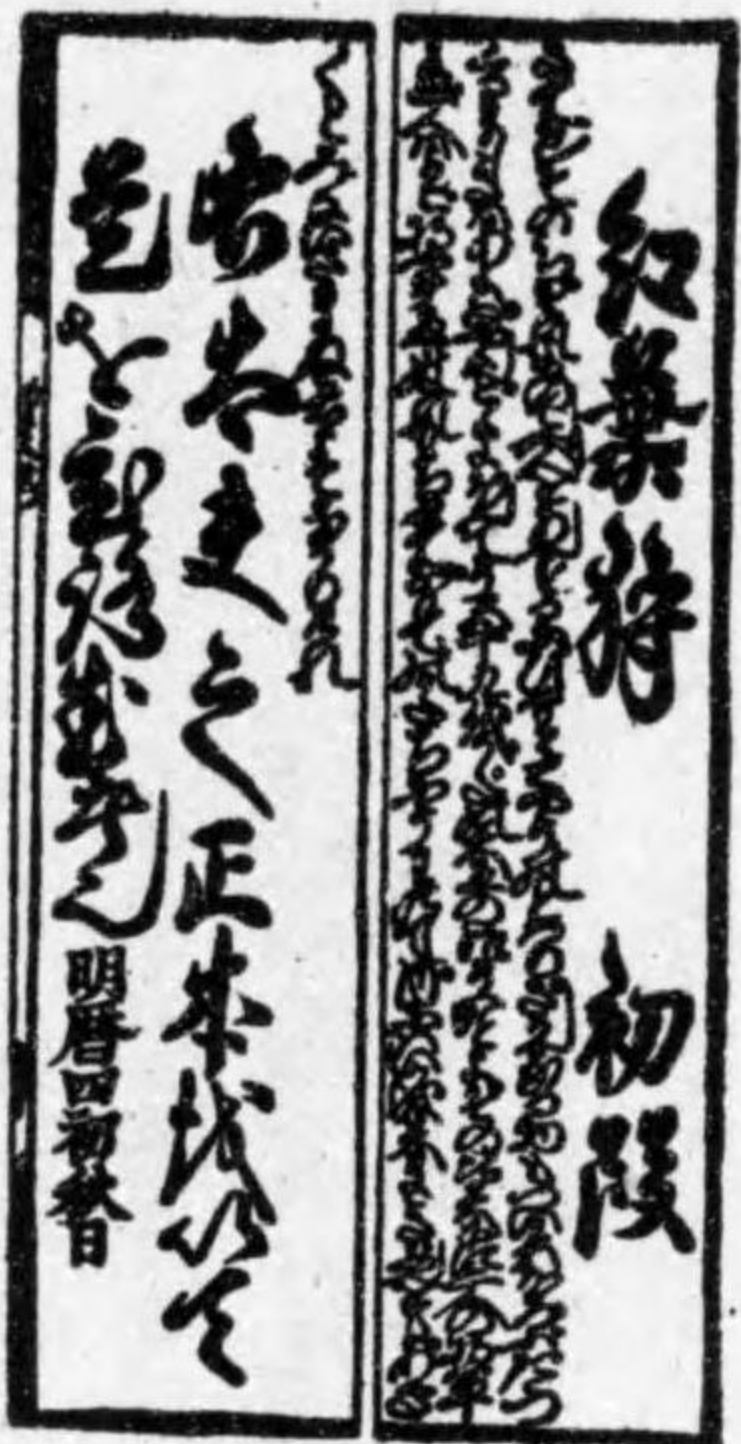
- （傍線の二十字ナシ）
- いつとなく……
- 都の空にありし時は、みつば四つばにのきづくり
- うたい戯遊ひしに……

○えびすと成つらん……

○昔を思ひ身の……

○末は霞と消上る……

○ちかの浦わにしくはなし、思はずこゝに迷ひ来て、みるめ
うき世の夢ぞかし生者必滅會者定離、南無阿彌陀佛みだ佛
と、なくくかへり給ひける、かの維茂の心の内あはれ共
中々申はかりはなかりけり



尾首の「紅葉狩」

○えびすとなりはつる……

○昔を思ひふねの……

○霞と立のぼる……

○ちかの浦わにしくはなしとうきはらして立給ふ、こゝに又
しづの女はわれもくといそべに出で、たんぶとしほを
くみもちてかへるく姿を、つくづく見れば、すそもたも
ともうちしほれ、見るにあはれを催して、いと涙はせき
あへず、あゝさてはかなきしやばせかい、思はずこゝに迷
ひ来て、みるめうき世の夢ぞかし、しやう者必滅會者定離
南無阿彌陀佛と云かうある、日も西山にかたぶけば、あま
人と打連れだち、しづのやにこそかへりけれ、維茂も圓平
いわがミともなひてきて平泉のじやうにぞかへらるゝ、と
にもかくにもかの維もちの心の内くるしかり共中々にさて
何にたとへんかたもなし

これ等を單に語り方の上の、前期と後期の差とのみ見るべきであらうか。

【忍四季揃の曲節】 『忍四季揃』中の「しほがま」の段に取入れられてゐる曲節中には、下の如きが見られる――

イロオクリ、地、フシ、上、下、ラン、カン、三重、カンフシ、フシナカシ、セツユリ、ハルフシ、イロオトシ、

引、キン、イロカハリ、カンクリ上フシ、フシハツミ、アミトフシ、など

けれどもこれ等の曲節付が、明暦の頃に用ひられてゐたものであるか、寛文頃に至つて、始めて用ひられた曲節付であるかは知る由もなし。

【原據・影響】 謡曲『紅葉狩』に脚色されてゐる戸隠山の鬼女に関する傳説は、既に『今昔物語』にも現れてゐるが、播磨即ち大和掾の正本は、この點だけは主として謡曲によつてゐる。

之を取つて頗る優れた浄瑠璃『梔狩劍本地』を作りあげたのが、近松であるが、近松曲の四段目には維茂が鬼女退治で活躍してゐる。寶曆六年竹本座上演『平維茂凱陣紅葉』は『梔狩劍本地』の續篇とも見られてゐるものである。

又土佐少掾の正本に『新撰紅葉狩』がある。

歌舞伎でも『紅葉狩』は屢々上演されてゐるが、それは所作事が多く、安永二年の江戸中村座の『御ひいき勸進帳』、全五年七月の江戸森田座の『色見草月盃』、文化七年八月中村座の『掛奉色浮世圖繪』、嘉永二年九月市村座の『餘波五色花魁香』などにも取入れられ、明治二十年十月新富座上演河竹黙阿彌作にも『新曲紅葉狩』がある。黙阿彌作は有ゆる古曲の長所を取つて、九代目團十郎が作らせたものといはれ、今日上演される紅葉狩はこれである。讀物としては墨川亭雪麿作、文政十一年刊『紅葉狩吾嬬錦繪』六卷などがある。

尙本曲に用ひて大和掾が得意とした「塩釜」の景事は、『頼光跡目論』の中にも用ひられ、かうした景事は後の公平浄瑠璃中に屢々應用されてゐる。

○あたか高だち

天下一長門掾正本

【體裁】 東北帝國大學圖書館藏本、小形十六行二十一丁、繪は兩面六、半面一、題簽の外題には「とがしあたか」と肩にあり、中央に「高だち」とあつて、下段に「大傳馬三丁目本問屋」の文字が見える。内題は唯「あたかたかち」となつてゐる。

【太夫・刊年】 題簽の左側に「天下一長門掾正本」とあるから、明暦四年の『身替問答』の太夫「天下一長門掾藤原爲英」と同じ太夫であること疑ない。そして『身替問答』の長門掾の脇には「江戸大さつま若太夫」とある。大さつま若太夫は、二代目藤原太夫直政であり、之と連名曲であることから見て、長門掾を淨雲の孫弟子とする説もあれど、あたらず、長門は確に淨雲の直門であり、明暦萬治頃の太夫らしく、この正本の刊年も正本の體裁から明暦頃と見られる。後刷に正徳三年刊もある。

【形式・曲節付】 全曲六段にて、各段首尾に定形句あり、曲節付としては三重が一ヶ所見られる。

【解説】 この曲も判官物の一つで、題材は勿論、文章も舞の本から多くを借りてゐる。即ち前の一二段は舞曲『富樫』（謡曲では『安宅』といひ、又内閣文庫寫本によれば舞曲でも『安宅』といふ）の筋をたどつて作り上げ、その内勸進帳の處は、謡曲の『安宅』からかりて數行につめてある。第三段以下六段に至る四段には、寛永二年刊の淨瑠璃『高館』全部を收め、むしろそれよりも舞曲に近い文章より成つてゐる。といつて、寛永二年の『高館』は、大體舞の本と大差なく、多少の修正を字句の上に加へたに過ぎず、かの鈴木三郎が女房との訣別の場の如きも、舞の本

その儘に取入れてあるが、この曲ではそれを削つてしまつてあるのである。要するにこの曲の外題の出る所以は、普通に通に、舞の本で『富樫』、謡曲で『安宅』と呼ばれる勸進帳の一節を加へ、その後へ『高館』の舞曲をかりたからで、『安宅高館』とか、或は『とがしあたか高館』などいつて、三つを重ねたやうな名となつたのも自然であつたと思はれる。

試にこの曲の第一段の前に加へられた十數行の文と、段尾の趣を明示し、此處でも舞曲が如何に淨瑠璃に利用されたかを知るに便したい。

あたかたかたち

初 段

扱も其後それぶゆらのほまれなだかきもうんつきねれば、いたづらに其身を亡ほし、うせし事さだめなきよのならひかへ愛にせいわたわらのばつせ源九郎よしつねの御身の上にてとゞめたり。ゆへをいかにとたづぬるに、おこる平けをことゆへなくおもひのまゝにせめほろぼしくわいけいのちじよくをすゝぎ玉へとも、ゆいかいなきものゝさんげんにて、よりともよしつね御中ふくわいになり玉ひおんこくはとうにいたるまで住まんとするに所なし、かくては如何有べきと、むさし坊辨慶を召され、かやうに所々をせばめられ、かなふべきとも思はれず、一まづ奥州へ下ちやくして秀衡をたのみ、とがなきむねを申わけ、にくかりしざんしんを失はざやと思ふはいかにと仰ける、辨慶承り、其義にてましますば、此御すがたにてかなふまじ、山伏の姿に御さまかへ下らせ玉へと申ける、此ぎ尤然るべしと十三人の人々は、ときんすゞかけ、法螺の貝、金剛杖にすかりつき、花の都を忍び出 三北國みちへそ出らるゝ急ぐに程なくおとに聞へし加賀の國……

これだけ前置をつけて、あとは殆ど舞曲の富樫（内閣文庫寫本では安宅）の筋をたどり、第一段及二段をつくつて

ゐるのであるが、第一段の終は、辨慶が富樫の城の模様を見そんじたらば腹を切つて、三途の川にて君をまつといつて別れてから、次の文となつて終るのである。



明 曆 頃 長 門 正 本 「あかた高に」

「見へたりける辨慶が心の内あつばればぶんどらうやとてきせん上下おしなべてかんせぬものこそなかりけれ」(一段終)

(題名はここにない)

二段 目

其後さいとうべんけい富樫が城へ立こへ、うちけいごを見てあればまつほどにこそしらへたれ、おもてのやぐら十三所……(やがて勳進帳まで進んで)……ふらかに讀上たり、それつら／＼おもんみるに、大おん教主の秋の月へ、涅槃の雲にかくれ、せうしちやう夜のながき夢おどろかすべき人もなし愛に中ごろみかとおハしますお名をバ聖武皇帝となづけ奉る、最愛のふにんにわかれればやみがたくていきうまなこにあらく、涙玉をつらぬく思ひをせんろにひるかへしるしやな佛を建立す、かほとれのいしやうのたへなん事を悲しみて後乗坊重源しよくを勳進す、一つしはんせんの、ほうざいのともがらへ此世にてへむいのらくにほこりとうらいにてハしゆせんれんげの上にざせん也、きめうけいしゆ敬つて申と天もひゞけと讀上たり、富樫な、めならずして、只今のほうかとてまき絹四匹武藏が前につまする、辨慶是を見て、あらおびたゞしの奉が候や、只今之を申受度候へ共、こうする三月のころ都ハ三條河原、さきのべんけいがやどへつけてたべといはんすと思ひ、むさしいつも云ひつけたる事なれば都は三條河原さきへんといし、が、はつと思ひべんそうの御坊へつけてたべいとま申してさらはとて、おいとつて肩にかけ、みまんだうに立かへり君の御禮仕り、奥州さしてそ下りける。かのべんけいがありさま、ふるなのべんせつもとゞかくやらんとてきせん上下おしなへてみなほめぬものこそなかりけれ」(二段終)

勳進帳をみじかくした事が頗る舞の本と異つてゐる。
尙この曲の第三段の首は、寛永二年版『高館』の最初と同じであるが、この曲の第三段は、寛永版の一、二段の終で切れず、その第二段の、龜井の六郎が家の重代を譲り得て喜ぶ所まで續いて終つてゐる。それから寛永版の三四五段がこの曲の四五六段となつてをり、寛永版の最後の段の曲尾二十行ばかり前、ぬまたての庄司が死んだのを、「に

くまぬものこそなかりけり」にてこの曲は終つてゐる。つまり、舞の本と同様の終になつてゐるのである。

然しこの第三段の初は寛永『高箱』の三段より少し前、辨慶等の装束揃の處から始まり、即ち『新高箱』と同様の處から始まつてゐる。以下段尾の切方は『高箱』及び『新高箱』と同様である。

要するに筋は舞の本と同様で、淨瑠璃として語り易くしたが爲に、舞の本よりか簡潔にもなり、分り易くもなつたことは明かで、殊に勸進帳の邊を切りつめて、すらくと片づけた處に、作者の手際が見とめられ、そしてそれがまた最も舞の本と異つた處でもあるのである。

【出處・原據】 出處原據等に關しては、寛永二年の『高箱』に説いた。

【影響】 寛文九年刊の『新高箱』及び正徳三年正月刊うろこかたや孫兵衛版の小形十六行十丁の六段『あたかたかたち』は、本曲に少しく手を入れたものである。又安宅の場即ち『勸進帳』の場は近松の『穢靜胎内拵』にも取入れられ、龜井兄弟と牛若が對面の場は、近松の『孕常盤』にも收められてゐる。

○熊野之權現記

【體裁】 東北帝國大學圖書館に現藏の『石橋山七騎落』と同形の極めて珍しい最小形である。普通に私が小形と稱するのは美濃判四つ折であるに、この本は半紙判半截、換言すれば半紙四つ折の縁を相當に斷つたものにて、淨瑠璃本などの型としては最も小形である。所謂風本よりは文字が大きく、十四行にて落丁あり、現存僅に七丁半に過ぎず、少くも第二丁と第八丁は缺けてゐるらしく、後に云ふ太夫正本から推すと、もつと最初に缺落があるかも知れ

ぬが不明。兎に角その間に兩面繪一と片面繪一が残つてゐるが、完本には今少しは挿繪があつたであらう。

題簽がなく、大字にて初行に『熊野之權現記』とあつて、その下に同一行中に、「太夫正本也」とあり、次の行に同大の字で、「こすいてん、初段」とあり、ついで二段目の段付が缺けて、又「こすいてん、三段目」とあり、更に「こすいてん、四段目」、「こすいてん、五段目」までであるが、六段目の段付は見えない。落丁か。これで見ると、外題は『熊野之權現記』といつただけか、それとも「こすいてん」といつたのか、若しくは「熊野之權現記、こすいてん」と重ねて呼んだものか、不明であるが、或は單に「熊野之權現記」とも云ひ、若しくは單に「こすいてん」ともいつたのであらう。本曲の一部は昭和十一年刊『説經節集』第一にも載る。

【太夫・刊年】 奥に「萬治元年十月吉日、さうしや丸兵衛」とあるだけで、太夫名は不明である。

【形式・曲節付】 五段目の文字があるから五段あつたことは疑ないが、類似曲から推すと、六段あつたかも知れぬが、不明。曲節付は何もない。各段「さても其後」で始まり、その中初段は

「さてもそのうちそれあめつちひらけしはしめ久かたのくもいをひのものとらかんよりせいかんまでは一千五百りきたかい
よりなんかいまでは七百よりみな是しんめいしゆごくにたりなかんつききの囀むろのこをりをとなしかはのかはかみにすい
しゃくし給ふくまの三しやごんげんのゆらいをくわしくたづぬるにその中ちぢくのあるしをせんさい王と申奉る……」

と始まつて、二三四段には形式句あり、曲尾も

「……しゆざうさいと思召はんりのひしやをつくらせ大王しん王めし給へばのふみをくみも御共申東をさしてとひ給ひ日
本きい國くまの三しやごんげんと現はれ給ふ今とうたいに至まであゆみをはこぶ輩は成佛うたかひなかりけりかんせぬものこ

とあるから、各段首尾に皆形式句があつたと思はれる。

二段目に十月懐胎の模様の節事がある。

【梗概】 初段 ……紀伊國音無川の川上に垂跡し給ふ熊野三社権現の由来をたづねると、中天竺の主をせんさい王と云ひ、聰明叡智にして、聖徳明かなれば、民徳にうるほひ國富み、ふる雨も時をたがへぬ。數千人の後、一萬人の大臣朝夕に仕へ、中のふみの大臣重高、をくみの中將かねみつとて、文武二道の兩臣がある。或時大王は二人の臣を召し、朕既に摩訶陀國の主となり、近國を従へ威を及ぼすに、「ふつしこくのけいらんは、ぶやうのしんにてありながら賁物をさげず、我をないがしろにする……いかゞせん」といふ。二臣が直に追討せよとすむる儘に、兩臣に三萬餘騎を給ひ、ふつし國へいそがせる。けいらん王はこの由をきくと臣を召し防禦策を講ぜしめる。かくて寄手の兵は大手からめ手から関の聲をあげる。聲が静まると、のふみの大臣大音聲に名乗をあげて、攻入る故を明かにする。……（この處より落丁になつてゐる、以上は『説經節正本集』第一にも載せられてゐる）

二段目 ……（首は欽落）「の后をもてあそびゑいくわに暮らせ給ふ。こゝに物のあはれをとめしはあまたの后その中に、こすい天にてもものあはれをとめたり」。ところでこのこすい殿といふは容顔美なれども、後の數が多いので大王の目にとまらぬ、こすい殿が十七の時から十九になるまで空しく暮してゐる。こすい殿はものうさに、七寸の十一面觀音をつくり、大王の目にとまるやうにと祈る。或時大王酒宴の時、後の數を數へると九百九十九人にて一人缺けてゐる。大王今一人のことを問ふと、大臣はこすい殿が西の方にあると答へる。大王氣の毒がつて、

こすい殿を訪れ給ふと、まことに三十二相をそなへてゐるので寵愛限りない。けれどもこすい殿は王子なきを悲しみて、再び觀音に祈請をかけると、月のさはり身にとまり三月ばかりなやむ。侍女の一人つぼむといふ女之を知ると、御簾の前を通る際からくくと笑ふ。故をたづねると、「胎内にやどる時はじめはふどうしやくとてつこの姿をへうす、二月にはなさしと云……」と懐胎の模様を述べて、我君の懐胎のうれしさに笑つたと答へる。こすい殿喜んで賞美し、趣を大王に傳へると愈々寵愛される。

三段目 數多の后は之をきくと、善王か惡王かを占はせんとて、博士を招いてたづねると、博士は巻物を取り出して、この君の額には米といふ文字すはり、双の手には日月をもつ、三才にて東宮に立ち、七才にて位につくと見通すやうにいふ。后達は色を失ひ、實は王子を失ひたいのだ、大王の前にて懷妊の王子は惡王だといつてくれといふが、博士がそれをきいて驚くと、后達は博士を脅迫して、頼みを承知させ、博士を伴ふてこすい殿に赴く。大王は一同が何の爲に來たかを怪むと、こすい殿の御懐胎を祝ひ、ふつし國の博士をして占はしめん爲といふ。大王も喜んで占はせて見ると、「誕生のその日より天下乱れて、まかた國に一人も有べからず、父母の御首をとらせ給ふ」と博士はいふ。大王大に怒つて博士を追拂ふ。后達は乃ち大王をおどさうとして、千人の中にて六尺ゆたかの女房達に赤き衣をきせ、顔に墨をぬり、怪しき風をして、丑の時にこすい殿に至つて、この家に大惡王を孕みたる女房有り、大王還御なくば數萬の眷ぞくが取つかんで虚空に上らんと叫ばせる。

四段目 大王はこの企劃を后達の所業と思はず、惡魔のなすところと思ひ込み、自分一人ならばともかく、十萬の民を取失ふことあつてはかなはぬといつて、御殿へ還御せんといふ。こすい殿も仕方なく別れる。さて大王がゐなく

なると召使のものも皆去つて、ごすい殿は唯一人になる。后達はいよくごすい殿を失ふべく、大王の命だといつて、官人をしてごすい殿を、ちこんしやうの山ひだとくわうの麓、はんだうの岩屋の前にて誅せしめる。官人達が討たうとすると太刀が折れる。「ごすい天の給ふハ、いかに汝等胎内に王子まします上はつるきもいかて立つまじきぞ、七月にてうみ奉らん、それまでは命を助けよや」。官人達も山にて待ちながら日數を送る。その中に玉の如き王子誕生する。ごすい殿は「なむ十方の諸ぼさつ別して山のかみこのみなしごもりたて、一たび大王の御めにかけて給はれとかきくときはや誅せよ」といつて泣く。官人達は水もたまらず首討ち落す。



萬治元年刊 『熊野之權現記』

五段目 官人達がごすい殿の首を后達にもち歸ると、后達は喜んで首を埋めて知らぬふりをしてゐる。大王はこの事を何も知らず悲しんでゐる。さて王子は首なき母の乳房によつて乳をのみ七歳になる。而もこの君諸天のあはれみによつて、狐狼野干に守護されてゐる。その頃靈鷲山のちけん上人はちこんしやう山にある孤兒を養育せよと靈夢を蒙り、太子を連れ歸つて育てる中に十歳になる。「學問世に越へ八まんしよくぎやうを讀みつくし」た大王はごすい殿に別れて十三年になるので、弔はんとて聖僧を招く。又若君は或時父母を戀ふてゐる折柄、夢に母の

お告をきいて、自分の經歷を知り（以下途中落丁、段尾不明）

六段目 （同様の類似正本から見ると、此處に六段とあつたかと想像されるが不明である。兎に角残つてゐる最後の半丁によると、——）御ちごふたをあけて見給へば、ごすい殿の相好は少しも變らぬので、首に抱きつく。そして我こそごすい殿の胎内にやどつたものだといつて泣く。大王は立より、さてはわが子かと懐しみ泣きながら、ちこのこれまでの來歴をきく。太子今は十五歳になる。乃ち何處へか飛び、車の落ついた處にて衆生濟度をせんと思召、萬里の飛車をつくらせ、大王と共に乗つて、東をさして飛び、日本紀伊國熊野三社權現と現れ給ふ。

【解説】 本曲は所謂『熊野の本地』といはるゝお伽草子を原據とするものであるが、六段物となつては、『熊野の本地』と稱するものと『ごすいでん』と稱するものと二つの系統をつくつてゐる。従つて、本曲は帝國圖書館藏や、東京帝國大學圖書館藏の『熊野之御本地』と稱するものとは、構造も詞章も少しく異り、寶永頃の佐渡七太夫豊孝の正本『ごすいでん』と殆ど同様のものとなつてゐる。

尤も七太夫本では、本曲初段の戦争の處が第二段に入れられ、本曲第二段のごすいでんの寵愛される所が初段に取り入れられてゐる。そして第三段以下は同様の仕組であるのみならず、本曲を可なりにとつて、文章も非常に類似してゐる。そして五翠殿が、他の后等から嫉妬的となつて殺され、生れた王子が野獸に育てられ、長じて大王に近づいて、始めて真相が明かになると、大王はかゝる罪業深き國にあることを好まず、萬里の飛車をつくらせて、太子もろとも日本紀伊の國に飛び、熊野權現と現れたといふ大筋に於ては勿論、曲尾も大體同様であるが、何しろ本正本は當時の曲としても頗る短い方であり、詞章もまた古めかしい味をそなへてゐる。

尙本曲に關しては『熊野之御本地』の参照を要する。

【出處・原據】熊野權現が摩訶陀國から飛來したといふ傳説は、『寺社元要記』卷十九に見えることを『古事類苑』神祇部に記し、又『諸神本懷集』上にも「熊野權現は西天摩訶陀の大王慈悲大賢王なり」と記され、舞曲の『高館』には本曲の概畧が、鈴木三郎が重代の腹巻について説く所に記されてゐる。全體の物語はお伽草子『熊野本地』によつたものである。

【影響】淨瑠璃や説經の形式にされた正本としては、本曲は所見本中最も古いもので、この影響を受けたものに、先づ萬治寛文初年頃の『こすい天』がある。

次には、別記帝國圖書館藏本及び東京帝國大學圖書館藏本の半紙形輸入十七行十三丁、うろこがたや版『熊野之本』があり、又寶永頃刊の佐渡七太夫豊孝正本惣兵衛版の『こすいでん』があるが、これは挿繪なしの半紙形八行五十八丁本である。

又『五翠殿』といふ正徳三年刊の輸入の正本や、享保九年鱗形屋孫兵衛刊の輸入正本『五翠殿』といふのもあるが、未見である。この外、京都帝國大學圖書館寄託、古梓堂文庫にも、東京帝國大學圖書館にも、『繪入御すいでん』といふ二冊物があるが、これは淨瑠璃でなくて、假名草子である。

尙第二段に取入れられてゐる懷胎十月の由來の節事は、近松によつて改作して『蟬丸』に用ひられてゐる。

正徳元年豊竹座上演の紀海音作『本朝五翠殿』は、本曲とは別の材料を扱つてゐるが、女主人公照日の前の難儀を中心として見て、五翠殿の苦みに似てゐるといふことで外題を似せたのであらう。

歌舞伎では元祿十三年森田座上演三樹屋兵庫作『和國御翠殿』は本曲と筋の上には關係がないが、唯、女主人公の女三の宮の境遇が「御翠殿」に似てゐる所からこの名をつけたものである。

●こすい天

【體裁】原本には、題簽も初丁も飲けてゐるので外題さへ不明である。或は『熊野の本地』と稱したかも知れない。半紙形十六行二十三丁、挿繪は兩面七あり、版元不明ながら體裁から見て上方版であることは疑ない。

【太夫・刊年】共に不明ながら、挿繪から見て萬治頃のものといはれてゐるが、兎に角體裁から推定すると、寛文期のものであることには間違ない。

【形式・曲節付】六段曲にて、初段は不明だが、第二段以下に次の如き説明書がある。

第二 こすいでんくわいにん 井 さうにんうらなふ事

第三 こすいでん御なけき 井 ちこ山へおつる事

第四 わうじたんじやう 井 こすいでんさいご

第五 上人むさう 井 ちこさんへ尋上らるゝ事

第六 太子くらいに付給ふ 井 后たちさいごの事

曲節付は三重だけが見られる。

【梗概】大體次の帝國圖書館藏本に近いものである。

【影響】 次の帝國圖書館藏本は之によつたものと思はれる。

●熊野之御本地

【體裁】 帝國圖書館藏本。同本が東京帝國大學圖書館にもあり。半紙形十七行十三丁、兩面繪五、繪は非常に柔か味のある筆致である。題簽なく、上記の内題があつて、奥には唯「大傳馬三丁目、うろこ形や孫兵衛新板」とある。

【太夫・刊年】 共に不明ながら、元祿頃のものか、『尾陽戲場事始』には、「寛文五年、尾頭町西側にて説經操芝居興行」、太夫日暮小太夫が、コスイ天王、山掛太夫等説經九曲を語つてゐることが記されてゐる。元來が寛永頃の同様曲を原據としたもののやうである。

【形式・曲節付】 六段曲にて、各段首尾に皆定形の形式句あり、曲節付はない。

【梗概】 初段 「扱も其後なんえんふたいふたらく大日本王城より南紀伊の國に大じんまします、則くまの權現と申奉る、まことにけんちうしゆせうにして御めくみ久かたの田方の外まであまねくりせうを施し、衆生の願をみて玉ふ、そのいにしへを尋ねるに……」中天竺まかた國の大王に千さい王といふのがあつた。富榮えてすばらしい御殿に住んでゐた。のふみの大いしげたか、おくみの中將かねみつの外に、一萬人の臣、十一萬人の殿上人が帝都を守護してゐる。千人の后があるが、惜しいことには世繼が一人もない。末の后千王女は最も美しいので殊に寵愛されてゐる。千王女は八歳の時から觀音を信じ、毎日三十三卷の普門品を讀むことを怠らぬ。そのお蔭か、千王女は懷妊した。王の喜は一方ならず、専ら其處に付添つてゐるので、他の女御達は不機嫌の上もない。大王は千王女の爲に、

せんどうの松原に新に五翠殿を設け、寵愛限りがない。之に反して他の后達は自分達の今後の淋しさを思ふと、たまらなくなつて、王子の誕生をのろひ、五翠殿を失はんが爲に、先づ相人を招いて占はせると、生れるのは王子で、七歳にて東宮に立ち、十歳にて唐と天竺を掌に收め、爲に百年の間世界が安堵し、類稀なる天子だ、といふ。之をきくと后達は愈々妬ましく、何とかして呪咀せよと頼むが、五翠殿は既に百日間法華經と、觀音經三卷とを讀誦怠らぬ身なれば、如何程呪咀しても甲斐がないと答へ、その上「かのお經のもんけんしやくおほんにん」と説き給ふてあるから、却つて爲にならぬといふ。けれども蓮華夫人は、なほ相人に向つて王子のことを大王に悪口し、九百九十九人の后達の爲に盡さんことを求めるが、相人はどうしても應じない。それでは一同は鬼となつて、王子諸共后を引さき、相人の末孫まで取殺してやるといつて、見る／＼顔色までかへて脅かすのである。乃ち相人は已むなく后達の願をいれることにして、賞美を受けて退出する。

二段目 日を選んで后達は計劃を實行すべく、先づ打揃つて五翠殿に集り、千王女懷妊の悦を述べ、やがてすゝめて例の相人を招いて、生れるものが男か女かを占はせることになる。相人は后達と約束の如く、王子であることを占つて、王子三歳の時鬼神來つて人民の種をたち、七歳の時大王の首を斬り、御母及び大臣公卿をさし殺し、十歳の時には國を唐に奪はれて王子も亡びる相があると、全く反對のことをいふ。一同は驚くが、大王は之に反して、驚きの中にも、王子と生るゝさへ祝すべく、而も七歳までもそだつといふに、さりとほまた妙な占が出るものだといふ。相人は門まで出ると、眼がぬけ出し口がさけて死ぬ。后達は全く閉口して第二の策を案ずる。やがて一同は頭に火をとばし、太鼓を腰につけ、化物の風をして、風すこく小雨の降る夜、五翠殿の周圍にて、物凄聲色にて、大王が早く

還御なくば、天下は野牛の棲處となり、王子誕生あらば今生後生の仇となるなど、様々の忌はしいことをいつて逃去る。大王はつくづく過去の業因を悲しんでゐると、大臣達も早く還御をすゝめる。翌朝大王に別れた後の悲歎は一通りでなかつた。

元 祿 頃

三段目 さて大王を五翠殿から引はなすことに成功した後達は、更に五翠殿を滅すべく、武士達に命じて山中に運ばせる。武士達は怪しみながらも、蓮華夫人の宣旨だといふので、已むなく命に従ふ。もうこの時には誰一人五翠殿を護るものがない。大王と今朝別れたばかりの五翠殿は、大王の言葉が餘りにも偽なるを歎きながら、「只うらめしきはさきの世の因果のめぐるお車のやりかたもなき我身かな、よしそれともさきの世の報と思へば恨むべきにあらず、されば現在の果を見て過去未來を知るとかや、後の世も又かくこそあらめと思へばいとあぢきなやと嘆きつゝ」、武士に引かれて、ちごさん虎の窟に着いた。



熊野之御本

四段目 ちごさんにつくと、五翠殿は肌の守の觀世音を岩の上におき、例の如く普門品を高らかに讀んで後、胎内の王子は人となるまで守らせ給へといつて、やがて武士達に覺悟の死を知らせ、早く斬れといふ。武士が斬りにかゝらうとすると、劍はば

らゝに折れる。かうなるのが當然だ、胎内に王子がられるのだものといつて、五翠殿は「人間の出生する初をあらゝ語つてきかせん、父母の胎内にやどる初の月は不動のけにてとつこの姿をひやうせり……二月には如意寶珠釋迦如來にて……十月は阿彌陀如來つかへりとして……佛のお慈悲かくの如し……」と述べて、王子誕生の後はからへと教へると、然らば一先奏聞申上るからとて、都へ連れ歸らうとするが、五翠殿は、今更ながらへるべき身でもないし、歸れば千人の後達がひどい目に遇ふ、自分は死んで千人に幸すべきだとて應じない。さうかうしてゐる中に、王子はやすくと誕生する。その姿を見ると、却つて今更死ぬのが悲しくなるが、遂に乳房を王子にふくませながら首を刎ねられる。と首が聲を放つて「みなしごのすめる深山の龍田ひめあらくも秋の木の葉ちらすな」と詠ずる。武人は恐れて退散する。

五段目 武人達は五翠殿の首をもちかへつて后達から賞を受けたが、王子はその儘山中に放置して歸つた。けれども不思議や、母體から乳を吸ふ、狐狼共が守りそだてる、さうしていつか七歳になる。

その頃舍衛國祇園精舎の和尚ちけん上人は不思議な夢を見る。老翁が現れ、王子に就て、現實と同様の話をして、王子を佛門に入れ、五翠殿の菩提を弔つてくれ、といふのである。急いで山に行つて見ると、果して野干に育てられてゐる王子がゐる。人語を知らぬ筈の王子に對して、上人は事情を明かにし、別れを悲しむ野干共をいたはりつゝ、王子をつれて都に歸る。

六段目 王子長して十三歳、今は學問に通じ甚だ聰明である。一夜夢に母に遇つて以來心地すぐれず、上人に遇つて、母のことを尋ねると、全く夢に見たと同様である。王子は母の遺骨でも拜する機を得たいと願つてゐる中、宮中

から使者が来て、五翠殿の十三年の法事を替むについて、上人に供養の導師を命ずるといふことになる。上人は王子を連れて坐に連る。やがて上人は説教の後、褒美を望めと云はれると、自分には何の望みもないからとて、五翠殿の御ぐしを見たいといふ王子の希望の許を乞ふが、最初の中は大臣共は之を許さぬ。そこで上人は一切の事實を述べ、大王は始めて事實を知つて、五翠殿のおぐしを取出させて見ると、まだ顔色もそのままに恨めしげなる顔付である。王は千人の後達を招いて事情を明かにし、直に打首にせよと命ずる時、王子は母の供養の爲九百九十九人の命を助けたいといつて後達を救ふ。やがて飛車といふ千里を飛ぶ車に、大王太子五翠殿の御ぐしと上人が打のつて東に飛ぶ。后達はあとを追ふが梵天帝釋が天から下つて石をなげて皆殺す。飛車はとんで日本の熊野に着き、熊野権現と現れ、五翠殿は結ぶの宮、太子はやく一王子、上人はしやくの大菩薩、一萬の大臣十萬の粉上人は末社と現れ、衆生を濟度し給ふ。

【解説】 九百九十九人の后が子なくして寵がないので、五翠殿一人を妬んで殺してしまふ。かうして嫉妬の犠牲となる美姫のはかない痛ましい生活を中心として、その子がやがて復讐するよりも、母の供養のため、罪あるものを許すといふのであるから、まことに説經らしい題材でもあり扱ひでもあつて、この題材が早く説經として喜ばれたのは當然だと思ふ。思ふに淨瑠璃が先に之を扱つたのでなく、お伽草子の『熊野の本地』を先づ説經が取入れて、後に淨瑠璃にされたものではなからうか。そして五翠殿といふのは、女主人公の御殿の名であつて、最後に女主人公の遺骨もろとも關係者一同が、千里を飛ぶ車に乗つて、日本の熊野に來つて鎮座したといふのもロマンチックで面白いが、之が爲に『熊野の本地』といふのがこの物語なり本曲なりの本名で、『五翠殿』といふのは通稱であると信ずる。そ

れにしても、印度の物語を材にとりながら、臣の名などは全く日本式であることも面白いが、最後に犠牲者の王子が大慈悲心から復讐をしないのも愉快であり、禽獣どもが七年間、人間の子を養育するといふのは、まことに痛快なロマンスである。

【出處・影響】 本曲の出處・影響其他に關しては『熊野之権現記』参照。

○にたん四郎

天下一大和少掾 正本

【體裁】 第一 萬治二年版は今日その所在を知らず。顯原退藏氏の未刊『古淨瑠璃研究資料』によると、萬治版の題簽の上段には、中央に、井桁の内に橋の紋あり（繪入淨瑠璃史にもかく記し、この紋から、この正本を井土大和掾の語物としてある）その左右に分けて「直之、うつし」とあり、中段に大きく、中央に『二たんの四郎』とあつて、その右側に「しよもつうり」、左側に「女たいけつ」と記され、下段に「新板、正本屋、太兵衛」と三行書にされてゐる。そして繪入十六行の六段曲にて、奥に「萬治二己亥正月吉日、正本屋太兵衛板」とあり、初行は次の如く始まつてゐる。

初行——「さてそのうちあしたにかうかん有てせいろにほこるといへとも夕へには……」

第二 寛文版は東京帝國大學圖書館に二冊と、帝國圖書館に一冊ある。

この三冊は皆半紙形十七行十八丁半、柱に上、下とあつて、丁附は別々についてゐる。両面繪六、版元は皆山本九兵衛で、東京帝國大學圖書館本的一方には、題簽の上段に「新板」と記し、中段中央に『にたん四郎』とある。之を

東京帝國大學舊圖書館蔵の寛文七年版題簽によつて見ると、更に外題の右に「しよもつうり」、左側に「天下一大和
搦正本」とあり、下段に「二條通、正本屋、九兵衛」と三行に書かれてゐる。他書には題簽がないが皆同版である。
頼原氏の調には、「萬治版と寛文版とでは、版と繪は異れども、内容は全く同一」とあるから、版元は異れど、寛文
版は萬治版の再版である。

【太夫・刊年】 成るほど萬治版題簽に、井上大和搦の紋所がある點から、大和搦の正本と斷定して誤はあるまい。
現東大本の二冊も、舊東大本の寛文版も、帝國圖書館本も、皆同様大和搦正本で、奥に「寛文七丁未年五月吉日山本
九兵衛板」とある。

【形式・曲節付】 寛文七年版の三冊、みな六段由で、各段首尾に定形の形式句あり、曲節付は三重以外にない。二
段以下の段付の下には次の如き説明句がある。

- 第一 いたんの四郎
 - 第二 あく七にたんとうたるゝ事 井 吉川やうしんの事
 - 第三 吉川さんげん 井 いたんかまくら入の事
 - 第四 吉河しよち入 井 いたん妻子にうたるゝ事
 - 第五 いたん妻子生捕るゝ 井 あさいなうばい取事
 - 第六 かまくら對決 井 いたん本地にかへる事
- 寛文版の初行——「さてもそのちあしたにかうがん有てせいろにほこるといへともゆふべには……」

【梗概】 第一 頼朝の時に伊豆に仁田の四郎忠綱といふ勇士があつた。子を小太郎綱重といふ。十三歳ながら弓馬
の道に達者である。後見に工藤あんさへもん常俊、同嫡子源内直房があり、若君のめのもとに金剛兵衛清胤弟孫六など
がある。



「耶 四 ん た に」 版 年 七 文 寛

その頃筑波山に悪七別當ばい、かんといふがあり、大悪無道のをせ
もので、平の宗盛に仕へた上總の五郎兵衛の嫡子で、身の丈七尺あ
り、筑波の麓にて盛に悪事を働く。土地の目代あんさいはこの事を
鎌倉へ訴へる。けれども土地の人々は之を鬼神の行としてゐる。訴
があると、仁田四郎と、吉川平太とは、これが討伐を引受けんとて
争ふ。實朝は之をなだめる。

第二 仁田四郎は八十五騎を従へて筑波に向ひ、先づ悪七の手下
から殺してかゝり、遂に悪七を討とる。ところが例の仁田と功を争
うた吉川は、巧に仁田をだまし、折角仁田が取つた悪七の首を盗み
去る。

第三 吉川は悪七の首をぬすんで先に歸り、實朝に讒言をする。
之をきいた仁田の妻は吉川を恨んで子供に物語ると、子供は吉川を討たうとして駆け出す。が母は之をとめる。その
間に吉川は實朝から、仁田の領土を貰つて得意になり、更に仁田を滅さうとして、弟と謀つて敗れる。その後仁田や

うやく鎌倉へ歸る。

第四 城は勿論領土まで取られた仁田の妻子は、吉川を討たうとして、姿をやつして刀劍書物商となり、賤の女に交つて市に出る。市の立つた日に、吉川が来て買物をしようとする。この時妻子は緘づくしをして武具を數へたり、和漢佛書の名を并べたり、源氏物語の由來を説いたりして、時を見計つて吉川を討つ。

第五 三河の住人あすけの中將國廣は、吉川の婿であるが、そこへかけつけて仁田妻子を捕へて鎌倉へ送る。途中藤澤にて國廣は一同を殺害して、首だけを携へて行かうとするが、仁田の妻はこの時殺害されようすると、本望を遂げたからは、最後をたしなみ清く斬られよといつて、我子にさとす。折柄、朝比奈三郎が飛んで来て、二人を預かり鎌倉へ連れてゆく。

第六 遂に一切が暴露されて、仁川の妻子も朝比奈も實朝から賞美され、本領を復される。

【解説】 要するに一種のお家騒動、功名争、横領物語、復讐物語に、鬼神退治風の戦争物語をとり交へたもので、四段目の書物賣の節事などは、大和掾の得意で、この時代としては變つたものである。

【影響】 他人の功名を盗んで榮えてゐるものが、後には暴露して復讐されるといふ趣向は、『東鑑平鬼王丸』にも用ひられ、今後『末武印問答』その他に屢々應用されてゐる。

○六孫王經元——源氏のゆらひ

江戸近江太夫 正本

【體裁】 帝國圖書館藏本。別に『金平本全集』に複製あり。小形十六行十四丁半。繪兩面五、片面四、繪の大きさは

師宣風ながら少し小さい。内題には『源氏の遊らひ』とあるが、外題は『六孫王經元』となつてゐる。題簽の上部に「新板」の文字があり、下段に「通油町、吉田屋、開板」と三行書にされてゐる。この曲と『源氏白旗の由來』とは全く別物である。

【太夫・刊年】 外題の左側に「江戸あふみ太夫正本也」と記され、奥に「萬治二曆三月吉日、通油町吉田屋」とある。

【形式・曲節付】 六段曲、二、四、五段が「其後」で、他は「さても其後」で始まり、段尾には皆定形句をもつてゐる。初段には更に「つらくせけん」の吉凶を観するに天のなせるさいはさけんと思はばさかるべし、身よりいたせる禍はのがるゝに處なし」と序の文をもつて「こゝに本朝六十二代村上天皇の……」と本文に入つてゐる。曲節付はなす。

四段目では、金季が讒言されて能登に流され、二人の子に別れてゆく所が長い道行になつてゐる。

【丹後の語物】 『百載述略』に所謂、寛永中、長州屋敷で語られたといふ『六孫王魔退治』を改作したものがこの作であらうし、又丹後が語つた白鷺淨瑠璃『六孫王魔退治』といふのもこれの原作であらう。

【祖父四天王】 この曲の一段目にては、紫宸殿に於ける六孫王の惡魔退治を描き、二段目以下には、滿仲の臣に、三田の左衛門信綱、坂田源太金季などが出て活躍するが、彼等は綱金時の親にあたるのである。後に現れる竹綱公平はその子であるから、それを子四天王といへば、この曲は父四天王物語とも、もつと正確にいへば祖父四天王物語とも（尤も四人揃つてはゐないが）見ることが出来る。

【梗概】 初段 天曆二年八月十五日、天皇俄に御惱あり、明月二つ出づ、博士が占ふと、將門の靈魂が魔王となつて君を惱まし奉る。二つの中、北の月は魔王のわざとあつて、六孫王經元勅によつて北の月を射落すと、月輪忽ち鬼神となつて落ちる。落ちた鬼神の首を斬ると、その斬られた首が天に飛上つて姿をかす。天皇の御惱忽ちいえる。六孫王は源氏の稱を賜ひ鎮守府將軍となる。これが源氏の始である。やがて鬼神の首がさらし物にされると、「不思議や俄に震動雷電し、黒雲一むらまひ下り、雲中聲立て、そのむくろ取返し今一度首ついで御門を恨み申さんといふよりはやく落つると思へば、むくろかつばと起上り、もとの如くに首ついで御殿に飛入らんと」するを、三田の左衛門が飛かゝつてすたゝに斬る。

二段目 六孫王の子満仲は、望月左近太夫有しげから、戸隠山の魔を退治して、父の武名をつけと勅命を傳へられ、ひそかに魔を討つて功名を立てんとて、金季をつれて信濃に下る。諏訪の明神に祈請をこめると、明神は八十ばかりの老人となつてあらはれ、鎧を贈つて守護を誓ふ。やがて満仲等二人は鬼神に呼かけ、見事に鬼神の首をとつて都にかへる。

三段目 都に歸ると、金季は三河の領主に封ぜられる。望月は之をねたんで、途中で討たうとするが、却つて又打破られる。(この段の終で、金季の臣は、望月の臣を引さげて投げとばしたりして、公平式の活躍をする。)

四段目 望月はいよく金季を怨んで、彼は平家と力を合せて、源氏の滅亡をたくらむと讒言する。六孫王は怒つて金季を呼よせさせ、能登へ流す。金季は都へのぼる前に、母なき二人の子との別れを嘆く。

金季は前に望月を憐んで生かしておいたが爲に、却つてかゝる難儀に遇ふことを悔ひ、十三歳の櫻の前と、三歳の

千代若の二人を後にして、流されてゆく身を泣くのであるが、それが長い道行になつてゐる。

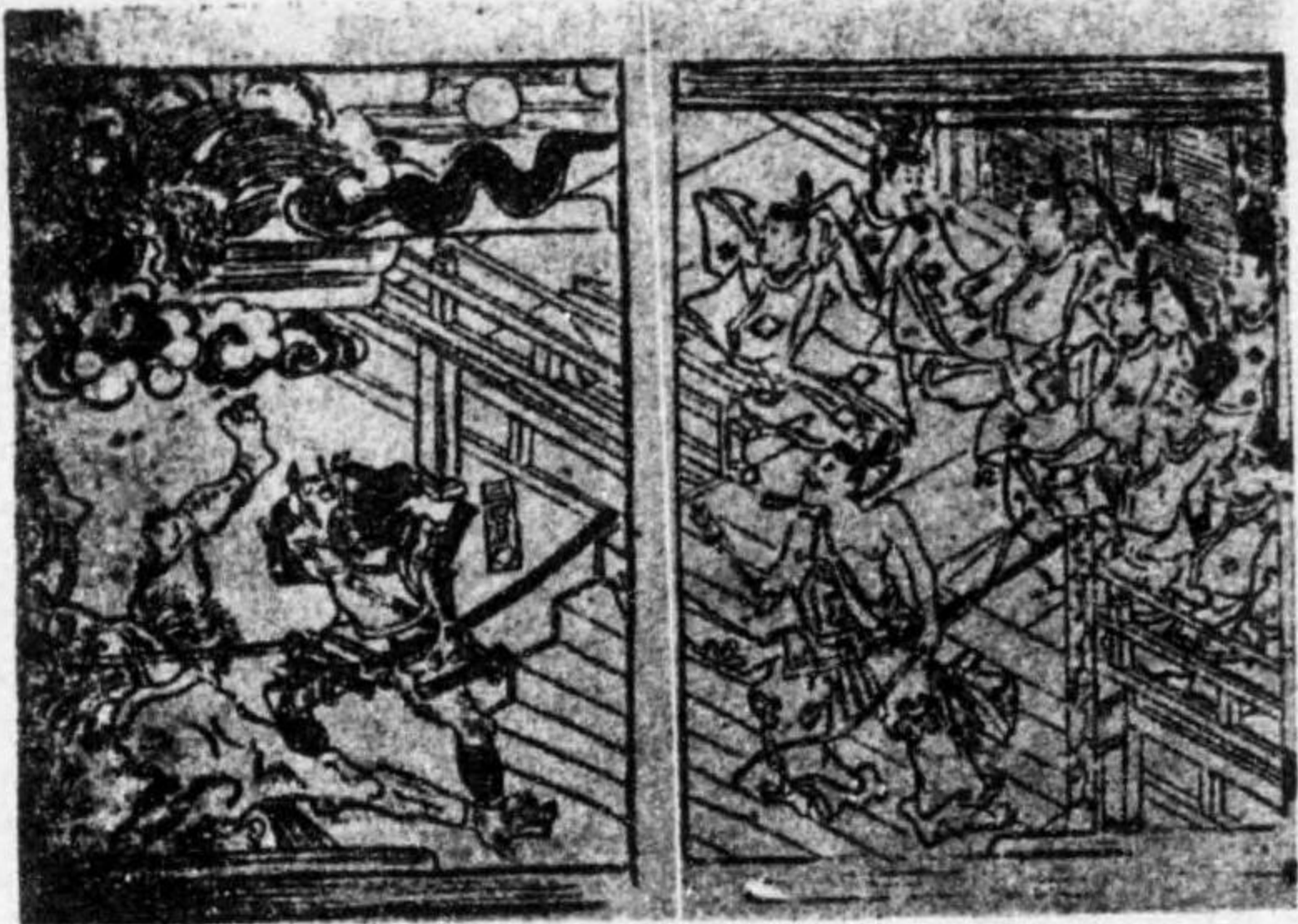
五段目 金季の臣盛春は、主人の二兒をつれて、都に上つて、時節をまつ間に、乳母が死ぬ。櫻の前が悲歎にかまかれてゐるのを慰めながら、盛春が乳母を葬つてゐる隙をうかがつて、五條の中將が現れて、二兒を奪ふて家に連れ歸る。中將は櫻の前を妻にせんとするのである。盛春は血眼になつて、主人の二兒の行衛を尋ねる。

六段目 櫻の前は五條の中將との間に、千代光を生む。いつかそれが十二歳になる。彼女の弟千代若は十五歳になる。この時姉は千代若に、敵望月の物語をする。千代若はすぐに敵を討ちに出ようとするが、千代光もこの敵討に加はりた、許されねば自害するといふので、二人連れで敵討に出る。

敵は丁度北野へ參詣してゐる日であつたので、二人は苦もなく、敵を討とる。そこへ金季の郎等盛春も来て、首を斬られた死骸を切る。だん／＼名のりあつて見ると、互の關係がわかり、満仲から六孫王へ

と、事情が始めて知れて、讒言によつて流されてゐた金季は能登から呼返される。

満仲は千代若を坂田の民部金時となし、その子頼光の守役とする。頼光は十一歳、金時は十五歳。



來由の氏源——「元經王孫六」 本正夫大江近

【解説】『紅葉狩』や前期若狭守の物語などの影響が明かに見える。

六孫王經元が將門の靈たる鬼神を討つて、源氏の姓を賜る事から、子の満仲が戸隠山の鬼神退治、望月の嫉妬讒言、金季の没落、五條中將の金季の幼児強奪、復讐、とこれまでの有ふれた筋を一層複雑にしたに過ぎぬものである。而も文章も拙劣で、この時代の作によくある如く、能登の國といひ、或は越の國といひ、時には能登の國三國の浦となつてゐたり、地理的知識の缺乏が屢々暴露されてゐる。それに奪はれた十三の子が、直きに子供を生んだりするのはいゝとして、戦争でも鬼神退治でも、描き方が不充分な爲に、如何にも不自然極りない感がある。尤もこの曲にては、娘の強奪が、その子をつかつて復讐するといふ良い意味に用ひられてゐる。兎に角この曲は源氏の繁昌を謳歌し、その徳を讃美してゐるのである。

【演出】初段將門の靈魂退治や、二段目の鬼神退治の場には、いろ／＼な糸操や機巧が用ひられてゐる。月を射落とすと鬼神となつて落ちるとか、その首を切ると天上するとか、首が落ちると、骸が飛起き、元の如く首がつながつて御殿に飛入るとか、老翁が来てお告げをするなどは、皆それである。けれども震動雷電といつても、果してどんな風に機巧を用ひてやつたらうか。

【原據】一二段は謡曲『鶴』『紅葉狩』等の變形で、第三段以下は前期の構成の流用である。既述の如く『六孫王應退治』の改作だらう。

【影響】後の公平物の興隆に力を與へたことはいふまでもないが、作品に對する直接の影響は思ひあたらぬ。

○四天王むしや執行

【體裁】東京帝國大學圖書館舊藏本。『新群書類從』第九に收められてゐる。額原退藏氏の舊東大本調によると、題簽の中央に『むしや執行』、その右肩に「四天王」とあり、下段に「通油町、伊勢や」の中央に、黒丸の中に「い」字が白く出てゐる。表紙は後にかへたものか、藍色にて、繪入小形十六行、丁數不明。全書はもと式亭三馬の所藏せしものと見えて、表紙の裏に左の書入がある。

「文化十五年戊寅春改表紙、本町葺所藏、三馬按薩摩座淨瑠璃の正本なるべし」

【太夫・刊年】三馬の書入れは原據が明かでないから、結局正本太夫は不明である。奥に萬治貳年亥七月吉日とある。

【形式・曲節付】六段曲、各段の首尾に定形句があり、複刻には曲節付は見えぬが、原本にもなかつたものであらう。

【梗概】初段 一條帝の御代、源頼信に仕へる四天王五人の中、三人は正づく入道の毒酒で仆れ、金時綱二人残つてゐる時、子四天王五人は、頼信及び親共の許を得て諸國修行に出る。

先づ信濃につくと淺間山にて、人を取り食ふ鬼ありとき、山深く分入つて、怪しき洞窟を見つけ、公平末春定景が飛込んで鬼を狩り出し、一方の抜け穴に出て來た所を、源二郎と一人武者が組敷いて難なく首を打つ。

二段目 尙奥深く進むと、天狗共は五人の修行ときいて彼等をためし、見込あらば秘術を教へようと待つてゐる。

五人が近づくと虚空を飛行しつゝ、劍をふらし地よりは火焰をもやす、五人は泰然として危険と戦ひつゝ進むと、二十丈計りの大蛇がゐるが、殺す要もなしと背をふみ越えてゆくと、忽然山伏が追ひ來り、我は山の主にて、大蛇にまでなつて一同を脅すが、五人は一向に恐を知らぬ人々だ、乃ち兵法の一大秘術を教へようといつて、段々と之を説き秘法の一巻をわたし、忽ち天狗に形をかへ空に上る。五人は更に奥州へ下る。

三段目 その頃伊豫土佐の主荒島判官景親は、源氏の勢をねたみ、兩國の代りに豊前豊後をのぞみ、更に九國の司たらんことを求むべく、頼信を招いて申込み、拒まれれば頼信を討たん計劃の處、頼信の伴つた金時の威勢に恐れ、景親は手出しも出來ず、その日は無事にすむ。

四段目 最初から逆心をもつてかゝりながら、頼信を討たずに歸らせたとして、景親も怒り一同の間に争が起るが、結局頼信がこの儘にてはおくまじ、一層戦ふなら一旦歸國しよう、夜にまぎれて土佐に歸る。勅命によつて、頼信は金時等五萬騎を従へて土佐に下り、景親の城を圍む。戦が始まつて、綱金時が大活躍をする。

五段目 翌日になつて、城内では金時綱を打たんと評定の處へ兩人が駈けつけて、名乗をあげて戦をいどみ、門を押破つて入るが、次郎太夫の射た矢が金時の胸を射る。つゞいて照間の矢に綱が射られる、次郎太夫照間が喜んで二人の首を取りにかゝると、二人は起き上つて、次郎太夫と照間を引さげて頼信の下に歸る。そして酒吞童子を滅して以來幾度かの功をたてながら、今遠矢にて死ぬは残念だとなげきつゝ、四天王の事を頼みて、金時は死に、又綱は十六にて死ぬ。

六段目 景親の反逆、頼信の四國征伐をきいて、四天王等は立歸つて土佐に向ふ。丁度綱金時の葬が今朝すんだ所

である。即ち綱金時が生捕にした敵の二人を利用して、我軍は戦敗れて歸京の體に見せ、捕虜を放つて城へ歸らしめ、敵をして討つて出させ、一方には四天王は長持に隠れて、寶物と見せかけて城中に運び歸らせ、機を見て討つて出で、内外狭み討つて遂に戦に勝つ。

【解説】 一二段は子四天王が信濃淺間山にて、鬼神退治をなし、天狗から兵法を教はる修行話だが、三段以下は土佐の景親の反逆、頼信の討伐、親四天王の生存者、綱金時の活躍と討死と、最後に子四天王の計略にて、景親の敗北といふ、純然たる戦物語公平物語である。最初の二段に於て、糸操は度々用ひられてゐるが、機巧が用ひられたかは疑がある。

【子四天王】 それは鬼に角、この時親四天王は皆滅びて、子四天王が漸く活躍し始めたものゝ如くである。けれども『子四天王始』といふ外題のものがあるから、それがこの前に出たのではないかとも思ふ。何れにしてもこの種の四天王物武勇物は既に數種が上演されたらうことを思はせられる。

○源平戀遺恨

【體裁】 古樞文庫藏本。半紙形十六行二十一丁、然し柱に「戀」とあり、丁附は上、下に分れ、上は十一丁、下は十丁。両面繪七あり、繪の人物は頗る小さい。初行に上記外題があり、各段の二段目、三段目などの上に、皆「源平こひのいこん」とあり、終りに刊記の下に「山本九兵衛板」とある。

【太夫・刊年】 太夫は不明ながら、『外題年鑑』には、播磨の語物の中に、この外題があげてある。恐らくこの太

夫の名が、失はれた題簽にあつたかと思はれる。刊記は奥に萬治貳年七月日とある。

【形式・曲節付】 六段曲にて、三段目の首に「さる程に」とある外、各段首に「さても其後」とあり、各段尾に形式句がある。

三段目終に御臺姫君の道行がある。曲節付は下の如くで、就中フシが多く數へられる。

フシ、三重、上、セメ、オクリ、ハツミフシ、地フシ

【梗概】 初段 「扱も其後それいんやうは天地のどく、夫婦は五りんのもとたりといへどもいんよくにおぼれぬれば國家を失ふならひあり、されは孔子のことばにも、くわんしよは楽しんでいんせず、悲しんでもやぶらすと、ししんもほめてつたへたり」、爰に人王七十代後冷泉院の御時、堀川の中將清たかとて、公卿が一人あつた。清高詩歌の道は人に越え、管弦に通じ、先帝朱雀院の御宇には、君の御寵愛禁中一であつたが、故あつて勅勘を蒙り、北山の邊に忍んでゐる。紫の方といふ姫がある、和歌をよくして美しく、父母と共に心楽しく暮す。ある年天下旱魃し、慧星が現れる。折ふし當今の御弟にて、御同腹の二の宮が參内あり、すゝめて安倍の晴明を召されると、逆臣が現れるといふ。間もなく、下野の國より、六角判官時景が叛逆を企て、八州の勢を従へ、足利城に據る故、討手を下さるべしと訴へる。即ち源義家兄弟、平藏人友重に參内を命ぜられる。そして義家には三郎をつれて討向ひ、弱年の爲義は友重等と共に京都を守れと宣旨がある。さて義家は勅命によつて出發することゝなつたが、畠山重忠や、御館の六郎もと平、權五郎の嫡子景久等は、爲義守護の爲に都に残されることとなる。

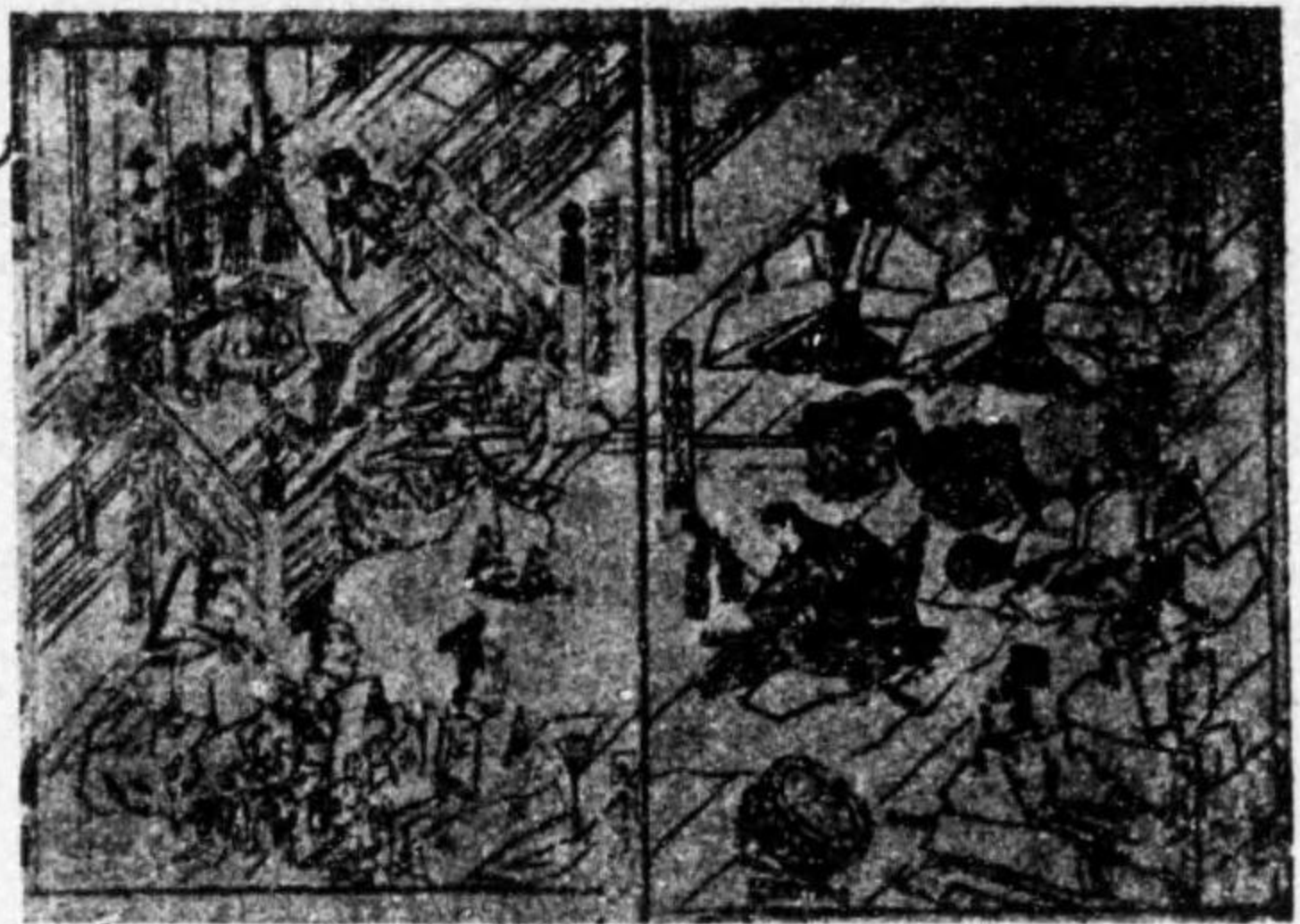
二段目 八幡太郎義家は大軍を率ゐて、治暦元年七月下旬に、都を立つて下野に攻下る。

さて詩歌に長じた二の宮親王は、一度堀川の姫君をかい間見て心を惱まし給ひ、遂に竹王丸と云ふ剛力の侍臣をして、堀川の中將邸に申込ましめ、首尾能く話が進んで、姫と比翼の契を結ばせられ、屢々中將邸へ成らせられる事となる。

扱都守護の爲に残つてゐた平友重は、堀川の姫君に戀して、心を盡したが甲斐がない折柄、二宮が姫と契を結ばれた由をきいて、悪心を起し、一層中將と姫とを強奪せんとして、北山に兵をくり出す。二宮にはこの由をきいて、義家の弟加茂冠者義宗を頼んで護つてゐると、平友重が関の聲をあげて攻寄せる。さて戦となつて、景久や重忠等は、皆功名をたて、敵の首をとる。

三段目 (いくさはまだつゞく) その中に熊野の山伏育ちの荒川入道定有が、まるで公平式の大活躍をして、平家軍から飛出して戦ふが、遂に平家方の敗戦となる。さて敗戦となると、友重は二宮から、事情を奏上されんことを恐れ、却つて二宮に反逆の心ある旨を奏し、討伐の勅を賜はらんことを奏する。かくて、源平兩家の兵を召されることゝなる。

爲義は之をきくと、二宮に行きて、早く義家を召寄せ給へと申上げる。二宮は先んじられたことを悲みながらも、一旦事實を奏上せんとされるが、義宗はそれこそ直に窮地に陥られる事だと遮つて、むしろ一度都落をすゝめる。乃ち



萬治二年刊 「源平戀遺恨」

二宮は河内國へ忍ばれ、姫君母子は清高の臣則國がお供して嵯峨の奥にかくれる。(その後は姫母子の道行になつてゐる。)

四段目 中將の臣則國は姫母子を守つてゐる中に、悪心を起して、恩賞ほしさに友重に姫の所在を報じ、姫母子を都へつれ行かうとする。(此處に姫母子の嘆の敘述が長くつゞく)。そこへ竹王丸が姫達を迎へに来て、則國等を追拂ひ、河内の二宮の許へつれゆく。二宮にはやがて、爲義義宗をつれて、熊野へ社參祈願される。——神樂を奏し祝詞を申し「神のちかひのいにしへを思ひ出れは今更にわくはうどんじんけちえんのはじめ、八さうじやうだうはりもつのおはり……」と、熊野權現の由來から説き、神下しをして、「別して當社の大權現ちかひをもらし給はずば、この度の無實の譏奏明かにはらしつゝ、自らが行末をめぐらせ給へやと肝たんだき祈り給へは有がたや山河草木しんどうして」、そこへ天女が天下り、權現がかげみにそふて助け給ふと神託を傳へる。一同は喜び宮を守つて河内へ歸る。

五段目 義家が時景を平けて歸つたところ、帝には御賞美あつて後、義家の弟加茂の冠者義宗が、二宮に従つて反逆するから、追討せよとの御沙汰がある。義家は一旦家に歸つて事實をさぐり、訴狀を書いて事實を言上する。綾小路大納言秀房はこの訴狀を尤もと思ふたが、三條の大納言行則は、義宗や二宮から、早く奏上すれば斯かる事なかるべきに、と罪を訴へる。乃ち二宮と義宗討伐の命が下る。之をきくと義宗は、凡ては佞臣の故にかうなるのだ、佞臣を除き君側を清めるには、朝敵と思はれても、一時は已むを得ないと、兵を以て河内に退く。時に治暦三年七月十三日。退京に際して、權五郎景政は、義家と義光が二宮の處へ下るが、「在京の諸侍我と思ふ人あらは出あひ、打とめ

ても見んと思はゞとめてもみたまへ」と洛中を大音聲あげて呼びつゝ下り行く。

六段目 義家河内へ下るときいて、越前の守頼景、右近の太夫勝長が之を追かけ、途中にて戰敗れて歸京する。そこへ二宮と、爲義、義宗の大軍が上る。これはもとゞ義家を助けん爲であつたが、やがて寧ろ上洛して、佞人共を滅さうといふ事となり、大軍が都へ入ると、洛中は上を下への大騒ぎで、帝は大納言季房をつれて、落ちさせ給ふ所であつたが、二宮親王が近づいて、事實を明かにしたまひ、帝に還幸を願ひ、平友重等佞臣を平けて、帝都は安全になる。曲尾「源氏の御はんぞう有りかたかりとも中々申斗はなかりけり」

【解説】 矢張この期の早い頃のものであるだけあつて、堀川中將の姫君紫の前が、既に二宮と契を結ばれてゐるに係らず、平友重が横戀慕をして、思ふにまかせぬが爲、兵を以て強奪しようとするに争は始まるのである。(その行き方は全く前期の行き方である。)そして姫母子は二宮と別れて窮地に陥らうとする所を救はれる。姫の道行、姫の母の捕はれに際しての悲、熊野の祈請など、様々な敘述があつて、既に源平の戦になつてゐるのが、義家が凱旋すると、事態は新に展開してゆく。即ち義家は二宮と弟義宗を、反逆の名の下に討たしめられることゝなるのであるが、事實を知つた義家は、むしろこの機を利用して佞臣を討滅して君側を清めようとする。かくて友重等の佞臣は滅されて、天下は安泰になるのである。要するに娘の横領物のやゝ複雑になつたものである。

△くらはま
かくれ 文あらひ

天下一井上大和少掾藤原貞則正本

【體裁】 東京帝國大學圖書館舊藏本。額原退藏氏の調査によれば、題簽の上段には、中央に、井桁に橘の紋があつ

て、左右に「ふし付、くきり」とあり、中段には、中央に大きく「文あらひ」、右側に小さく「くらまかくれ」と記し、左側に正本太夫名がある。下段に「二條通、正本屋、九兵衛」と三行書にされてゐて、黒表紙、中形、十六行繪入であつたといふ。

【太夫・刊年】題簽左側に、「天下一井上大和少掾藤原貞則口傳正本」とあり、奥に、「萬治二年九月吉日、山本九兵衛板」と見ゆ。

【形式・曲節付】六段曲にて、初行及び初段初行、二段以下の初行は次の如くなつてゐる。

ふみあらひ

初 段

段首「さてもそのうちそれてんぶつのみてハしへんのさつしんものさし……」

よりひろせつふくの事

二 段 目

くらまかくれの事

三 段 目

ふみあらひ

四 段 目

たいけつ 付 文をあらふ事

五 段 目

たゞしけさいこせんかつ丸しよち入の事

六 段 目

【挿繪】 頼原氏の挿繪調を見ると、「大將よりひろ、せんかつ丸、たゞしけ寄する所、山榊の皮賣、まかきの上、西國巡禮、竹つな文洗ひ見せる所」と記されてゐる。句切の打場によつて挿繪の數を知らうとすると、五か六か明かでない。けれども西國順禮などの出ることによつて内容を幾分うかゞへると思ふ。

【解説】 水谷不倒氏は『繪入淨瑠璃史』に於て、この正本を「謡曲『草紙洗』を翻案したものなることいふまでもなし」と断定してをられるから、例の和歌の競詠に先だつて、大伴黒主が小野小町の歌を盗み聞きして、彼女の作を『萬葉集』に載つた歌だと罵つたことから、遂に問題になり、草紙を洗つて見せると、黒主の陰謀が暴露したといふ事件を材料にしたものと思はれる。

更に大和掾即ち播磨掾の衣鉢を傳へた筑後掾の段物集『古播磨風筑後丸』を見ると、『ふみあらひ』の「巡禮めぐり」といふ一段がある。それによると、主従三人の人々は、見とがめられてはならぬと巡禮姿になり、三十三番の札所にまいり、敵を討つべき願をたて、先づ「三拾三枚の札をかきて首にかけ、市女笠にて顔を隠し、かひくしくも若君はたどろくと歩み、熊野から始めて、三十三番の美濃のたぐみまで観音めぐりをして「我等を世にたて給はれ」と願ひ、やがて鎌倉山をながめて武藏野に至つて休息することになつてゐるが、所謂黒主事件とこれが如何に結ばれてゐるのか想像を許さぬ。

尙『外題年鑑』には表具又四郎の語物として、『草紙洗小町』があげられてゐる、恐らく本曲と同物かと思ふ。

【影響】 文洗ひの件は、土佐少掾の語物『櫻小町』にも取入れてある。

△道 風 額 捕

天下一大和掾藤原貞則正本

【解説】 正本未見。水谷氏の『繪入淨瑠璃史』上巻に大和掾正本、萬治二年十月刊と記されてゐる。そしてこれも「公平本位の淨瑠璃」たることが一言述べてあるだけで他に何の手懸りもない。『外題年鑑』には加賀掾語物中に、

『小野道風類稿』といふのがある。本曲と同物だらう。

東京帝國大學圖書館舊藏本は、京都正本屋九兵衛刊の中形であつた。

○ふきあげ

江戸長門掾正本

【體裁】 東洋文庫藏本。別に稀書複製會の複製本が出来てゐる。小形十六行十四丁、挿繪は兩面六。版元は削られて不明である。柱には「上」の字が見える。

【太夫・刊年】 この正本の奥に「右之本者江戸長門掾正本ニ而令板行者也」とあるから、長門掾の語物であることは疑ないが、その「長門掾」の上に「天下一」の字がもと／＼あつたことを想像せしむるほど空白が出来てゐる。即ちこの正本は再版であるかと思はれる。長門掾は『江戸節根元集』によると、丹後掾の門下といふことになつてゐて、長門掾と稱し始めたのは、明暦二年十月十日といひ、従つて、本曲の刊年は不明ながら、版式からも萬治二年頃のものだらうといはれてゐる。今之を否定すべき材料はない。

【形式・曲節付】 六段曲にて、各段首尾に形式句があるが、曲節付はない。

【梗概】 初段 牛若は淨瑠璃姫に別れて後も、吉次の太刀をもちながら、無念ながらに、彼の召使として歩みを進め、するがの宿につくと、更に先發をして、追つけ吉次一行の到着すべきことを、きくや殿に傳へしめられる。(この段には道行風の文がしきりに現れてゐる。)

二段目 きくや殿につくと、一行は二三日飲めや歌へのもてなしを受けるが、牛若はその中に風邪にかゝる。吉次

は乃ち宿の亭主に、牛若を托してさきに旅立つ。

三段目 宿の女房は牛若を見ると、並の人ならぬを喜び、一人娘の婿にせんとするが、拒まれるなり、亭主に向つて他の來客の邪魔になるから病人をすてようといふ。亭主は吉次に對してもそれは出来ぬ、精々看病せよといふ。そして箱根權現に、百日の間牛若の病氣平癒祈願の爲に出かける。女房は亭主の言葉を容れた風をそよほひ、人をして密に牛若を海に捨てしめる。人々は氣の毒がつて、牛若を海にすてたふりにて、濱に打すて、歸る。そして百兩の謝禮をもらつて祝ふ。

四段目 牛若が吹上の濱にすてられてゐる間に、盗まれた太刀と横笛と烏帽子と扇の寶物は、いつかきくやの庫をぬけ出で、様々の姿に變化して牛若を守る。従つて恐れて牛若に近づくものなき折柄、源氏の守護神は客僧と現れて牛若を訪れ、淨瑠璃姫への文を預かつて、彼の急を傳へることになる。風の烈しき吹上の濱にて、牛若は砂中にその身を埋められてゐる。

五段目 客僧の使をうけ、牛若からの手紙を見た姫は、泣きながら冷泉と共に旅に上り、せめて一目にても牛若に遇はうとする。そして女の足では九日もかゝる道を、三日三夜にて蒲原の宿について、宿を求めるが、土地の人々は、姫を人間と思はず、富士の嶽から人取りに來た魔女かと疑ひ、恐れて宿を貸さうとせぬ。姫達は雨になやみながら、止むなく辻堂にて夜をあかす。

六段目 箱根權現の化身たる尼公が介抱する中に、牛若は一旦死んでゆく。そこへ姫は牛若をたづねて來る。尼公が二人を見つけて、牛若の死を傳へると、せめて顔だけでも見たいといふので、姫達を吹上の濱に案内する。二人は

鳩の立つた邊をさぐつて、牛若の死屍を見つけ、蘇生を天地に祈る中に、こぼれた涙が顔に落ちて、牛若は蘇生する。乃ち二人は彼を矢矧につれて歸らうとするが、牛若は始めて、平家討伐の大使を傳へて、來るべき日を約して、天狗を招きよせ、姫達をその翼にのせて三河に歸らす。牛若は即ち奥州へ下る。

【解説】 元來『十二段草子』は、その構造を考へて見ると、初段の淨瑠璃姫の出生から人物の説明と、二段以後姫と牛若との情事と、牛若が東下り以後の吹上演の出來事との三部から成つてゐると見ることが出来る。この三つの部分の中、音樂的要素に富んでゐるのは情事の部分であるが、人物の活躍、劇的動作、従つて操劇向きの内容に富んでゐるのは吹上の部分である。長門掾は即ち、久しく一般の興味であつた、而も漸く忘れられんとしてゐる『十二段草子』の吹上の部分に對して、糸操や機巧の上に新工夫をこらすとか、曲節上に新案を加へるとかして、之を復活させ、演出し直さうと試みたものであると思ふ。本曲の筋といひ、人物といひ、詞章といひ、原曲と大體同様であることから見て、さういふことが出来ると思ふのである。

【二つの疑問】 一つの疑問は最初から『十二段草子』には吹上の部分が存在してゐたかといふことである。他の疑問は殘存せる伊勢島宮内の正本『吹上秀衡入』下巻の前には、元々上巻として、本曲長門掾の『吹上』がついてでも居たのではなからうかといふ疑問である。

もつと詳しく説明すると、『十二段草子』がもとく序曲と、戀愛物語と、吹上の部分との三節から成つてゐるとすると、最初戀愛物語たる本體ばかりであつたのに、後になつて、前と後とが附加されたのではなからうか。これは大體に想像を許し得ることであるかも知れないが、この中、吹上の部分といふのは、何時頃出來たのであらうか、ひよ

つとしたら、宮内の『吹上秀衡入』や長門掾の『吹上』が出來た頃までも、其成立期が下るのではなからうか、そしてそれが出來てから『十二段草子』に喰つ付いたのではなからうかといふ疑問もどうかすると起るのである。けれど

も『十二段草子』そのもの、最も古いものが、慶長寛永の頃には、既に存在してゐたことによつても此疑は解消すべきであるが、次に述べる所の私の新發見によつても明かにそれが解決されるのである。

長門掾正本

「げ あ き ふ」

第二の疑問の起る理由を考へて見ると、長門掾の正本は萬治頃のものであるとしても、そしてそれが六段であつても、それは段切の首に於ける形式句を取去りでもするか、多少の手入れでもすれば、直ぐに二段づゝ喰付けて三段ともすることが出来る、否その儘でも、二段づゝ喰付けた方が、今の如く分けて置くより適切であるが如くにも思はれもするのである。そして全巻を通じて、柱には「上」の字が入つてゐるのである。その上、本曲には、下巻は殘存せずして、この上巻の部分、大體に宮内の正本『吹上秀衡入』につゞけ得る状態にあるのである。



又『吹上秀衡入』の方を見ると、それはお伽草子の『秀衡入』から大體に材料も詞章も借りたとしても、殘存正本は不幸にして下巻にあたり、實際柱に「下」とある四五六段のみである。この正本の外題が『吹上秀衡入』といふか

らには、上巻に相當する一二三段には、牛若の吹上に於ける『十二段草子』の後日物語、即ち吹上事件以後、牛若の東下りを書いたものから成つてゐるのではあらうが、正確に一二三段の内容を知ることが出来ないものである。けれども残存四五六段が、牛若が秀衡の館に近づき、門前に到着し、本當に秀衡入をしてからのことであるから、吹上以後それまでの場をつければいゝやうであり、大體には長門掾の『吹上』六段をつければ丁度いゝやうである。

是に於てか長門掾は宮内の正本『吹上秀衡入』の前半、吹上以後東下りの部分をかりて来て、之に手を入れて六段に分けるか、或はそのまゝ借りて来て六段にして、『吹上』と外題をつけて自分の正本として獨立させたのではなからうかといふ疑も起らないではないのである。けれども、その疑は第一に、柱に「上」とある『吹上』の曲が、柱に「下」とある『吹上秀衡入』に比べてあまりに長いこと、第二には『吹上』から『吹上秀衡入』への續き具合が面白くないことでも成立しないことであると思はれるが、更に私の発見によつて明かに解消するのである。

【新発見の點】 それでは、私の新発見の點といふのは何であるかといふと、大橋新太郎氏所藏の繪卷『上瑠璃』の「吹上」の部分である。『十二段草子』を研究すると同時に、長門掾の『吹上』と、宮内の『吹上秀衡入』との關係も知らうとして、繪卷『上瑠璃』に心を入れた私は、その第七卷最初から第十一卷の半に至る、五卷の繪卷中の本文が、殆どその儘長門掾の『吹上』に利用されてゐることを知つたのである。多少の詞句を變改した跡はあるが、改作といふには、あまりに詞が大袈裟すぎるほど、極めて僅少の省略修正をして、上演に都合よき様に、ほんの少しばかり手を入れて『吹上』が出来てゐることは、次にあげる繪卷『上瑠璃』の第七卷と、この『吹上』の最初の初行とを比較してもすぐに了解することが出来るのである。

繪卷『上瑠璃』の第七卷の最初、「吹上」に相當する分――

「扱も其後御さうしは吉次がたちをもち、四十二疋の馬をひ冠者のぶぎやうとさだまりあつまをさして下らせ給ふが、御さうしの思召すは吉次が太刀をもつ事はひとへにむねんの次第とおぼしめせとも、ちうにて心をひきかへし、ましてばし我心、是とても吉次が太刀にてあらばこそ、めいどにまします父義朝の御太刀と思ひなをし、下らばやと思召し、國のやはたを伏しおがみ、三河かきりのさかい川涙と共に打渡り、いそかせ給ふと申せとも、あかね別れの中なれば、すそはつゆ、袖は涙でうちしほれ、めいしよにては歌をよみ、舊蹟にてはしをつくり、いそがせ給へはそのけしきさらになし……」

『吹上』の初段――

「扱も其後御曹司は吉次はしやうが太刀をもちあづまをさして下らせ給ふが、御さうし思召すは、吉次が太刀をもつ事はひとへに無念の次第なり、よしそれとも力なし、吉次が太刀にてあらばこそ、めいとにまします義朝さまの太刀をかつぐと思ひなし、下らばやと思召、國の八はたを伏しおがみ、みかはかきりのさかひ川、涙と共に打わたり、いそかせ給ふと申せとも、あかねわかれの中なれば、鬚はつゆ、袖は涙に打しほれ、名所にては歌をよみ、きうせきは詩をつくり、ゆかせ給ふと申せともそのけしきもまします……」

更に繪卷第十一卷の「五輪碎」の段の前を見ると――

「……又上るりごせんの御ふみうけとり、御さうしにたてまつる、御さうしは御文うけとり、するがの圖かんばらしゆくをば涙と共にた、せたまひて、草深きをんこくへと下らせ給ふ、御さうしその心中あはれとも中々申はかりはなかりけり。」

『吹上』の末尾――

「……其後上るり御前のふみうけとりて、御さうしにたてまつる。御さうしはな、めならずと思召、はだの守りとおさめつ

それよりもかんばらしゆくをば涙と共にいでさせ給ひ、それよりもくさふかきあづまのをくへ下らせ給ふ、御さうし的心
中あはれなり共なか／＼申斗はなかりけり」

以上の首と尾との間も同様の状態である以上、長門掾の『吹上』が繪卷『上瑠璃』を改作したものであることは疑
ないが、かくして繪卷『上瑠璃』が、單なる見るものでも、讀むもののみでもなく、可なり廣く知られたものであ
つたことを知り得ると同時に、それが上演にも用ひられたことをも推定し、本曲とも密接な関係があることも知るこ
とが出来たのである。

かくして長門掾の『吹上』以前に『十二段草子』の吹上の部分が少くも慶長元和頃には存在してゐることが明かに
なり、第一の疑問は石磯球の如く消失し、第二の『吹上秀衡入』の前にあつたものは、長門掾の『吹上』その物では
なかつたことも、殆ど怪しむ餘地はなくなつたのである。『吹上秀衡入』の前には、もつと吹上事件や東下り、その
他秀衡入の序曲を材料として、『吹上秀衡入』の下巻にふさはしい短い物語があつたことを、推定すべきであると思
ふ。

【最後の問題】最後に残された問題は、それでは長門掾の『吹上』の柱に「上」の字のあるのは、何の意味かとい
ふ問題である。普通の場合に於ける如く、柱の「上」の字が上巻を意味するとすると、下巻六段があつたのか、そし
て南無右衛門の『八島』に『下り八島』六段、『上り八島』六段、即ち全曲に十二段あつたが如く、『吹上』にも十
二段あつたのであらうか、と想像して見ると、如何にもそれは考へ難いことのやうである。又『吹上』の名の下に、
『八島』そのものを復活したものとも考へ難いやうである。それでは上巻だけで、下巻はなかつたのであらうか、下

巻は「秀衡入」でも上演したのであらうか、それとも繪卷『上瑠璃』では、あの次に『五輪碎』がついてゐるから、
それを下巻にしたのであらうかといふと、それには、寛永頃なら兎も角も、萬治ともなつては、少しく長さが短いや
うであるから怪しくもある。それでは興行的に『吹上』が成功したら何とかするつもりでゐて、遂にその儘になつた
のであらうか、何かが刊行されてもその後消失したのであらうか。それとも又『吹上』の上巻の版が残つてをり、大
體それにつゞくべき『吹上秀衡入』の版もあつたので、それを上下巻として誤魔化せるといふやうな版元の考で、元
祿頃以後になつて、『吹上』を再版するに方つて、「長門掾」の上にあつた「天下」の字や版元まで削つたりして
發行したのであらうか、それとも柱の「上」の字は、要するに誤か偶然なのであらうか、結局不明ながら、「上」字
があまり上の方にあり、如何にも判じかねる點ではある。

【演出】私の最も問題にしたいのは、この曲の演出の點である。曲尾の淨瑠璃姫が天狗に乗つて歸つてゆく邊は、
勿論糸操で容易にやれるとしても、四段目に於て、紅の扇が小童に變化するとか、太刀が七尋の丈、十二本の角ある
大蛇になるとか、横笛は源氏の使の白旗に、烏帽子は烏に變つて、牛若のお伽をするとかいふ邊は、その變化する様
を見物に見せないとすれば何でもなく、唯糸操だけでやれた筈だが、兎に角舞臺を賑かにする上には、出来るだけの
工夫はされたことであらう。

【原據・影響】共に『十二段草子』の研究にゆづるべきものであるが、本曲の原據が繪卷『上瑠璃』にあることは
以上の記述によつて明かであると信ずる。殊にその中の「吹上」と「東下り」とからとつてゐる。

○箱根山合戦

天下一薩摩太夫藤原直政正本

【體裁】東北帝國大學所藏本、『金平本全集』に複製もあり。小形十六行二十丁、繪兩面八、片面一。「江戸通油町ますや板」

【太夫・作者・刊年】奥附に「右此はこね山合戦は天下一薩摩太夫藤原直政、以正本うつし令開板者也」と明記され、更に作者小島佐平次、萬治三年初春の刊記がある。この太夫は淨雲の子で、次郎右衛門といつた二代目薩摩太夫である、といふ説もある。尤藤原直政といふ名は、『聲曲類纂』所載の薩摩外記藤原直政と同一人らしくもあるが、後のは二代目で、別人らしくもあつて、未詳である。(五三三頁参照)

【形式・曲節付】六段曲、各段首尾に定形句あり、曲節付はない。

【梗概】初段 大唐岩が關の外道三面惡鬼の子、がまん、じやまん、がんまくの三人兄弟は力が強いので、虎を馴して日本に來り、立札をして角力をいどむ。天下の武將田村將軍の幕僚、高橋新左衛門の一黨が、角力の相手になることになる。さて角力をやつたが、勝負なしと定まつて、賞として相模一圓を二分して雙方が半分づゝ與へられる。

二段目 がまん一黨はこの結果、高橋を恨んで、遂に戦ふこととなる。高橋の郎黨に、九十三歳の石山かけ光、その子に十八歳の源太がある。源太は七十四人力である。(この段では兩軍各々秘策術數をめぐらすことが述べられてゐる。)

三段目 愈々戦となつて、老将石山かけ光ががんまくに殺されると、その子の源太は直ちにがんまくを打殺す。

四段目 更に戦はつゞく。がまん軍が虎を驅るに對して、高橋軍は猛犬を驅つて戦はしめる。犬が負けると石山源太は奮戦して遂に虎を殺す。けれども源太が虎を平げてゐる間に、不幸にして高橋の子しのぶの介は敵の捕虜となる。

「箱根山合戦」

四段目



五段目 高橋軍では、若君が見えぬので騒いでゐる處へ、敵方から捕虜にした證據に鎧を贈るとして使が來る。そして若君ほしくば城を開けといふ。高橋夫妻は一人子を捕はれた悲を訴へて死なうとする。源太は謀を廻らし、若君の鎧櫃を返すから、若君の望通り冥途に送つてくれと云つて、自らその中に潛み、敵陣に入つて、がまん等を脅迫して、若君を取返し、箱根の城へ歸る。

六段目 戦はまだ續き、がまん軍は更に箱根山城を攻めるが、遂に

戦ひ敗れて都にひかれ、高橋は更に伊豆駿河を恩賞される。

【解説】『咸陽宮』などに習つて、一種の外國種を少しばかり借りて來て、而も惡鬼のくせに、日本の勇者には、遂に滅されるといふ意味を明かにしたものであらう。といつて全曲が終始戦争の模様を敘するに盡きてゐるが、その間に虎や犬の格闘を見せたのは思ひつきであつた。けれども、後の時代の如く、毛物を手遣にしないとすると、演出上には相當に骨が折られたことであらう。大ざつばに演ずるとなれば、糸操でたわいもなく出來ないこともないが、見事に演ずるには苦心が必要だつたことと思ふ。

【原據】 要するに『紅葉狩』に於ける戸隠山の鬼神退治を、猛獸鬼神のすむ箱根山の鬼退治といふことにかへたまで、源太は頼光四天王の一人を見せたのであらう。

【影響】 江戸土佐少掾の正本『養老瀧』は本曲の改作である。

○公平末春いくさろん

天下一大和少掾 正本

【體裁】 東北帝國大學藏本。『新群書類從』第九にも所載。半紙形より幅廣の型、十六行、上下卷合二十一丁、繪は兩面五、片面一。内題なく、唯最初に初段とのみ下方にある點などから、他人の正本を轉用したのではないかといふ氣もする。それに三段目四段目とあつて、第三第四とない點などからも、江戸の正本を上方で使つたのではないかと思はれる。三段目以下六段目まで、各段首に一様に「公平末春軍論」の文字がある。

この書の題簽には外題が中央にあつて、その左側には「さだいしやうともふさむほんの事」と記され、外題の下方に「二條通正本屋九兵衛」と版元があり、奥にも山本九兵衛とある。

東北帝國大學本と『新群書類從』所載曲の原本とは同一のものである。

【太夫・刊年】 正本太夫の名は何處にも文字で記されてはゐないが、東北帝國大學本の外題の上には、井桁に橋の紋があるから、井上大和掾がこの本を正本として用ひたことは推定出来る。江戸の太夫が別に之を用ひたらしいが證據は明かでない。奥に萬治三年三月の刊記がある。

【形式・曲節付】 六段曲にて、初段には定形の序の句について「それ一やうの春なれば……」と序の文がある。

他の段首段尾には皆定形句がある。

題簽の上部には「ふし付くきり」の文字があるが、僅に三重と多少の「フシ」があるのみで、他は見えぬ。五段目の中間に、竹ちの源太が都の様子をさぐりに上る所に、聊か道行らしいものがある。

第四段の終にも又曲尾にも「それより天下すなをにして國土豊かに富榮え千秋萬歳源氏愈繁昌めでたき共なか〜申斗はなかりけり」とあつて、源氏讚美の句が次第に發達して來る跡が見える。

【梗概】 初段 永承二年正月、右大將頼義の臣、渡邊左衛門竹綱、坂田の平太公平、卜部の藏人末春、たけちの源太やすもと、三浦の和田左衛門爲宗等四天王が賀詞を述べる。

播磨の國主立花の左大將ともふさは、妹旭の前が二の宮を誕生して后になつたので、先腹の一宮を失ひ、二宮を位につかせんとして、郎黨新藤左衛門行忠に謀る。新藤は乃ち、菊池の彈正は、叔父やす村を頼信に滅されて、恨をもつてゐるから、九州にて彈正に旗を上げさせ、頼義が四天王を遣つて征伐させる留守に、一宮御謀叛の由を讒奏すると、訖度官は御勘氣にあはれる。頼義がそれに同情すれば、朝敵だといつて頼義を討ち、四天王不在の間に頼義を失へば萬事意の如くなるべしといふ。左大將は喜んで菊池を招き、所存を明かす。菊池は九州に歸り、準備して敵の攻め來るをまつ。頼義は源太と爲宗に末春をつけて攻めさせることとなるが、公平はいつも自分が大將にならぬのが不平である。末春と公平との間に口論が起る。我儘な公平はかまはず征伐に向はんとするを竹綱が制止し、更に頼義が公平には京洛守護の重役を托することとなる。公平は快く末春等を送る。

二段目 一宮は御繼母の讒が烈しくて一間に押込られ給ふ。そこへ堀川のさいしやうと洞院の中將が忍入り、左大

將が計つて、御身を今に遠島へ流すか、殺すかするから、一書を以て御門に宛を訴へるか、忍んで頼義に依りたまへといふが、一宮は自分がさういふ事をしては、后が氣の毒な目にあはれることを思ひ、自らの死を以て孝行しようとし、自害を計り給ふ。けれどもそれを強ひて止められ、已むなく密に頼義の館に行つて、一切の事情を明かされると頼義は之も讒者の仕業だから、直ぐ明白になるゆゑ、心安く思召せと慰め奉るが、繼母と繼子との間柄のあさましさに驚く。

左大將は、事が思ひ通りに運んだので、頼義及び一宮を討たうとするが、公平と竹綱が都に残つてゐるので、新藤をして二人の間を裂かしめようとする。そこで左大將は、新藤の従弟で頼義方の田林源内を招き事情をあかすと、田林は直に承知して公平を訪ひ、九州征伐の大將が末春に定つたのは、竹綱の謀だと讒する。公平はこれを聞くと、怒つて、竹綱と刺ちがへて死なうとし、その意味の手紙を竹綱に送る。ところが、田林は竹綱の所へ来て、また公平の悪口をする。竹綱は始めて、之こそ田林の讒言である事を感じ、彼に一筆かゝせ、次で彼の首を取つて公平を訪れる。そして一書を見せ、更に田林の首を見せると、公平は彼に謀られたことを知つて、竹綱の智に感心し頭を下げる。

三段目 田林源内が殺されたと聞くや、左大將友房は直に参内して、一宮に加擔し禁裡を傾けようとする頼義討伐の勅を仰ぐ。御門は、父に敵する子を匿ふのみか、軍勢を催すとは奇怪なりとて、頼義追伐の宣言を下し給ふ。これを聞くと頼義は、自分は犯した罪もないのに逆臣の沙汰を蒙る、數通の誓紙を以て申開きをしようと言ふが、竹綱は一宮を御匿ひ申してゐる以上、御門の逆鱗は止むまい、といつて御門に弓を引くのは恐れ多いから、一旦退かうと云

ふ。公平は、今退いては四天王の威力にかゝはるし、源家の名に瑕がつくから、死んでも引かぬといふ。それでは、一度左大將の軍を蹴散らしてから退かう、といふ事になつて、戰の用意をする。左大將は大軍を以て攻寄せる。この

時、一人武者の子平井の市丸が、主従六騎にて丹波から駆つけ、名乗をあげて敵を招く。すると敵の中から玉井の太郎が「先年わが父を御ぶんが親の一人武者に討せ無念いまにたへやらす」親の仇、といつて飛出して来て、市丸と戦ふ。この二人の戰を敵味方とも見物してゐる中に、玉井の太郎は首を打落され、續いてその弟の二郎と三郎とが出るが、皆市丸のためにやられる。ついで敵が迫るので、公平が顔を出すと、それつゝとばかりに敵はちり／＼に退く。

四段目 公平はやがて敵を誘ふために、偽つて平井の市丸の叔父に扮して、來るものを片はしから打倒し、首をねぢぬき、遂に新藤左衛門の首までかき落し、頼義竹綱も共一度多田の庄へ退く。後から雲霞の如く追かけて來る敵は、公平が大木をねぢきつて向ふと、蜘蛛の子を散らすが如く逃げる。



（藏大帝北東）「論さくい春末平公」

やがて多田の庄に着いて後、頼義は熱を病み、一同は醫藥は勿論、祈禱等いろ／＼手をつくすが、次第に弱つてゆく。愈々臨終が近づくと、頼義は子の八幡に對ひ、「いかに八幡汝おさなくとも、父が遺言たしかに聞き、官に忠孝

率り、四天王が諫言は、父が言ふぞと心得て、少もそむくこと勿れ」といひ、やがて程なく死ぬ。一宮が身の不運を嘆かせ給ふのを見て、鬼をも欺く人々も泣き悲しむ。けれども熱病で死んだのだからとて、又薬を飲ませ祈禱をしりして精を盡すと、頼義は不思議に蘇る。——「源家の繁昌末永く、萬歳樂は是成べし扱もめでたや」と上下萬民をしなければさゞめきわたり見へにけり、一宮若宮の御喜又四天王の心の内うれしき共中々申斗はなかりけり」で終る。

五段目 この時九州討伐隊が歸る。折しも伊豆の住人といのなりやすは、左大將友房のその後の驕慢を訴へ、在京の人々は、皆之を仆さん時をまつてゐると通ずる。そこで竹知の源太に都の様をさぐらせる。

源太が山伏姿にての上洛は、道行文になつてゐる。

源太が神主國長の家に頼つてゐる中に、國長は敵友房に内通する。そして源太には敵の大將友房を討たせようといつて、大般若の箱にかゞませて源太を友房の家へつれゆく。そして偽つて桂川へ投げようとするのを、源太は気づいて、箱の中から飛出し、國長を打殺して逃る。

その中に頼義勢は、先んずれば人を制すると、どん／＼都に攻入り、途にて源太から都の様子をきく。

六段目 頼義都に近づいて、攻入る前に、先づ爲宗を禁裡に遣し、一宮の罪なき事と友房の悪逆を訴へるが、頼義は許されても一宮は許されぬとの事に、やむなく都に攻入る。之をきくと友房の兵士どもは頼義の軍と戦ふを欲せず、皆逃出す。友房は已むなく君を山門におつれ申す。頼義の軍は之を見て追かけると、友房等は君の輿を打すてて逃亡する。頼義と一宮とは、少しも逆心なきことを奏上し、恭しく君を禁裡に還し奉る。その二心なき忠誠さ例へんにもなく、そこへ公平竹綱等は友房を捕へてかけつける。かくて御代は再び安穩になる。

【解説】 立花左大將友房が妹の蒙る君寵を利用して、二宮を即位させようとし、讒言して、一宮と頼義を逆臣扱にしたのが、時至つて事情明白となり、一陽來復するまでの、頼義の四天王の勞苦と敵の陰謀と、不敬の事情などを敘述したもので、陰謀謀反物語である。最後に頼義と一宮の誠忠なる態度の明かに示されてゐる模様、竹綱と公平の脱合が解け合ふ模様とが、面白く敘述されてをり、外題の公平末春の戦論は、一段目に於て、唯形ばかり敘されてゐるのみである。

○天狗羽討

天下一出羽掾藤原信勝正本

【體裁】 東北帝國大學藏本。半紙形十六行上下合二十丁半、繪は兩面六。題簽の上部には、丸に笹の葉を三方から集めた『常陸坊海尊』にあると同一の出羽掾の紋所を中央にして、「ふし付、句きり」とあり、外題の左側には「みちともむほん井根來合戦」とあり、下段には正本屋九兵衛の版元名がある。

【太夫・刊年】 東北帝國大學本の奥には、萬治三年卯月の刊記があり、太夫名も紋所から察するより外なく、而もその紋所は加賀掾の紋所と頗る似たものであるが、それが出羽掾であることを裏書するものは、『輸入淨瑠璃史』上巻所載の表紙である。それには題の外題の左側に、明かに「天下一出羽掾藤原信勝正本」と記されてゐるのである。けれども、此所に一寸注意すべきことは、『輸入淨瑠璃史』の題簽の下方には、版元が九兵衛でなくて、二條通正本屋喜右衛門とあり、また奥にある刊記は萬治三庚子三月上旬となつてゐることである。これで見ると、出羽掾と明記された方は、三月の刊本、東北帝國大學本は四月の刊本で、少くとも兩者の間に發行月の差があり、従つて兩者が

別本であることは、繪の筆致は似て居ながら、繪その物の趣向が全く異つてゐることも知り得るのである。けれども文章と内容は全く同一である。

【形式・曲節付】 六段曲にて、各段首尾に形式句があるが、初段の首には形式句なく、他の各段は皆「去程に」で始まつてゐる。そこに江戸正本と趣の異つたものがあるらしくもあるが、各段の段付が、第一第二となつてゐないで、一段二段となつてゐる所から見ると、その頃はまだかうする習が京版にもあつたのか。それとも江戸の太夫の爲に出来た正本を、その儘出羽の正本として利用したものかとも思はれるが、出羽の正本が一ヶ月前の三月刊であるから、江戸より前に出羽が語つたものか。曲節付は東北帝國大學蔵九兵衛版には、「ふし付、句きり」とありながら、本文にはそれらしいものなく、唯三重だけが見られる。「新撰書類從」所收のものは三月上旬版で「繪入淨瑠璃史」記述のと同本である。

【舊東大本】 頼原退藏氏の東大舊圖書館本調によると、東大に所蔵されてゐたものは、題簽に「天狗羽討」、その左側に「天下一出羽掾藤原信勝正本」とあり、下段には「二條通、正本屋、喜右衛門」と三行書にされ、赤表紙中形、繪入十六行本、「萬治三庚子三月上旬」とあつたといへば、これが恐らく「繪入淨瑠璃史」の種本であつたことと信ずる。

【梗概】 初段 右大将伊豫守源頼義が、一日酒宴の席にて、珍談はないかといふと、郎等の一人六郎末重が、いまくまの大臣殿が近頃鞍馬へ参詣して、二丈ばかりの悪鬼に出遇ひ、歸つて三日目に死んだといふ話をすると、之をきいた坂田の金吉は、魔除の神である鞍馬の毘沙門に悪鬼の住むといふは不審だと言ひ、遂に口論の末、互に刺さんと

したが竹綱が仲裁する。やがて金吉は、眞否を正すべく、頼義の許諾を得て鞍馬に乗込むと、さすがに馬が進まぬ。乃ち馬を乗捨て、拜殿に進み、化物に呼びかけると、目前に二丈許りの熊の如きものが現れる。それを飛越えようと、更に童子が出て、汝如きが来る所にあらずと罵り、天狗となつて睨みつける。金吉笑つて打つてかゝつて、片羽を討落せば、天狗は虚空に飛去る。

二段 金吉が持歸つた羽を見ると、天狗の羽に相違ない。處が頼光の時代に、竹綱の父渡邊綱が、羅生門にて鬼の腕を切つて、三日目に取かへされた例もあるので、金吉は天狗の羽を石櫃に入れて守つてゐると、三日目の夕方片羽の薫が飛來り、忽ち童子と現じ、やがて天狗となつて、片羽を返せといつて迫る。長問答の後、金吉は太刀をぬいて追拂ふ。

此時奥州より阿倍貞任宗任が謀叛し、八幡太郎が大将として、金吉權五郎、竹ちの源太、末重等が討伐に向ふべく勢揃する。

三段 嘗て謀叛を企て、四天王の爲に敗られた四國の大将、阿波の道房の子道友は、現在都には、四天王の一人竹綱が残つてゐるのみだから、此時こそと、根來の悪僧道膳にすゝめられて、都に攻上る。源氏方では衆寡敵せず、一旦都を落ちる中、頼義の御臺は敵に生捕られ



天狗羽討 (東北帝大蔵)

る。村井ともの介は頼義の身替として城に残り、その間に頼義はからめ手から逃れる。友の介は頼義になりすまして敵二十七騎を切り伏せ太刀を口にして死ぬ。

四段 竹綱は頼義を肩にかけて逃げ出し、若狭の國小濱の浦に着き、更に危険を恐れて山中奥深く忍び、樵夫の小舎の「柴のあみ戸を押しらきて」ひそみ、見知らぬ老人のはこぶ握飯にて、日を送つてゐる。

一方、頼義の御臺所は、籠舎の中で安産するが、生れた男子は道友の爲に惨殺される。御臺も首さしのべて討たれりと、ふしぎや、むくろは忽ちおき上り、敵の刀を奪ひとつて首討落し、其場で敵を討つ。

五段 頼義は竹綱に助けられ、山傳ひに叡山に惠慶座主をたづねてゆく。(此邊道行らしい詞章)途中で山賊に遇つては之を斬り、牛をひく童子に遇つては、慈悲物語や比叡山の由来をきく。(此處は節事になつてゐる)やがて御臺の死を聞き、悲の中に東山三井寺の法師軍を以て、武運の回復を計る處へ、末重金吉三浦竹ち等がかけつける。

六段 舞臺の上の人形の戦、人形遣を眼中において書かれたる大将同士の一騎打の戦争の場である。中でも根來軍の總大將道友が、槽の上から金吉の勇敢な働を見て感心し、「先程のはたらきにてさぞ咽かはき候らはめ、酒をのんでいさまれよ」とて、酒をはこばせる。すると金吉も「扱も唐のかんやうきうより、まだ大心成やつめかな……と舌ぶりして甲をぬぎたんぶとうけさりと干す、あら過分や、心勇み立て候、さらばおしやくへさし申さん……」と悠々として敵に傳言するなど、まことに芝居らしい趣が見える。かくて段々に戦がつゞいて、最後に道友を生捕にする——「源氏の御代すゑ繁昌、かんせぬものこそなかりけり」

【解説】「繪入淨瑠璃史」にも述べてあるやうに、第一段だけは全く謡曲「羅生門」の焼直しである。鬼の腕を取

つて來る代りに天狗の片羽をとつて來る、綱が金吉(後の公平である)になつてゐるといふ位の差だけであるが、それは本曲の第一段と第二段前半に過ぎない。「繪入淨瑠璃史」には本曲をそれだけのものとし、又あとで、天狗が羽を取返しに來た、「羅生門」風に取返して行くと記してあるが、よく見ると、金吉は遂にその羽を取返されてはゐない。のみならず、第二段後半には、貞任宗任の征伐の話があり、第三段から第六段に至る四段即ち本曲の大部分は、第一、二段とは何の関係もないもので、阿波の道友が根來の悪僧と共に、都から頼義軍を追拂ひ、頼義四天王等が再び復活する戦争物語である。第四段に於て頗る變つてゐるのは、頼義の御臺の籠舎内のお産である。お産の場の如きものを此頃既に取り入れたことは、演出上から見ても注目すべきであらう。

【演出】演出上に於ては、天狗の出現に糸操應用は當然だが、その天狗が熊になつたり、童子になつたり、御臺の死骸が起き上つて、太刀を奪ひ取つて敵の首を討つたりするあたりには、糸操の外に何かの工夫はなかつたであらうか。巧妙にといふよりも、少々の無理はあつても、糸操だけであつたらうか、そこに多少の疑問があると思ふ。恐らく機巧が用ひられたらう。

【原據】やはり酒吞童子物語である。

○よろひがへ

杉山丹後掾正本(?)

【證載】東京帝國大學圖書館藏本。中形十六行十八丁。丁附は上下巻に分れてをり、繪は兩面四、片面二。山本九兵衛版。

【太夫・刊年】 東京帝國大學圖書館本には、太夫の名はないが、『色道大鑑』には、杉山七郎左衛門が瀧野直傳の本節を語つたことを傳へ、『鸚鵡が袖』には「鑑がへ」が所謂五部の本節の一つであることを述べてゐる。曲風内容からも、本曲の原本は、杉山の語物であるらしく思はれる。

種彦は「よろひがへ」に繪入細字萬治二年印本のあつたことを例の『浄瑠璃目録』に記してゐるが、それは事實であつたかも知れぬ。まだそれよりも早い版があつたかも知れぬ。けれども今は矢張此正本の奥にある如く、萬治三年五月の刊としておく。

【形式・曲節付】 六段曲にて、首尾に定形句あり、曲節付はない。五段目に「よろひかへ、みちゆき」とある。「源氏の由來」の曲尾が「唯およろこび申ばかりはなかりけり」と有ふれた結びになつてゐるのに、此曲の結尾が「源氏の御代の末繁昌めでたや」と感ぜぬものこそなかりけれ」で終つてゐることも、後の曲尾の結文に範を示すものとして、又四段目の起句が、説經物風であることにも心がひかれる。

【梗概】 初段 安藝周防長門三國の主を周防の判官もりといひ、み臺は藤原權中納言おき家の姫君である。その後見は兵衛尉かねむらと坂田刑部ともはるの二人がある。守俊子なく、「我國の主として國家をおさめ、身を立つるも、子孫の繁昌をこそせんが爲なり、子なきものは父母養育の恩も知らず、我は如何なる罪業にや……」と嘆き、御臺の勸によつて中山の觀世音に申子の祈請をする。

二段目 やがて御臺は姫を生む。萬壽の姫といふ。姫七歳の時判官は病の床につき、兼村と友春を招き、兼村には御臺と姫を委託し、姫が十歳になつたら、婿を定めよと遺言し、友春には三ヶ國を預け、五十三歳で死ぬ。

友春は忠臣であるが、兼村はやがて友春を討つて三國横領を計り、友春及び守俊の臣鬼一丸を滅す。



(藏大東)

三 段 目 兼村遂に都に上り、主人の遺言に従ふて忠節を盡したと偽り、三國を賜はる。そして主人の御臺を若狭と名づけ、萬壽の姫を鶴の前と呼んで、己に仕へしめ、母子を虐待し幽閉する。萬壽の姫のめいとは兼村に反抗して追放される。やがて兼村は邸宅を嫡子太郎に譲り、己は主人の館に移つて榮華にふける。越後の直井の次郎は、鎧商人となつて諸國をめぐる中に、兼村の館へ来る。そして鎧を兼村に賣らうとして、今は幽閉されてゐる守俊の御臺と鎧とを交換する。御臺は姫との別れに臨んで悲しむこと限りがない。

四 段 目 兼村の館に残された萬壽の姫は虐待を受けながら、いつか

十三歳になる。漸く天成の美が現れる。折柄兼村のこの姫は十六歳になつて、備前の藏人殿へ嫁ぐ時、萬壽の姫をも侍女として連れてゆく。處が藏人は萬壽姫を戀し、正妻の妬を恐れながら、密に萬壽姫に手紙を送るが、萬壽は怒つ

て其手紙を捨てる。邪怪な女房さぬきの前は、萬壽が捨てた手紙を拾ふて若御臺へ訴へ、萬壽は夫婦の間を割かうとしてゐると讒する。

中山の観音の申子である萬壽の姫は、遂に兼村の處で水仕に使はれ、たまらなくなつて、観音に救を求めると、それを知らず兼村は萬壽をいよ／＼苦しめる。かくて姫は「まことなきうき世の中のいつはりを知れとは何のむくひなるらん」と歌ひ、打擲されて十三歳で死ぬ。

姫の死體は川原の叢にすてられるが、觀世音の申子だといふので、狐狼野干も却つて之を守護する。姫は死後三日にして蘇生する。

兼村から放逐された姫のめとは、姫が死骸となつてこがねが窪に棄てられたときいて、探しに行つて、嘆く中に姫が蘇へる。折柄中山寺の別當は、靈夢を蒙つて、こがねが窪に法華經の八の卷を捜しに来て、二人の姿を見つけ、「定業ならねばよみがへらせ給ひて候、救はせ給へ」といつて、宿坊から戸板を取りよせて、姫をつれて歸る。

五段目 姫は心身の恢復した後、十三の春（蟲の音との關係からも少し無理があるが）髪をそり、めのも姫にまね、二人が諸國行脚の比丘尼となつて、春の中頃にも紫を立つて、五月に都東山の清水寺につく。母に逢はせてたべと祈り、「清水の濁らぬ水に旅寝して深くぞいのる親にあふほと」と詠すると、その夜の夢に内陣の内より「戀しくば尋ねても行け打越へてのちに逢ふ瀬のたらしちねの夢」と聲がする。夢解きに占はせると、打越へて後とは越後へ訪ねてゆけといふのだといふ。

これから道行文があつて、二人は夏の頃越後直井の浦につく。

六段目 うまく母子は再會する。姫は十六の年まで直井の次郎の家に世話になる。其頃八幡太郎義家は安倍貞任を討ち平け、恩賞として奥州五十四郡と北陸道七ヶ國を賜はり、越後の國に住する。

まだ妻のない義家は、直井の次郎が美女を拾ふた話をきいて召出す。「なをいあまりの嬉しさに、あはて、お前を罷立ちはしるとて袴のそばにけとんでかつばとまらび烏帽子落す、かみをはじめ御前なりし人々一度にとつと笑はれる。なをいあまり面目なま嬉しき恥しさに烏帽子かへて宿所に歸り、姫を連れてゆき、いよ／＼姫は義家の妻となつて、やがてこれまでの経歴を物語る。義家は怒つて兼村を都へ招きよせ、宮中にて裸にして鬼にさらはせる。やがて義家は周防に至り、兼村一門を追放し、さぬきの局を引さき、賞罰を明かにする。姫に一人の子があつた、それが六條の判官爲義である。——「源氏の御代の末繁昌めでたや／＼と感ぜぬものこそなかりけれ」

【解説】 お家横領、主人の妻子の虐待酷使賣買について、やがてその報復といふことは、中世以來の文學に屢々見られた題材である。四段目の起句の如き「さるほどに物のあはれを止めしは、つくし周防の國におはします萬壽の姫に物のあはれを止めたり」といふ文章は、如何にも説經物や創始期の淨瑠璃めいて、之等の點からも何となく丹後の正本であつただらうことがうかゞはれる。それに材料といひ、萬壽の姫の名さへが、さんせう太夫の安壽姫を思はしめるものがあり、筑紫の周防などいふ地理に暗いことも面白く、五段六段に和歌を用ふること三回に及んでゐることも、前期の曲らしいことを裏書してゐるやうでもある。

それにしても四段目に於て、狐狼野干を澤山出して來たりしたことは、糸操を盛に用ひた丹後にふさはしく、観音の力をかりて姫を蘇生せしめるなどは、佛の力を示し、信仰に資すること大なるものがあつたらうし、姫に對する侍

女の忠節と愛情と、母子の離別の悲などは、此曲を相當に情味ある、柔かなものたらしめてゐるが、複雑にはなつてゐても、題材の古い扱ひに物足らぬものがある。そこにも此作品が此期以前のものたることを思はしめるものがある。要するに外題の「よろひがへ」の意味は、鎧と鎧とを交換するのではなくして、鎧と女とを交換することで、一種の人買物語である。

【影響】 高野正巳氏の研究によると、之が延寶三年霜月、江戸市村座にて上演されてゐることも、役者繪番附の看板に「鎧替三番續仕候」とあるによつて明かである。

【原據】 お伽草子「まんじゆのまへ」を脚色したものである。

○四天王頼光勇力諍

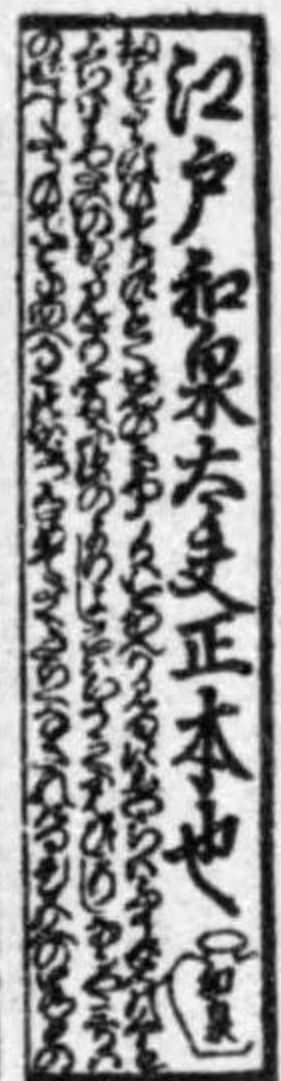
江戸和泉太夫正本

表紙は源太夫正本、中は和泉太夫正本



(蔵館書圖學大區帝京東)

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。小形十六行、二十丁半にて、柱に「天」の字あり、繪は兩面六、片面二。和泉太夫正本の慣例に従つて、開卷第一行に「江戸和泉太夫正本也」とあり、其上に「天下」の文字はない。奥にも「右者江戸和泉太夫直之以正本寫之令開板者也、御成町又右衛門板」とある。そして何處にも「天下」の文字は入れてないが萬治版である。ところが此書の表紙の題簽には上段に「四天王」とあり、外題の左側には「江戸とらや源太夫正



頼光勇力諍 初丁 終丁

本」、下段には大傳馬、三丁目とあり、其町名と丁目との間に、鱗形やの商標があつて、其下に「屋」の字がある。即ち太夫及び版元に ついては次の如きことが起るのである。

【太夫・刊年】 既記の如く、開卷第一行の正本太夫と、題簽の正本太夫は、何故にちがふのであらうか。表紙を見ると、菊の紋が菱形の框模様の中に刷り出されてゐる鱗形屋の製本は、もつと後の様式であるやうに思はれるのである。して見ると元々和泉太夫の正本であつたものが、版木が又右衛門の手から鱗形屋に移つて、其儘再版として印刷され、虎屋源太夫が此曲を後に上演の際虎屋の正本らしい顔で發行されたものと見外はないのである。それとも古本屋が別の表紙をとりつけたものであらうか。そして後の解説の處でも述べるが、此曲と頼光とは頗る縁の少ないもので、頼義が頼光同様な戦をしたといふに過ぎぬから、此「頼光勇力諍」の外題は、幾ら頭に「四天王」の字をかぶせても無理な題である。是に於てか「輸入淨瑠璃史」の著者は、「表紙だけは後の版式にして、眞の外題は知るべからず、殊に内容は頼義以下子四天王の世界を寫したる淨瑠璃なれば、表紙の外題は全く別の事柄なり」とさへいつてゐるのである。或はひよつとすると、最初から「頼義北國落」とでもいつたものか、又は此外題と内容とが絶対に無關係ともいへぬから、矢張此外題通りであつたのか、未詳である。

兎に角内容の終りに記された刊年は「萬治三歲六月吉日」とあつて、其前の行に江戸和泉太夫正本を以て開版すると記されてゐる。そして太夫名の上に「天下」の字の見えぬことから見ると、此頃はまださうする風もあつたと見

える。

【形式・曲節付】 六段曲にて各段首尾には定形句がある。曲節付はない。

【梗概】 初段 都の鎮護に任じてゐる源頼義は、まだ若年で物足らぬといふので、帝は橘師氏を招いて、二人で鎮護の任に當らしめられる。處が師氏は人物が面白くない。先づ頼義が彼を招いたが、師氏は顔を出さないで、頼義の方から訪問すると、師氏は盛に威張りちらし、お前の方では綱、公時、定光、末武、保昌の五人が相ついで死んだので、もう駄目だらうといつて、自分の方の四天王を出して、頻りに威しつける。頼義方の子四天王の一人竹綱が、障子の蔭から聞いて齒がみをしてゐる。要するに兩將對面の場である。

二段目 師氏は自己の勢力を擴めるについて、頼義が邪魔でたまらないので、播磨の前司國頼、物井兵庫道清と計つて頼義を滅さうとする。即ち先づ頼義が逆心を起し、宮中に攻入らうとすると讒して、兵を以て宮城を護る。頼義方では之を聞いてその用意をする。

三段目 處が讒せられたが爲に、頼義は勅勅を蒙ることゝなつて、僅に六十五騎を率ゐて、一旦都を落ち北陸道に逃れようとする。之を知つた師氏は六萬の兵を以て追跡し、長坂の麓で追つく。一戦のあとで源氏方に残るものは頼義と子四天王等の五騎になつた。

頼義は失望して自刃せんとするが、竹綱公平等は之を押止めて、先將軍頼光は、濱松の戦にて、我々の親四人を以て、六萬の敵を破つた。今我々は五人である、そして同じ六萬の敵にあたるのだ、必勝は疑ないといつて、保昌の子平井の一人武者清春、末武の嫡男占部の民部季宗、定光の子碓氷の平馬定兼等が先づ突貫し、三田の冠者竹綱と坂田

の公平とが頼義を護りつゝ、戦ふて、だん／＼と敵の四天王を破る。

四段目 かくて頼義等六人は北陸道へ落のび、若狭の小浜について、逸見の判官忠光に頼る。

八月十五夜のことである。頼義始め一同は今昔の感にたへぬ。凡ては前世の因果と思ひながらも、冤罪を訴へんとして、頼義は訴狀を認め、公平と一人武者清春を使として、四條の法印を訪れしめる。ところが法印は既に師氏に買収されてゐて、二人を陥れて、大般若經の箱に忍ばせ、宮中に送るといつて、師氏の邸に送る。二人は危い處で、箱から飛出して、縦横無盡に敵を切りまくつて難を免れ、法印を八つ裂きにして若狭に逃げ歸る。

五段目 竹綱の策によつて、頼義は勿論子四天王等は謀叛人であると知れ、悉く逸見判官が討取つたことにして、面皮をはぎとつた偽首と、所持品とを師氏の前へ持出す。師氏は喜んで判官を賞する。

師氏は邪魔物がなくなつて、次第に専横暴虐を逞うする。人々は彼を嫌忌して頼義の昔を慕ふ。頼義は乃ち都に攻上らうとするが、如何にせん、まだ勅勅の身である。上洛の途中、師氏の暴虐によつて落ぶれ、今は行脚僧となつてゐる大納言師房に遇ひ、勅勅お許の取もちを師房にたのむ。

六段目 待つてゐる處へ、大納言は頼義の勅勅御免、征夷將軍任命の輪旨をもちつて来る。頼義の旗上をきいて四方から雲霞の如く應ずる。源氏軍は都に攻上つて、公平、竹綱は師氏の邸に討入り、門を叩破つて師氏の首を打落す。

【解説】 結局橘氏と源氏との争に、一時源氏が衰へたが盛り返すといふ、戦争物に過ぎず、殊に戦争描寫のうまいといふ以外に殆ど何物をも見出し得ない。

外題の因つて来る處を考へて見ると、頼義が先代頼光の勇力に比するに足る如き戦をしたといふのであるらしい。頼光と頼義が争ふ筈もなければ、頼光が誰かと勇力を争つたといふのでもない。それに頼光の四天王等は皆死んでるといふのだから、所謂子四天王物語であり、純粹な公平物である。如何にも無理な外題である。だから大夫調べの處で述べたやうに、此題はあとでつけた、別物ではないかといふ議論も起つて来るのである。

【原據】 此作と殆ど同一の内容であり、同一構造である改作に「頼義北國落掛物揃」があるから、或は最初曲の外題を「頼義北國落」といつたのかも知れない。今の外題よりか、その方が遙に穩當であるやうに思ふ。

此曲中に見られる大般若箱の應用は、既に「宇治の姫切」にも用ゐられてゐるし、又「公平末春軍論」にも現れてゐる。

【影響】 既報の如く「頼義北國落掛物揃」はこの曲の改作で、第四段の公平と一人武者とが、四條の法印訪問の條を省いて、その代りに「掛物揃」の場を添へたのが改作物である。更に本曲の改作「頼義北國落掛物揃」中から、終の五段六段を取去つたものが、或は近松門左衛門作といはれる元祿十四年九月上演の「大掛物十幅一對付北國落」である。

〇くわてき舟軍

【體裁】 東京帝國大學圖書館藏本。半紙形十六行十七丁、三段終を境として、丁附が上下二卷に分れ、一冊に製本されてゐる。繪は兩面五、版元は不明である。けれども水谷不倒氏の論文「上方に於ける劇文學の版元」によると、

版元は正本屋山本九兵衛である。

【大夫・刊年】 大夫名は明かでないが、奥に萬治三年七月の刊記がある。

【形式・曲節付】 六段曲、各段首尾に定形句あり、曲節付は少しくあり、左の如きが見出される。

地、コトバ、フシ、ヲクリ、三重、イロフシ、ウタヒフシ、セメ、下フシ

【梗概】 初段 玄宗皇帝の時、將軍の一人にしばとん大臣がある。其子を左將軍くわてき、右將軍をはくさいといふ。或時しばとんが上臈達を集め、二分して、それ／＼に左右の將軍を將とし、味方には梅の枝を、敵軍には櫻の枝をもたせ、庭前にて軍法の稽古をなし、皇帝に軍略を教へてゐる時、不思議や、雲の中から白馬が飛下りて、「海の彼方なるたにかい國にしいふといふ兄弟があつて、その身通力自在、今にも來つて君の世を傾ける」と告げる。皇帝が白樂天に占はせると、それは日本の國の事だ。日本に大明神といふ神がある。先年死んだ皇帝の寵姫楊貴妃は此大明神の化身だ。貴妃の亡魂が來つて禍するのだ。急ぎ之を討滅すがよいとの事で、しばとんが征討將軍に任せられる。しばとんは即ち例へ魂魄惡鬼となつても、しいふを滅さすにはおかぬと誓ふ。

二段目 征討將軍は不幸にして、風邪がもとで死ぬことゝなるが、臨終の床へ玄宗皇帝を招いて、遺言し、討伐の事は二子に委託し、皇帝は今なほ楊貴妃を慕つてゐるだらうといつて、玄宗に反魂香を贈る。やがて大とんの靈は薦となつて飛び來つて、「今は日本の臣となり、愛宕山の太郎坊と契りをなし、大天狗となつて大千世界を日々夜々に飛行して通力自在なりければ、行末なをも守るべきといふやいなや、姿をかへ一丈餘りの天狗となつて雲にのつて上り給ふ」のである。二子は忽ち一萬隻の船を造つて戦の用意をする。

三段目 たんかい國の主しいふは之を聞くと、弟のいう及び臣共を近づけ、三韓の皇帝が我を攻めんとして、船といふものを造り、五十萬の兵を以て、おうがうの海を渡るといふ話だ。我は通力自在なれば敵を攻めたいが、いわてき兄弟の智略を恐れて時をまつてゐる、如何にすべきだらうかといふ。そこでたんかい國では評議の結果、玄宗皇帝は色を好むと聞いてゐるから、美人を集めて踊らせ、玄宗がそれに見とれてゐる間に討伐しようとなつて、舞



（藏大帝京東） 「軍舟きてわく」

樂殿として、天の釣橋をつくる。愈々くわてきの軍船が攻入ると、しいふの軍では、計劃の通り天の釣橋の上で、美人の群に舞樂をやらせてゐる。之を見ると、攻撃軍の者共は、面白さに幻惑されてしまふ。此處へしばとんの天狗が出て来て、敵の謀を傳へ、浮具をとつて馬の足にはかせると、波の上を走ること平地の如くなるだらうと教へる。教へられた通りにすると、しいふの軍は大敗して將士悉く死んでしまふが、通力自在なしいふ兄弟だけは残り、いよく兩軍の大將二人づゝの戦となると、しいふ兄弟は首を斬られる。斬られた首は空に舞ひあがる。

四段目 大戦に勝つた玄宗は、くわてきの勸により、名香を十二の香爐に入れて殿中に焚く。「先づ一ばんには梅檀香、そも此香と申は……」と一々香の歴史と功德とがたゝへられ、此處に一種の節

事がある。最後に反魂香を焚くと、「不思議や楊貴妃の御姿煙の中に現はれ」るのである。皇帝喜んで抱きつかうとすると直に姿がきえる、皇帝が悲歎にかきくると楊貴妃の姿がまた現れて、しみんと口説き泣くのである。やがて「わが本體は大日如來、垂跡は熱田大明神、化身は今の楊貴妃なり、君の煩惱をしづめん爲め、かりの此世に生れたり、さるにても御かたきしいふが事、その身は忽ち亡ぶといへども、しんは此世に止まりて、まけい國の外道となり、己が看屬引具し御殿に入らんとひしめくなり、急ぎ御殿になる天をさし、桑の弓に蓬の矢をそへ、官人達に守護させ給へ」といつて、即ち大日如來となり、光と共に失せるのである。

五段目 玄宗皇帝の後虞氏君は少しも嫉妬心なく、却つて、楊貴妃の像を畫かせて、之を玄宗に見せるのであるが何故に楊貴妃の像を畫かせたかとの間に對して、貴妃の姿は三十二相をそなへてゐるからだといつて、三十二相の姿を、委づくして説明する。玄宗は大に喜んで、虞氏を愛する。

六段目 玄宗皇帝色、好むが爲に國家に争亂起ること度々に及ぶ。萬民が其苦を訴へると、皇帝は翻然として悔いて、くわてき兄弟を四百餘州の探題となし、白樂天を國の元首とする。天寶二十四年霜月六日、宮中に琵琶琴を弾じて祝賀の折節、天俄にかきくもり、震動雷電して雨車軸を流すが如くである。やがて丑寅の方より、夜叉羅刹の如き赤鬼數多來つて、火焰を吐きながら、人を吞まうとする。戌亥の方から、ついで又辰巳の方から、しいふ及しいふ二人の首が御殿に入り、帝に迫る。嵩と白馬が來つて、此二つの首を蹴立てる。二つの首はくわてき兄弟を提さげて去らうとする。宮殿では上を下へと鼎の沸くが如き大亂闘の後、二つの首は平げられてしまふ。その後玄宗の御代靜に治ること一萬八千歳。

【解説】 萬治頃の作品とは思はれぬほど、大規模にして劇的でもあり、架空ながらも面白いものである。第一段の梅櫻の花戦も賑かであり、未だたにかい國に知られぬ船といふもの一萬隻をつくるといふのも愉快であり、天の吊橋をつくつて、その上で美人に踊らせ、舞樂を奏するといふ突飛な考案は、頗る操芝居的である。第四段の十二種の焚香の景事といひ、第五段の三十二相の姿づくしの節事といひ、更に第六段の終のからくり仕掛や糸操仕掛の大活劇といひ、まことに絢爛を極めたもので、恐らく觀衆の心を躍らせたことであらうと思はれる。かうして機巧や糸操の、子供だまし風の架空的、浪漫的方面のみでなく、楊貴妃と玄宗との、反魂香をかりての口説場の如き、頗る情味たつぶりなもので、文章またかなり妙味に富んでゐて、注目すべき作品であると思ふ。而も作者は勿論太夫をも明かにし得ないのは惜しい。ひよつとしたら出羽掾の正本かとも思はれるが、曲節付の點から見ると、さうとも言へぬ。唯手がよりといへば、この曲の挿繪が丹後の正本と傳へられる『よろひがへ』のそれと同筆であることである。なほ、白馬のお告げを白樂天に占はせる事や、殊にその時に楊貴妃が日本の大明神といふ神の化身だといふ點は、頗る面白。

【影響】 最初の梅と櫻の枝をもつての上臈の花戦は、近松によつて『國性爺合戦』に取入れられ、更に反魂香の應用は『傾城反魂香』や後の『一谷嫩軍記』などにも用ひられてゐることは誰にも分るが、この時代に楊貴妃の幻像を如何にして見物に見せたかわからないのは物足らぬ。

本曲は寛文五年の「熱田大明神の本地」と少しく關聯する所があり、寛文三年刊「玄宗皇帝」(楊貴妃物語)や、寶永五年正月刊の江戸土佐少掾の正本「唐玄宗」に、多少の影響を及ぼしてゐる。後の兩者共に構想は異なるが、決して

無關係ではない。尤も「唐玄宗」の方は「玄宗皇帝」の改作であるといつてもいいもので、それについては、別の「土佐淨瑠璃研究」にゆづる。

【出處】 支那物語「天寶遺事」や「楊太真傳」による處が多い。

○酒典 童子若壯

江戸さつま太夫正本

【體裁】 帝國圖書館藏本。内題には「酒典童子若壯」とあるが、題簽の破れ残りには「どうじ……」とあつて、其右側に「江戸さつま太夫正本」、左側に「しゆてんどうじ……やぶり」とある。左側の不明の文字は、第四段にて、酒呑童子が牢破りをする事から推して、恐らく「牢破り」といふのであらう。上段に「新板」の文字がある。半紙

「酒典童子若壯」 (帝國圖書館藏)

形十六行、十八丁半。柱に上下とあり、四段と三段とを境にして、二巻に分れ、一冊に綴じてある。挿繪兩面六あり、山本九兵衛版。【太夫・刊年】 江戸さつま太夫といふのは、二代目さつま太夫であるべく、奥書に刊記が萬治三年八月吉日とある。



【形式・曲節付】 六段曲でなくて、江戸淨瑠璃に珍らしく五段より成り、各段首尾に定形句がある。曲節付は三重のみが見られる。

【梗概】 初段 桓武天皇の時、越後の寺泊に、いなせのぜんじと、つなといふ弓取があつた。子を悪童丸といつて十三歳。丈高く、眼は火焰の如く、怒れば山も崩す勢である。元來父とつなが四十に及んでも子がないので、信濃